

学力向上推進プロジェクト事業

学力向上推進協議会報告書

～静岡県の子どもの「確かな学力」育成に向けて～

静岡県学力向上推進協議会

平成28年12月20日

はじめに

この8月は、オリンピック・パラリンピックがブラジルのリオで開催されました。静岡県勢の活躍に、県民が湧き立った、そんな夏でした。毎年、この時期は学力・学習状況調査の結果発表なのですが、本年度は集計のトラブルにより、10月にずれ込んだことは、記憶に新しいことと思います。

本年度も、昨年度に引き続き安定した結果を小学校・中学校ともに残すことができました。こうした結果は、先生方・市町教育委員会関係者のみなさんの御尽力と、子どもたち、そして保護者・地域が一丸となった「オール静岡」の取組の賜物です。

これは、全国学力・学習状況調査を活用した「PDCA改善サイクル」(W-PDCAサイクル)のスケジュール感が県・市町・学校レベルで共有され、同一歩調での取組が定着してきたことによるものです。まさに、「オール静岡」の取組による大きな成果です。

静岡県では、この全国学力・学習状況調査に関して、市町教育委員会・学校に学力調査の問題や質問紙調査における結果・分析等の「情報提供」を行っています。それが、チャップアップコンテンツの配信等であり、分析支援ソフトの提供です。

また、市町教育委員会の指導主事をはじめ、両教育事務所・総合教育センター・義務教育課の指導主事が、一同に会して学力向上連絡協議会を年2回開催し、それぞれの取組について情報共有を行っています。

他県では、全県体制で研修等を実施している「統制型」いわゆる「トップダウン型」の取組が多いようです。静岡県は、従前より「校内研修」への取組が熱心であるという下地がありました。改善点が明確になれば、主体的に取り組んでいく気風があるという特徴を生かし、県からの情報発信を受け、市町教育委員会・学校が主体的に、児童生徒の実態を踏まえた授業改善に取り組んできました。各市町・学校のがんばりを支える県、という関係です。

こうした取組は、「情報提供型」の取組と呼べると思います。静岡県が主語でなく、〇〇市は、〇〇小学校は、〇〇学級は、〇〇さんは、という個に応じた指導への対応を求めてきたのが、静岡県の教育であり、これが静岡の良さであると考えます。

冒頭話題にしたオリンピックは、金メダル・銀メダル・銅メダル、限られた入賞の枠をみんなで争うこととなります。これは、競争であり、相対評価の世界です。しかし、この全国学力・学習状況調査については、順位の問題ではありません。結果を活用し、PDCAサイクルを回すことで、学校改善・授業改善にどうつなげていくかが重要であり、子どもたち一人一人の成長につなげていくことが何よりの目的です。

次期学習指導要領を視野に入れながら、引き続き、県教育委員会からの情報提供を受け、PDCAサイクルを回すなかで、自校の実態を踏まえ、必要な改善策がなされることを期待しています。

静岡県学力向上推進協議会
会長 村山 功

◇◇◇ 目 次 ◇◇◇

はじめに

1	全国学力・学習状況調査の意義	2
	(1) 全国学力・学習状況調査の目的、対象学年、調査事項	
	(2) 学力の捉え	
	(3) 学力の3要素を押さえた全国学力・学習状況調査の問題	
2	本年度の調査結果の概要と分析	3
	(1) 良好な結果となった要因	
	(2) 義務教育9か年で学力を育成する	
	(3) 教科別平均正答率の状況	
	(4) 教科別の設問別正答率の状況	
	(5) 「国語科」の授業改善に向けて	
	(6) 「算数・数学科」の授業改善に向けて	
	(7) 児童生徒質問紙・学校質問紙結果の概況	
3	学力向上推進プロジェクト事業における取組	34
	(1) 静岡県教育委員会（推進地域）の取組	
	(2) 伊豆市教育委員会（推進地区）の取組	
	(3) 伊豆市立修善寺小学校（推進校）の取組	
	(4) 湖西市教育委員会（推進地区）の取組	
	(5) 湖西市立新居小学校（推進校）の取組	
4	確かな学力を育むために	67
	(1) 各校における授業改善の一層の推進	
	(2) 「PDCA改善サイクル」の共通実践	
	(3) 研修の評価と課題に対応した内容の充実	
	(4) 「学びの連結」による家庭学習の推進	

参考資料

資料1：学力向上推進協議会設置要項

資料2：静岡県の子どもの学力向上のための提言

資料3：授業改善の視点

おわりに

1 全国学力・学習状況調査の意義

(1) 全国学力・学習状況調査の目的、対象学年、調査事項

文部科学省では、平成 19 年度から開始した全国学力・学習状況調査（以下、本調査）の目的として、次の 3 点を掲げている。

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図ること
- 教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立すること
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てること

調査の対象学年は、小中学校ともに最終学年の 6 年及び 3 年であり、実施規模は、平成 19 年度から平成 21 年度までは全ての児童生徒を対象、平成 22 年度及び平成 24 年度の 2 か年は抽出率平均 30% 程度の児童生徒を対象に実施している（平成 23 年度は東日本大震災により調査は中止）。平成 25 年度以降は、全ての児童生徒を対象に調査が実施され、平成 28 年度（本年度）の本県の参加は、778 校であった。（学校行事等で、後日、調査を実施した学校を除く）

調査事項は、児童生徒に対する調査として、国語、算数・数学の学力調査及び質問紙調査、学校に対する調査としては学校質問紙を行った。なお、平成 24 年度、27 年度は学力調査として理科が実施されたが、本年度は実施されていない。

(2) 学力の捉え

学力については、「学校教育法等の一部を改正する法律」が平成 19 年 6 月 27 日に公布され、次のとおり法的に初めて規定された。

- 学校教育法第 30 条第 2 項

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

この改正を受け、平成 20 年 3 月 28 日に改定された小中学校学習指導要領総則の教育課程編成の一般方針においても、次のとおり同様の押さえをしている。

- 学習指導要領第 I 章総則第 1 教育課程編成の一般方針

基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養う。

各教員は、学力の 3 要素（枠内の下線部分）を押さえた上で、日々の授業実践に取り組み、児童生徒に「確かな学力」を身に付けるよう努めなければならない。

(3) 学力の 3 要素を押さえた全国学力・学習状況調査の問題

本調査問題は、学力の 3 要素を把握・分析するためにバランスよく作成されている。

<学力の3要素>		<全国学力・学習状況調査>
基礎的な知識及び技能	→	主として知識に関する問題A
思考力・判断力・表現力その他の能力	→	主として活用に関する問題B
主体的に学習に取り組む態度	→	児童生徒質問紙調査

本調査は、実施要領に示されているとおり、「本調査により測定できるのは学力の特定の一部分ではある」が、児童生徒の学力の3要素が確かに身に付いているかを把握するために客観性の高い重要な調査である。

2 本年度の調査結果の概要と分析

今年度についても、昨年度と同様、全ての科目で全国の平均正答率を上回り、全体的には、小中学校ともに安定した状況を示す結果となった。また、児童生徒質問紙においても「自分にはよいところがある」と回答した自尊心が高い児童生徒や、「地域の行事に参加している」と回答した地域を愛する児童生徒が多くおり、こうした状況からも家庭や地域の支えが確かな学力の育成に大きく影響していると考えられる。

さらに、本年度の中学3年生は、平成25年度調査において、小学校国語Aで全国最下位となったが、今回の調査結果からは、この学年の子どもたちの学力の順調な定着が確認された。

一方、児童生徒質問紙においても、小学生の国語の授業に対する関心や計画的な家庭学習への取組など、引き続き高めていきたい項目が見られた。

(1) 良好な結果となった要因

ア 早期対応による取組

平成25年度の結果を受け、平成26～28年度に共通して取り組んだことは、本調査を活用することであった。このことは、学校質問紙の肯定的な回答の割合からも読み取ることができる（表1）。以下、本文表中の質問紙調査結果の数値は、肯定的な回答の割合を示す。

表1 平成25～28年度の本調査結果の活用状況

質問事項 (学校質問紙)	県	小学校				中学校			
		H25	H26	H27	H28	H25	H26	H27	H28
昨年度の全国学力・学習状況調査の自校の結果を、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか	静岡県	75.4	97.3	97.9	96.5	66.6	93.6	93.2	95.9
	全国	88.7	93.6	95.8	97.0	84.9	90.4	93.2	94.8
	A県	56.9	82.8	90.5	93.7	56.5	81.3	88.7	94.3

本調査の活用率を上げるための具体的な取組として、第一に早期対応が挙げられる。8月に予定されている本調査の結果発表を待たずに、5月初旬に各学校が独自に採点・集計を行う。さらに調査問題や抽出により学校から報告された早期対応の結果を分析し、標準通過率SPECを設定するとともに、授業改善のポイントを資料にまとめ、各学校に伝える。

平成27年度、28年度については、これら授業改善のポイントを視覚的な効果が高く、短時間で情報共有、情報活用が期待できる動画コンテンツとしてまとめ、その普及を強化した。特に、平成28年度に至っては、内容の精選を図り、より短時間で視聴できるよう配慮した。

こうした取組により各学校では、児童生徒の実態を早期に把握するとともに、夏季校内研修修において、改善方策を検討し、夏季休業以降の授業改善に生かすことで、児童生徒の学力保障につなげることができた。

イ 「PDCA改善サイクル」による通年の取組

調査実施から早期対応による取組を一周目のPDCAサイクルとし、文部科学省の結果公表後の学力向上推進協議会、学力向上連絡協議会等の取組を二周目のPDCAサイクルと捉え、いわゆるW-PDCAサイクルを回すことで、授業改善のポイントの周知を図り、学校現場の学力向上を推進した。今年度で2年目となるこの取組については、県教育委員会、市町教育委員会、各学校が「PDCA改善サイクル」(W-PDCAサイクル)のスケジュール感を共有することで、より一層の成果が期待できると考えている(図1)。

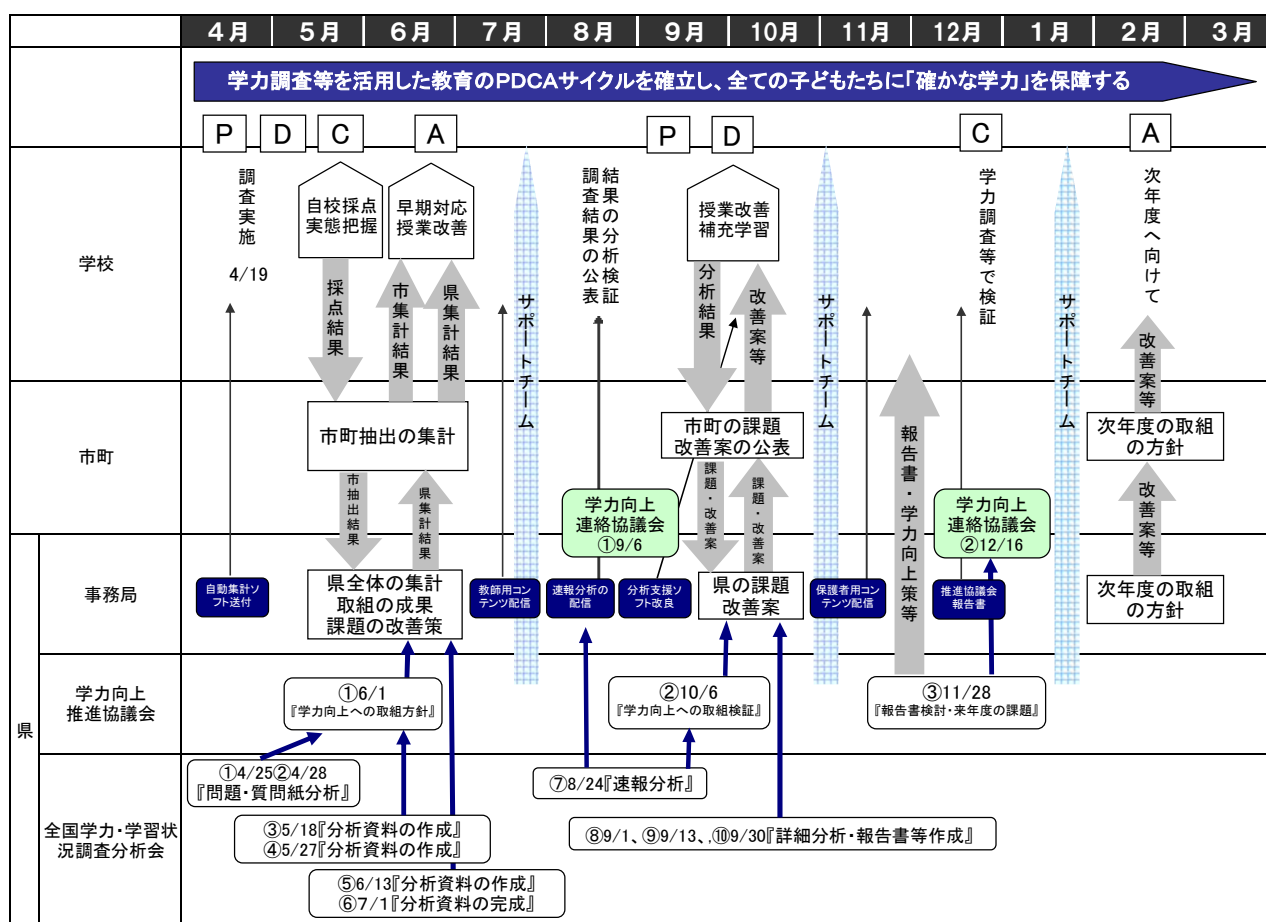


図1 平成28年度学力調査等を活用した本県の「PDCA改善サイクル」

ウ 他県比較による分析

本調査結果において、平成25年度段階で本県と似た傾向にあったA県と比較を行ってみる。類似点は以下のとおりである。

- ①小学校の結果が低下傾向で芳しくない。
- ②中学校の結果は概ね良好である。
- ③本調査を活用している割合が低い。

A県も本県と同様に、平成 19 年度の調査開始時点では、小中学校ともに全国と比べて高い平均正答率であった。しかし、その後小学校における結果が低下傾向を示している。そのA県のここ数年の状況を見ると、中学校はほとんど変化がないが、小学校は全国平均を下回る状況が続いている（表 2）。

表 2 平成 25～28 年度の 4 科目合計の全国平均との差（理科を除く）

県	小学校				中学校			
	H25	H26	H27	H28	H25	H26	H27	H28
静岡県	-9.9	+4.4	+6.4	+5.8	+6.4	+10.3	+7.7	+9.3
A 県	-2.2	-8.6	-6.9	-5.7	+5.2	+5.3	+6.8	+4.9

また、A県の本調査を活用している割合は、ここ 2 年で改善傾向が見られるものの、まだ全国平均までには達しておらず、本県と比較して本調査への対策が遅れたと思われる。

これらのことから、ここ数年の本県の学力調査結果の伸び、良好な結果の維持は「調査問題や結果の活用」によるものと言える。

ここで言う「調査問題や調査結果の活用」とは、単に調査結果を分析して教職員が実態把握をしたり、保護者や地域に分析結果を説明したりすることだけを示しているわけではない。また、他県で物議を醸した調査直前の調査対策等、対処的な活用でもない。

ここ数年で、学校現場では、早期対応等の取組によって、該当学年以外の教職員も問題の傾向を知り、今、求められている学力とは何かを考え、授業改善に取り組んだことが良好な結果につながっていると捉えている。

エ 調査形式の理解と無解答率との関係

平成 25 年度、本県においては、調査問題後半の無解答率が大きく取り上げられた。児童は、学力調査の形式に慣れておらず、問題の最後まで行き着いていないという状況であった。これでは、調査の土俵にすら上がっていない状況であり、真の学力が適切に測られていたとはとても言えない状況にあったと考える。

しかし、上述した本調査の活用により、児童も調査形式の傾向を知り、全ての問題と対峙する状況になった。そのことは本年度の国語 A・B の設問別無解答率が全国を下回っていることから分かる（図 2・3）。

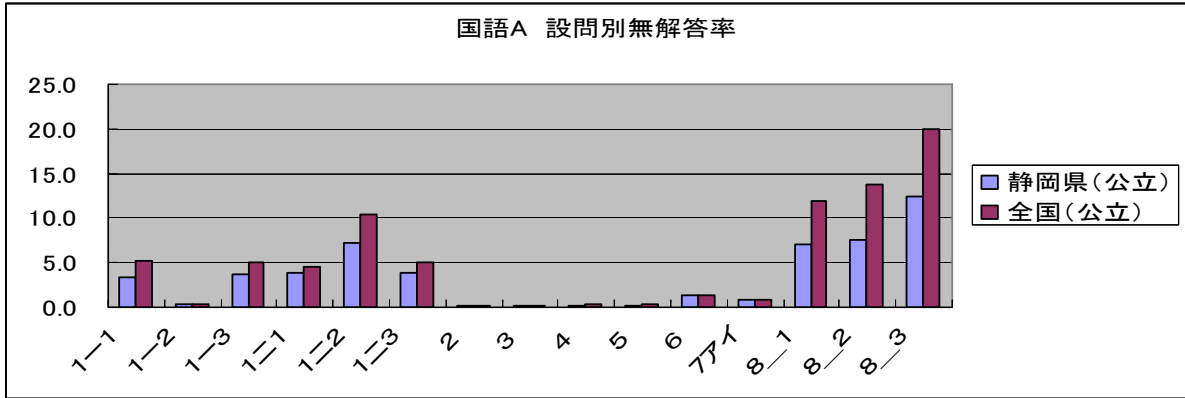


図2 平成28年度 小学校国語A 設問別無解答率

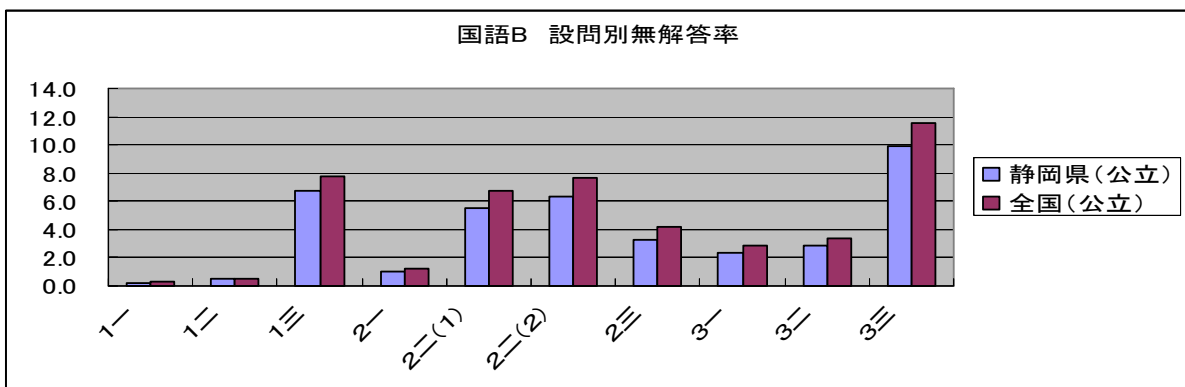


図3 平成28年度 小学校国語B 設問別無解答率

(2) 義務教育9か年で学力を育成する

ア 小学校における学習基盤の確立

本調査における小学校の結果は、国語Aで全国最下位になった平成25年度以前も、あまりよい状態とは言えなかった。各教科における平均正答率は全国と同程度か、もしくは若干下回る状況が続いていた。そのため、毎年のように3年後の中学校の結果が悪くなるのではないかと危惧する状況であった(表3)。しかし、義務教育9か年の出口である中学校については、毎年、安定した結果を出し続けており、小学校と中学校のアンバランスな結果がしばらく続いていたのである(表4)。

上述したこの状況と、早期対応策によりV字回復した平成26年度の状況を鑑みると、小学校においては、実は、基礎的な知識などは、従前より身に付いており、義務教育9か年で培う学力の基礎、基本は小学校段階でできていたと考えるのが妥当であると考えられる。

小学校段階でそれが結果数値として表れていなかったのは、小学校において本調査が十分に活用されなかったこと、そして、子どもたちが調査形式に慣れていなかったことが原因として考えられる。言い換えれば、中学校の好成績につながる学習基盤の確立は小学校段階で適切に進められ、さらに平成26年度以降の早期対応策により、小学校においても本来あるべき結果が伴ってきたと考えるのが妥当と考える。

		H19	H20	H21	H22	H24	H25	H26	H27	H28	
	国語A	1.1	0.2	0.9	-0.8	-1.2	-5.0	-0.1	1.7	3.6	
	国語B	3.0	1.6	-1.3	0.6	-1.5	-2.1	2.9	2.4	1.1	
	算数A	0.5	-0.2	0.6	-1.0	-1.2	-1.0	1.3	2.0	0.9	
	算数B	0.0	-0.2	-0.7	-0.9	-1.3	-1.8	0.3	0.3	0.2	
	理科					-2.8			-0.6		
国語A	学習指導要領の領域	話すこと・聞くこと	6.3	2.2	0.6	-0.7	0.1	-11.9	2.1	2.8	1.0
		書くこと	-0.2	-0.9	0.1	-1.1	-3.4	-8.0	2.2	0.0	2.9
		読むこと	-1.2	-6.2	-0.5	1.1	0.5	-10.0	1.3	1.0	0.6
		言語事項	0.8	0.1	1.2	-1.2	-1.6	-4.2	-0.5	1.7	4.7
国語B	学習指導要領の領域	話すこと・聞くこと	1.9	3.2	-1.8	0.6	-0.3	-0.3	2.4		2.6
		書くこと	3.6	1.6	0.2	-0.2	-1.3	-0.4	5.5	2.8	0.5
		読むこと	3.0	1.9	-1.3	0.9	-2.0	-4.5	3.1	2.7	1.0
		言語事項	-0.3		-3.0	0.9	0.0	0.3	1.4		
算数A	学習指導要領の領域	数と計算	1.4	-1.6	-0.2	-1.1	-0.9	-1.0	0.7	2.5	0.2
		量と測定	1.2	0.9	0.4	1.2	-0.9	-1.5	0.4	1.6	0.3
		図形	3.1	5.3	3.0	-0.2	0.5	0.7	2.3	3.3	3.0
		数量関係	-2.0	-1.9	0.4	-5.2	-5.3	-1.4	2.1	-1.1	1.8
算数B	学習指導要領の領域	数と計算	1.2	0.6	-0.1	0.3	-1.8	-3.0	0.5	0.7	0.2
		量と測定	1.3	0.9	-1.5	-2.5	-1.7	-1.1	-0.1	0.6	0.1
		図形	0.4	0.7	-0.1	-0.4	-2.2	-0.7	0.4	1.2	0.8
		数量関係	-0.1	-0.9	-0.8	-1.4	0.2	-2.2	-0.3	-2.7	0.0

		H19	H20	H21	H22	H24	H25	H26	H27	H28	
	国語A	1.4	1.8	2.2	1.5	1.0	0.7	1.4	0.5	1.3	
	国語B	4.0	3.3	2.8	2.4	0.7	1.3	1.5	1.9	3.4	
	算数A	3.7	3.9	3.1	2.6	3.2	1.3	3.5	1.6	2.1	
	算数B	2.9	3.5	3.8	3.2	3.4	3.1	3.9	3.0	2.5	
	理科					2.2			2.3		
国語A	学習指導要領の領域	話すこと・聞くこと	1.1	2.3	2.0	2.6	1.1	0.9	1.1	1.2	1.8
		書くこと	2.3	1.7	3.9	2.0	1.7	-0.3	1.7	1.2	1.8
		読むこと	0.7	2.2	1.9	1.8	-0.2	0.1	1.3	1.7	1.8
		言語事項	1.4	1.4	2.3	0.9	1.2	1.1	1.4	-0.1	0.7
国語B	学習指導要領の領域	話すこと・聞くこと	0.6			3.9	1.4			1.5	
		書くこと	5.9	5.1	3.6	3.8	1.9	1.5	3.5	3.2	5.3
		読むこと	4.9	3.3	2.8	2.2	0.4	1.3	1.8	2.1	3.4
		言語事項	4.1	7.7				0.4	1.7		
数学A	学習指導要領の領域	数と式	3.7	3.8	2.8	2.6	3.2	1.5	1.8	1.3	2.1
		図形	3.1	3.6	3.6	3.1	3.1	1.2	3.8	2.0	2.5
		数量関係(関数)	3.8	4.3	3.0	2.1	3.4	0.9	3.4	1.8	1.2
		(資料の活用)						3.1	7.9	0.4	3.1
数学B	学習指導要領の領域	数と式	3.8	6.1	4.6	3.7	3.9	5.6	3.8	3.7	2.4
		図形	3.9	4.1	3.3	4.6	2.9	3.9	4.4	3.3	4.0
		数量関係(関数)	3.0	2.5	3.8	1.8	3.5	0.7	4.3	2.2	1.0
		(資料の活用)						2.8	1.9	2.9	5.2

イ 中学校段階における安定した生徒指導

表5は全国と本県の標準偏差である。標準偏差は、個々の児童生徒の正答率のちらばりの大きさを表す。正答率が高い生徒と低い生徒の差が大きいと標準偏差は大きくなり、逆に、その差が小さいと標準偏差は小さくなる。

本県の中学校の結果が良好である理由は、どの教科においても、標準偏差が比較的小さいことが挙げられる。標準偏差が小さいということは、学力のばらつきが少なく、低学力層、いわゆる学習指導で取り残されている生徒が少ないと考えられる。

	国語A	差	国語B	差	数学A	差	数学B	差
全 国	5.4		2.3		8.3		3.5	
静岡県	5.0	-0.4	2.2	-0.1	8.2	-0.1	3.5	0.0

この背景には、極端な反社会傾向の生徒が他県に比べて少ないこともその要因として考えられる。小学校に比べ、中学校では、生徒の心身の発達に伴い、個々の関心、授業に臨む態度も多様化しやすい時期である。

表6は「平成26年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における暴力行為の件数とその際、被害者が病院で治療した件数である。発生件数に対して、病院治療の割合が多ければ、暴力行為が比較的程度が重い又は悪質な事案である可能性が考えられる。本県は全国比較において対教師暴力、生徒間暴力、対人暴力ともにその割合は下回り、特に、対教師暴力においてはその割合が半分程度である状況を鑑みると、生徒と教師の関係が比較的良好であり、極端な反社会傾向の生徒が少ないと言える。こうした生徒指導上の安定が、全ての生徒が学習に取り組む環境を作り、結果として学力下位層の底上げにつながっていると考える。

また、児童生徒質問紙を見ても、本県においては、家族と学校での出来事について話をする生徒や地域行事に参加する生徒が多く、地域、家庭、学校がつながっており、生徒を取り囲む環境が比較的安定していることも考えられる。

表6 平成26年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(文部科学省)

		発生件数	病院治療件数	割合	全国差
対教師暴力	全国	6058	1362	22.5%	-10.9
	静岡県	207	24	11.6%	
生徒間暴力	全国	19744	4612	23.4%	-2.2
	静岡県	791	167	21.1%	
対人暴力	全国	918	258	28.1%	-0.8
	静岡県	33	9	27.3%	

(3) 教科別平均正答率の状況

平成19年度から平成28年度にわたる過去9回の本調査結果から静岡県の小中学生の現状を、分析した。

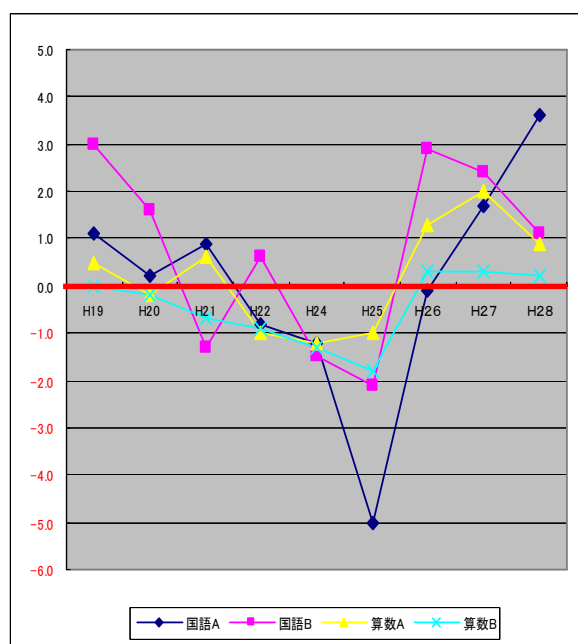
図4のグラフは、本県と全国の平均正答率との差の推移を表したものである。縦軸は本県の平均正答率から全国の平均正答率を引いた差を、横軸は実施年度を表している。

グラフから読み取れることは、今回の学力に関する調査では、小学校の国語A B、算数A B、中学校の国語A B、数学A Bの全てで、全国の平均正答率を上回ったことである。

図5のグラフは、平成25年度小学校と平成28年度中学校の本県と全国の平均正答率との差の推移を表したものである。縦軸は本県の平均正答率から全国の平均正答率を引いた差を、横軸は実施年度を表している。

グラフから読み取れることは、平成25年度調査において、小学校では4科目全てで全国平均正答率を下回っていたわけであるが、そのときの6年生が、今回中学3年生になり、4科目全てで全国平均を上回る成績を収めていることである。本県の中学3年生については、全国的にみても高い平均正答率となっている。平成19年度時点と比較すると、若干全国の平均正答率との差は縮まっているが、どの県も力を入れ、県ごとの差が小さくなってきている現状を踏まえれば、良好な状況にあるといえる。

【小学校】



【中学校】

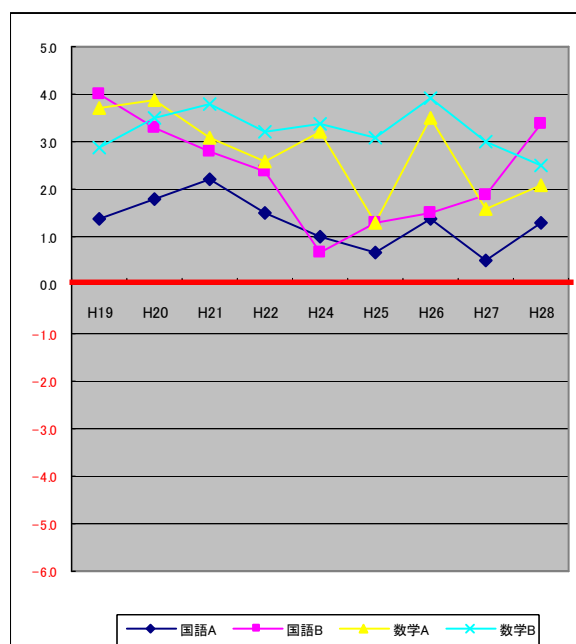


図4 調査結果における平均正答率の静岡県と全国との差の推移①（平成19～28年度）

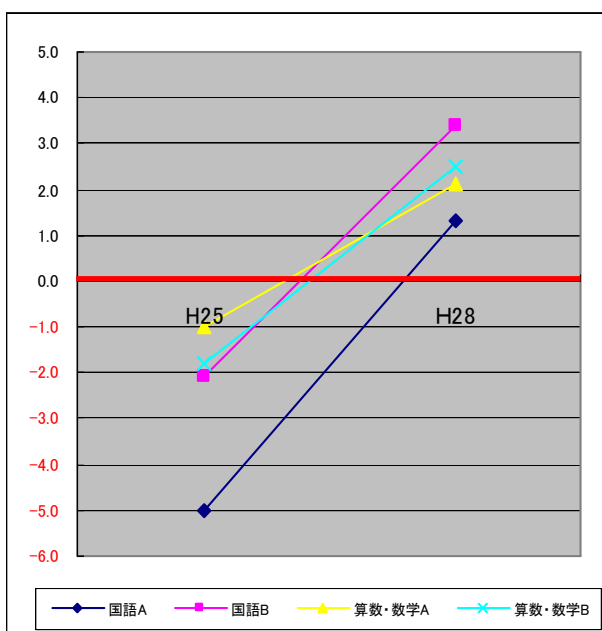


図5 調査結果における平均正答率の静岡県と全国との差の変化② (平成25年度小学校と平成28年度中学校)

(4) 教科別の設問別正答率の状況

(1) で取り上げた平均正答率は、教科ごとに設問別正答率を集計して得られる数値である。本県の児童生徒の状況を把握するためには、設問ごとの正答率について検討する必要がある。

次ページ以降に、本年度の本県の本調査結果の設問別正答率の状況を全国と比較し、表4～表8と図3～10の散布図に表した。散布図の縦軸は静岡県の正答率から全国の正答率を引いた差を、横軸は静岡県の正答率を表している。また、表中には、標準通過率 (SPEC) * も示した。

* 標準通過率 (SPEC) とは

設問番号	①1—(3)	②1二(1)	③2—	④5—	⑤5—
県正答率	90.2	60.9	63.3	61.8	21.5
SPEC	90	80	80	80	50
全国正答率	92.5	58.4	53.1	59.5	19.8

標準通過率 (SPEC : the Standard (Shizuoka) passing rates for education)

標準通過率とは、全国学力・学習状況調査の結果から課題となっている分野を明らかにし、授業改善や教育施策の見直しに生かすため、到達することが望ましい一定の基準として静岡県が独自に設定した値である。標準通過率とは、正答の割合である通過率が学習指導要領に示された内容について、標準的な時間をかけ、学習指導要領上想定された学習活動が行われた場合、どの程度の水準に達していることが望ましいかを示す数値である。

全国の平均正答率のみに着目することなくSPECも併せて見ることで、今付けたい力についてどの程度達成しているか考える機会としたい。

国 語

【小学校国語】

① 概要

小学校国語は、知識A問題が15問、活用B問題が10問、合計25問である。このうち正答率で本県が全国より上回っている設問は19問、下回っている設問は4問、同率は2問とおおむね良好な結果であった。また、無解答率が全国平均より高いものではなく、同率は5問であった。正答率、無解答率ともに平成26年度以降良好な状況が続いている。B問題における記述式の問題4問のうち3問は、全国の上回ったものの引き続き課題がある。

目的や意図に応じて情報を関係付けながら話し合うことの設問はよくできている。漢字を読んだり書いたりすること、言葉に関する知識・理解等を問う設問は、一部に課題があるものの、改善の傾向にある。一方、文章と図、表を関係付けて分かったことや自分の考えを簡潔に書くことは、依然として課題がある。

② 国語についての意識

- ・ 「国語の勉強は好き（本県 52.3%、全国 58.3%）」 「国語の授業の内容はよく分かる（本県 76.8%、全国 80.7%）」 と回答した児童の割合は、依然として全国平均を下回り、昨年度より低下した。「将来、社会に出たときに役に立つ（本県 88.8%、全国 89.2%）」 については増加し、全国平均との差は縮まる傾向にある。
- ・ 「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くこと」を難しいと思わない児童の割合は35.4%で、全国平均の39.3%を下回っており、依然として課題がある。
- ・ 「読書は好き（本県 72.4%、全国 74.6%）」 と回答した児童の割合は、年々増加しているが依然として課題がある。
- ・ 「最後まで解答を書こうと努力した（本県 76.0%、全国 75.1%）」 と回答した児童は全国を上回っている。

③ 主として「知識」に関する問題A

表7 小学校 国語A 県正答率・標準通過率（SPEC）・全国正答率の比較

設問番号	① 1一(2)	② 1二(3)	③ 6	④ 8三
県正答率	98.5	63.9	64.6	54.5
SPEC	90	80	70	60
全国正答率	98.5	64.2	63.9	41.8

- ・ 漢字を正しく読んだり書いたりすることについては、標準通過率（以下SPEC）を80～90に設定した。「貯金」を正しく読む設問では、SPEC90に対して98.5%（全国98.5%）と大きく上回ったが、「ソウダン」を漢字で書く設問がSPEC80に対して63.9%（全国64.2%）等、一部の設問で下回り、課題がある。

【設問1一(2)、二(3) “図6①、②”】

- ・ 登場人物の人物像について、複数の叙述を基にして捉えることについては、SPEC70に対して64.6%（全国63.9%）と下回り、課題がある。

【設問6 “図6③”】

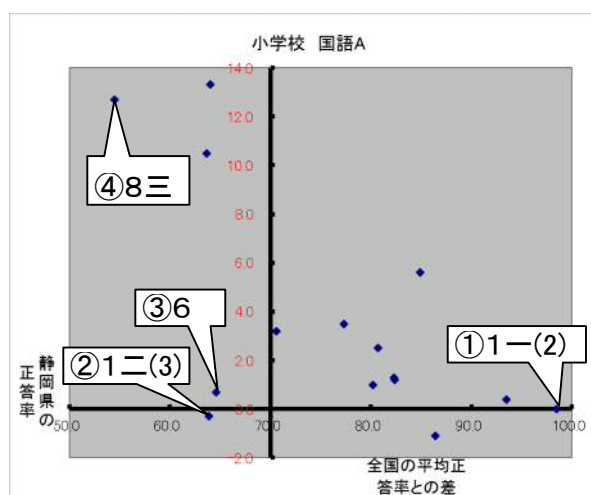


図6 小学校国語A設問別正答率の状況

【中学校国語】

① 概要

中学校国語は、知識A問題が33問、活用B問題が9問、合計42問である。このうち本県が全国より上回っている設問は39問、下回っている設問は3問と、良好な結果であった。

また、無解答率が全国平均より高いものは1問、同率は8問であった。正答率、無解答率ともに良好な状況が続いている。特にB問題における記述式の3問は全て全国の正答率を上回った。

登場人物の心情や行動に注意して読むことや、相手や場に応じた言葉遣いなどに気を付けて話すことは、良好である。一方、複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを具体的に書くことや、根拠を明確にして自分の考えを書くことについては、依然として課題がある。

② 国語についての意識

- ・ 「国語の勉強は好き」と回答した生徒の割合は、小学校6年時では50.2%であったが、今回の調査では57.9%となり、改善が見られた。
- ・ 「国語の勉強は大切（本県88.5%、全国89.1%）」「国語の授業の内容がよく分かる（本県72.4%、全国74.1%）」「将来、社会に出たときに役に立つ（本県83.8%、全国84.6%）」と回答した生徒の割合は、全国平均と比べ下回り、課題となった。
- ・ 「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている（本県67.8%、全国62.2%）」と回答した生徒の割合は、本年度も全国平均を大きく上回っている。
- ・ 「国語の授業において、考えの理由が分かるように気を付けて書く（本県67.6%、全国66.7%）」「読書が好き（本県72.6%、全国69.9%）」「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くのは難しいと思わない（本県37.5%、全国37.0%）」と回答した生徒の割合は、いずれも全国平均を上回っている。

③ 主として「知識」に関する問題A

表9 中学校 国語A 県正答率・標準通過率・全国正答率の比較

設問番号	①3一	②5一	③9一(2)	④9六
県正答率	85.9	94.7	19.4	39.9
SPEC	90	85	75	70
全国正答率	84.7	93.1	26.1	36.4

- ・ 文脈の中における語句の意味を理解する設問は、85.9%（全国84.7%）であり、良好である。

【設問3一“図8①”】

- ・ 相手や場に応じた言葉遣いなどに気を付けて話す設問は、SPEC85に対して94.7%（全国93.1%）と上回り良好である。

【設問5一“図8②”】

- ・ 「ドクソウ」を文脈に即して正しく漢字で書く設問は、SPEC75に対して19.4%（全国26.1%）、文字の形や大きさ、配列に注意して書く設問は、SPEC70に対して39.9%（全国36.4%）とそれぞれ大幅に下回り、課題がある。

【設問9一(2)9六“図8③④”】

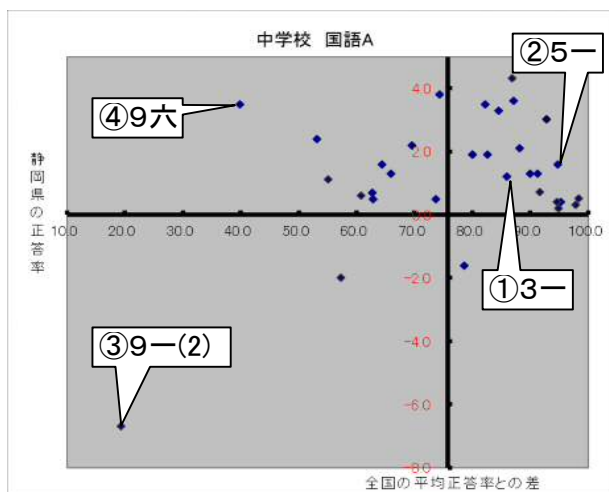


図8 中学校国語A設問別正答率の状況

【小学校算数】

① 概要

小学校算数は、知識A問題が16問、活用B問題が13問、合計29問である。このうち、本県が全国の設問別正答率を上回っているのは19問、下回っているのは9問、同率が1問であり、良好な状況が続いている。

整数、小数、分数の四則計算など、知識・理解や技能を問う問題は、改善の状況が見られている。しかし、割合の問題に代表されるように、依然として「意味の理解」が不十分であることによる誤答が目立つ。記述式の問題については、本年度は全国の正答率を下回っており、依然として課題である。また、問題文から何を問われているのかを理解し、目的に応じて必要な情報を活用することに課題がある。

② 算数についての意識

- ・ 児童質問紙の算数に対する意識を問う質問では、特に、「算数の勉強は大切だと思う（本県92.8%、全国91.9%）」、「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う（本県90.0%、全国89.9%）」と、算数の学習の大切さや有用性を感じている児童の割合は高い。
- ・ 「算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか（本県66.4%、全国67.4%）」「算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考えますか（本県79.8%、全国80.5%）」において、改善の余地がある。

③ 主として「知識」に関する問題A

- ・ 小数を含む除法の意味の理解に課題がある。

【設問1(1)、(2) “図10①、②”】

- ・ 小数の除法や末尾の位のそろっていない小数の加法の計算をすることに課題がある。

【設問2(2) “図10③” 2(3)】

- ・ 整数、分数の四則計算は、おおむね良好である。

【設問2(1)(4)】

- ・ 平成24年度調査で課題であった「三角形の底辺と高さの関係」について、改善の傾向にある。
(H24 57.6% ⇒ H28 81.3%)

【設問5 “図10④”】

- ・ 直方体における面と面の位置関係はよく理解している。

【設問7 “図10⑤”】

- ・ 百分率で表された場面で基準量と比較量の関係をとらえることは、全国の正答率を大きく上回ってはいるが、基準量、比較量、割合の関係を正しく捉えることに依然として課題が残る。

【設問9(2) “図10⑥”】

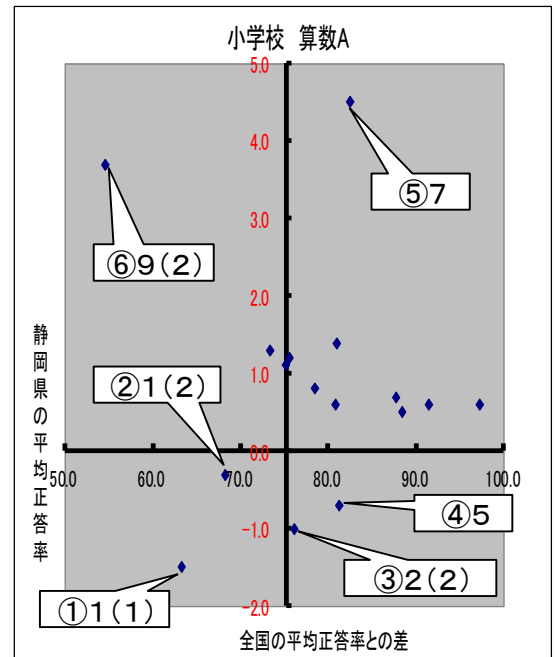


図10 小学校算数A 設問別正答率の状況

表11 小学校 算数A 県正答率・標準通過率 (SPEC)・全国正答率

設問番号	① 1 (1)	② 1 (2)	③ 2 (2)	④ 5	⑤ 7	⑥ 9 (2)
県正答率	63.3	68.2	76.1	81.3	82.5	54.6
SPEC	85	90	90	85	85	65
全国正答率	64.8	68.5	77.1	82.0	78.0	50.9

④ 主として「活用」に関する問題B

- 示された説明を解釈し、用いられている考えを別の場合に適用して、その説明を記述することに課題がある。【設問1(2)“図11⑦”】
- 示された図や情報をもとにものの位置の関係を式に表し位置を特定することや、式に数値を当てはめて、正しく数値を求めることは全国の正答率は上回ってはいるもののSPECを下回り改善の余地がある。
【設問2(1)(2)】
- 示された式の中の数値の意味を解釈し、それを記述することに課題がある。【設問2(3)“図11⑧”】
- 正方形に内接する円の半径についての理解はよくできており、全国の正答率を大きく上回っている。
【設問3(3)“図11⑨”】
- グラフから貸出冊数を読み取り、それを根拠に、示された事柄が正しくないことを記述することに課題があり、全国の正答率も下回っている。
【設問4(3)“図11⑩”】
- 示された序数の式を並べてできた形と関連付け、角の大きさを基に、式の意味を記述することに課題がある。【設問5(1)“図11⑪”】
- 図形を構成する角の大きさを基に、四角形を並べてできる形を判断することに課題がある。
【設問5(2)“図11⑫”】

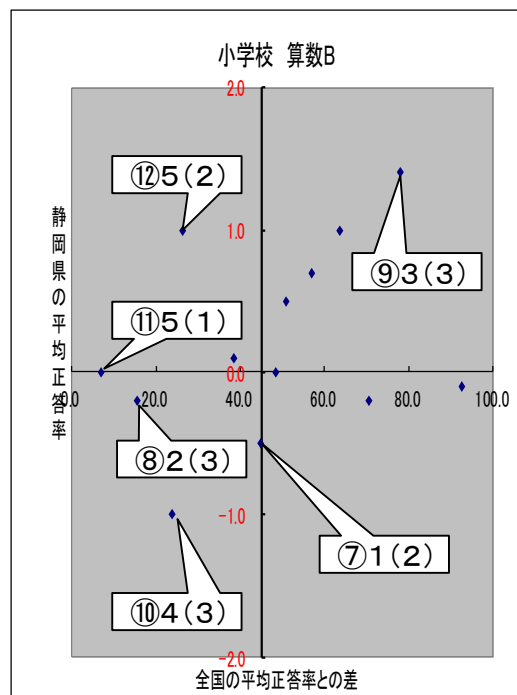


図 11 小学校算数B設問別正答率の状況

表 12 小学校 算数B 県正答率・標準通過率 (SPEC)・全国正答率

設問番号	⑦ 1 (2)	⑧ 2 (3)	⑨ 3 (3)	⑩ 4 (3)	⑪ 5 (1)	⑫ 5 (2)
県正答率	44.7	15.4	77.9	23.9	6.9	26.4
SPEC	60	45	80	40	50	45
全国正答率	45.2	15.6	76.5	24.9	6.9	25.4

平成 28 年度学力・学習状況調査

小学校算数問題【A9】

⑨

次の問題に答えましょう。

(2) バスに乗っている人数は60人です。乗っている人数は、定員よりも定員の20%分多いようです。

定員をもとにしたときの乗っている人数の割合を、百分率を使った次の図に表します。

図の中の「ア」と「イ」には、下の4つの数のいずれかが入ります。

「ア」と「イ」に入る数をそれぞれ書きましょう。

20 80 100 120

小学校算数問題【B5】

⑤

右のような、 30° 、 60° 、 90° の角をもつ直角三角形があります。

この直角三角形を2枚使って、同じ長さの辺を合わせて、次の3種類の図形をつくりました。

(1) 次に、下のように、②の二等辺三角形を選んで形をつくりましょう。

「①」の角が1つの角のまわりに集まるように、②の二等辺三角形を並べていくと、3つで、正三角形ができました。

先生: どうして3つでぴったりつくることができるのでしょうか。

かなえ: $360 \div 120 = 3$ で、角が3になり、わり切れるからです。

先生: そうですね。では、 $360 \div 120$ は、どのようなことを計算している式ですが、説明してみましょう。

$360 \div 120$ は、どのようなことを計算している式ですか。言葉と数を使って書きましょう。その際、「360」と「120」が何を表しているかわかるようにして書きましょう。

【中学校数学】

① 概要

中学校数学は、知識A問題が36問、活用B問題が15問、合計51問である。このうち静岡県が全国の設問別正答率を上回っているのは42問であった。活用B問題については、15問中13問が全国の設問別正答率を上回っており、良好な結果が続いている。

しかし、依然として「意味の理解」が不十分であることによる誤答が目立つ。また、問題文から何を問われているのかを理解し、目的に応じて必要な情報を用いて活用することに課題がある。

② 数学についての意識

- 「数学ができるようになりたいと思いますか（本県 93.4%、全国 91.3%）」「数学の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか（本県 83.3%、全国 81.1%）」と、数学の授業に前向きに取り組んでいる生徒の割合が高い。
- 「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか（本県 41.6%、全国 41.9%）」「数学の授業で学習したことは、将来社会に出たとき役に立つと思いますか（本県 70.7%、全国 71.5%）」に課題があり、改善の余地がある。

③ 主として「知識」に関する問題A

- 基礎的、基本的な知識や技能の定着が良好である。自然数の意味を理解している割合が全国と比べると高いが、SPEC90を下回り改善の余地がある。

【設問1(2) “図12①”】

- 具体的な場面における数量の関係を捉え、比例式をつくることができている。

【設問3(3) “図12②”】

- 比例の式について、 x の値の増加に伴う y の増加量を求めることにおいて課題がある。

【設問9(2) “図12③”】

- 1次関数 $y = ax + b$ について、変化の割合の意味についての理解に課題がある。

【設問10(2) “図12④”】

- 1次関数のグラフから x の変域に対応する y の変域を求めることができる。

【設問A10(3) “図12⑤”】

- 資料を整理した表から最頻値を読み取ることができる。【設問12(1) “図12⑥”】

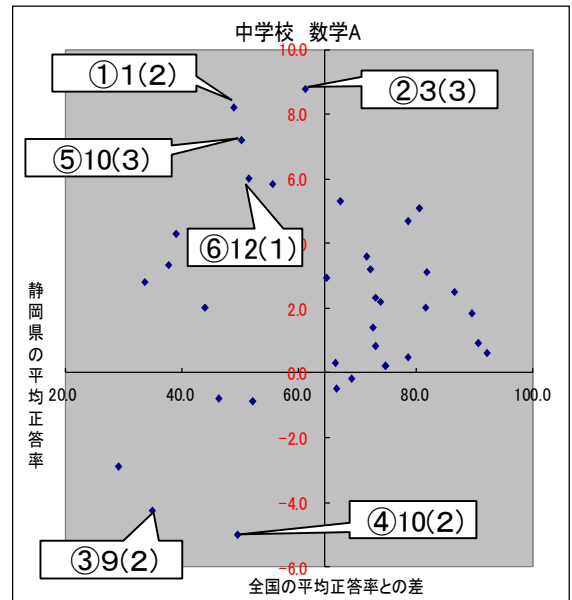


図12 中学校数学A設問別正答率の状況

表13 中学校 数学A 県正答率・標準通過率 (SPEC)・全国正答率

設問番号	①1(2)	②3(3)	③9(2)	④10(2)	⑤10(3)	⑥12(1)
県正答率	48.8	61.1	35.1	49.6	50.2	51.5
SPEC	90	70	65	70	60	70
全国正答率	40.6	52.3	39.4	54.6	43.0	45.5

表14 中学校 数学B 県正答率・標準通過率 (SPEC)・全国正答率

設問番号	⑦2(1)	⑧2(2)	⑨3(2)	⑩5(2)	⑪6(1)	⑫6(2)
県正答率	57.8	25.4	29.0	39.7	79.1	16.5
SPEC	70	50	50	50	80	50
全国正答率	59.1	20.6	29.8	31.1	76.4	15.4

④ 主として「活用」に関する問題B

- 条件を基に、表から数量の変化や対応の特徴を捉え、 x の値に対応する y の値を求めることに課題がある。【設問2(1)“図13⑦”】
- 加えるべき条件を判断し、それが適している理由を説明することは改善の余地がある。
【設問2(2)“図13⑧”】
- グラフの傾きを事象に即して解釈することに課題がある。【設問3(2)“図13⑨”】
- 与えられた情報から必要な情報を選択し、数学的に表現することは全国の正答率を大きく上回ってはいるが、改善の余地がある。
【設問5(2)“図13⑩”】
- 問題場面における考察の対象を明確に捉えることは全国の正答率を上回り良好である。
【設問6(1)“図13⑪”】
- 与えられた式を用いて、問題を解決する方法を数学的に説明することに課題がある。
【設問6(2)“図13⑫”】

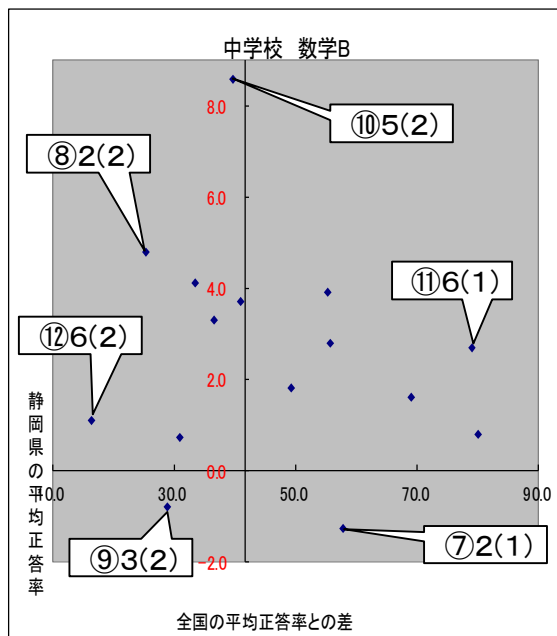


図13 中学校数学B設問別正答率の状況

平成28年度学力・学習状況調査 中学校数学問題【B3】

③ 航平さんの家では、自動車の購入を検討しています。購入を検討しているA車(電気自動車)とB車(ガソリン車)にかかる費用について、航平さんの家での自動車の使用状況を踏まえると、次のようになります。

	A車(電気自動車)	B車(ガソリン車)
車両価格	280万円	180万円
1年間あたりの充電代・ガソリン代	4万円(充電代)	16万円(ガソリン代)

航平さんは、A車とB車について、それぞれの車の使用年数に応じた総費用を比べてみようと思いました。そこで、1年間あたりの充電代やガソリン代は常に一定であるとし、次の式で総費用を求めました。

$$\text{総費用} = (\text{車両価格}) + \left(\frac{\text{1年間あたりの充電代・ガソリン代}}{\text{使用年数}} \right) \times (\text{使用年数})$$

次の(1)から(3)までの各問いに答えなさい。

(1) A車を購入して10年間使用するときの総費用を求めなさい。

(2) B車を購入して x 年間使用するときの総費用を y 万円とします。この x と y の関係を、航平さんは次のような一次関数のグラフに表しました。

このグラフの傾きは、B車についての何を表していますか。下のアからエまでの中から正しいものを1つ選びなさい。

ア 総費用
イ 車両価格
ウ 1年間あたりのガソリン代
エ 使用年数

(3) A車とB車の総費用が等しくなるおよその使用年数を考えます。下のア、イのどちらかを選び、それを用いてA車とB車の総費用が等しくなる使用年数を求める方法を説明しなさい。ア、イのどちらを選んで説明してもかまいません。

ア それぞれの車の使用年数と総費用の関係を表す式
イ それぞれの車の使用年数と総費用の関係を表すグラフ

(5) 「国語科」の授業改善に向けて

ア 本調査問題を授業構想に生かす

(7) 学習の目的と付けたい力を明確にした指導

国語科の授業の単元構想をする際には、単元のねらいを明確にし、付けたい力を絞って指導する。また、その力を付けるために適切な言語活動を設定すること、付けたい力に沿って評価し、次の単元での指導に生かすことが大切である。言語活動は、目的ではなく、目標を達成するための手立てであるということを改めて見直し、授業づくりを進めたい。その際、子どもに目的意識を持たせ、学びに対する主体性を引き出すことが重要である。本調査問題には、課題を解決するために自ら学習に取り組む子どもの姿が随所に見られる。主体的な学びの姿のモデルとして参考にしたい。

(4) 教科横断的な視点を持った指導

本調査問題においては、総合的な学習の時間や実生活の読書の場面が設定されており、国語科で身に付けた力を各教科等や実生活で活用することが求められている。国語科の授業を教科書の教材だけに閉じてしまうのではなく、国語科における学習活動が各教科等や日常生活、社会生活のどのような場面とつながるか、身に付けた言語能力がどのように活用できるかという視点を大切にしたい。そうすることで、国語科の授業で学習したことが各教科や日常生活、社会生活で使える、役立つという実感が、「国語の勉強が好き」といった子どもの学びに向かう意欲や態度を育むことにつながるものと考えられる。

イ 各領域等における指導改善のポイント

(7) 話すこと・聞くこと

本調査問題から、小学校では、インタビューなどで自分が聞きたいことを明確にし、話の展開に沿って質問したり、相手の話の内容を的確に聞き取ったりする学習活動、中学校では、話し合いを通じて自分の考えを広げるために、互いの発言の共通点や相違点を聞き分けたり、話題について別の立場や視点から考え、新たな発言をしたりする学習活動の充実が求められていることが分かる。

(4) 書くこと

何のために書くのか、読み手に何を伝えたいのかといった目的意識や相手意識を、子どもが明確に持って取り組めるような言語活動を授業に設定することが重要である。

小学校では、社会科や算数科などで学習した図表やグラフの読み方を生かし、読み取ったことを的確に表現したり、インタビューや情報メディアなどを通して調べた内容を根拠とし自分の考えを書いたりする学習活動、中学校では、課題の解決を図るために自ら収集した複数の文章や資料から必要な情報を取り出し、伝えたい事柄や根拠を明確にして自分の考えを簡潔にまとめる学習活動が考えられる。こうした学習においては、書いた文章を示された観点に沿って、互いに読み合い意見交換を行うことで、自分の考えを広げたり深めたりするなど、協働的な学びの視点も大切にしたい。

(7) 読むこと

教科書の教材文だけでなく、新聞、図鑑、グラフや図表を含む資料等を目的に応じて、自分の考えを明確にしながらかく力を育成することが求められる。その際に文章の内容を押さえたり、構成を捉えたりすることにとどまらず、書き手の目的や意図、その効果についても考えるよう指導することが大切である。

また、課題の解決に向けて、学校図書館や地域の図書館、コンピュータや情報通信ネットワーク等を利用し、情報を収集・整理し、必要な情報を読み取る学習活動を取り入れることも効果的である。

(4) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

漢字については、当該学年の学習にとどまらず、文脈に即して正しく読んだり書いたりすることができるようにする必要がある。子どもが学習の必要感を感じられるよう日常の場面と結びつけながら「書ける漢字」から「使える漢字」となるよう、繰り返し指導することが大切である。

事象や行為などを表す多様な語句の理解には、それぞれの語句が文章の中でどのように関連付けて使用されているか、自分が表現する際にどのように活用するかについて辞書等を用いながら考える機会を意図的に設ける必要がある。また、言語感覚を養うために、発達段階に応じた読書活動の充実が有効である。

(6) 「算数・数学科」の授業改善に向けて

ア 本調査問題を授業構想に生かす

算数・数学科の授業を構想するときに、ねらいを明確にし、子どもの問いや思いを引き出す課題の提示方法や発問の工夫をすることが大切である。それと同時に、本調査問題と解答類型を参考に授業を構想すると、めざす子どもの姿をより具体的に考えることができる。算数B問題4(3)では、2つのグラフを見比べて示された根拠を説明するとき、数を用いて記述できるかどうか問われていた。何をどこまでできることが目標を達成した姿なのか、本調査の各問題や解答類型、誤答の解説は大いに参考にすることができる。

また、誤答の分析は、子どもの思考を読み解くヒントといえる。誤答をもとにした授業の展開は、子どもの主体性や対話を引き出し、学びを深めることにつながる。まずは、調査結果における誤答の割合の多いものをチェックし、子どもの学びを見通して授業構想に生かしたい。こうした分析を経て授業者に付けたい力が具体化にとらえられたとき、授業は資質・能力を育むものとなる。

イ 数学的に考察する場の充実を図る

日々の授業の中で、事象を算数・数学の見方・考え方を用いて考察し、考えたことや判断したことを言葉や数、式や図などを用いて説明したり、解釈し合ったりする場を充実することが重要である。例えば、「表やグラフを批判的に考察する場」「見つけたきまりがいつでも成り立つか検討する場」「事象と式を関連付けて説明する場」「式から問題解決における思考過程を読む場」「図形を、性質をもとに考察する場」などの設定が考えられる。子ども同士が表現し合う場を意図的に積み重ねていくなかで、子どもの思考力や表現力を育成していくことが大切である。

ウ 各領域等における指導改善のポイント

(7) 数と計算・数と式

計算などの技能の観点においては定着が図られているが、計算の意味理解に課題がある。小学校では、数直線を用いて数を視覚的に表すことや、数の仕組みと計算の仕方を関連付けて理解できるようにすることが大事であると考えられる。また、計算の結果を見積もったり、計算の結果を確かめたりする活動を大切にしたい。中学校では、方程式を解く過程やその結果を確認する活動を取り入れることが求められる。

(4) 図形

図形に関する知識・理解の観点においては定着が図られているが、図形の性質を基に記述することに課題がある。小学校では、図形を構成する活動の中で、実際に紙を折ったり、切ったり、図形を移動させたりするなど具体的に操作することや、なぜ図形が構成できるのかを図形の特徴に関する知識を基に考察する場を設けるなどが考えられる。また、考察の結果を説明し合う学習を充実することも重要である。

中学校では作図の際に、得られた点や線分の特徴を図形の性質と関連付けて読み取り、考察したり、考察した結果を表現したりする活動を取り入れることも効果的である。

(7) 数量関係

【小学校】

依然として改善が必要な割合に関しては、学年の系統的な流れを教師がきちんと意識して指導していくことが望まれる。事象をすぐに式に表すのではなく、数直線などの図や表を用い問題場面を整理する場を設けることや子どもがそれらを使うよさを実感できるようにすることが必要である。さらに、グラフから読み取ったことをわかりやすく伝えるなどの言語活動が大切である。

【中学校】

関数においては、具体的な事象を表、式、グラフと相互に関連付け、事象の変化や対応を調べる過程が大切である。このような活動を通して、数学を活用することのよさを実感できるようにしたい。

資料の活用においては、ここ数年改善が見られるが、用語などの定着だけを重視するのではなく、目的に応じて資料を整理し、傾向を読み取ったり、解決の見通しを立てたりするなど問題解決のための構想を立てることが望まれる。

(7) 児童生徒質問紙・学校質問紙結果の概要

次に、児童生徒質問紙及び学校質問紙結果から、「静岡県の教育のよさ」「昨年度からの課題」「新規の質問項目から考える今後の課題」について考察した。

ア 静岡県の教育のよさ

(7) 児童生徒の高い自尊感情

表 15 の児童生徒質問紙「自分にはよいところがあると思うか」は、自尊感情に関する意識調査だが、調査開始以来、小中学校ともに毎年全国平均を上回っている。また、今年度、小学校では8割を超えた。

表 15 平成 25～28 年度 自尊感情に関する意識調査

質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差		
自分には、よいところがあると思うか	78.2	2.5	79.8	3.7	79.7	3.3	80.2	3.9	71.3	4.9	71.6	4.5	72.2	4.1	72.8	3.5
	75.7		76.1		76.4		76.3		66.4		67.1		68.1		69.3	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

(イ) 自尊感情が高い背景

表 16 は、学校生活に関連する調査項目である。「学校に行くのは楽しい」「学校で友達と会うのは楽しい」「学校で好きな授業がある」「先生はよいところを認めてくれる」のいずれの項目についても、全国平均と比較して、高い数値を示している。この結果から、子どもたちは、「褒めて伸ばす」といった教師の温かな関わりの中で、充実した学校生活を送り、自尊感情が育まれていると推察される。

表 16 平成 28 年度 学校生活に関する意識調査

番号	質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校	中学校
26	学校に行くのは楽しい	87.4 (1.1)	81.6 (0.2)
27	学校で友達と会うのは楽しい	96.4 (0.2)	94.8 (0.1)
28	学校で好きな授業がある	94.7 (1.2)	83.5 (3.6)
32	先生はよいところを認めてくれる	84.8 (2.2)	79.6 (1.6)

(* () 内の数値は本県と全国との差)

表 17 は、家庭生活に関連する調査項目である。「朝食を毎日食べている」「毎日同じくらいの時刻に寝ている」「毎日同じくらいの時刻に起きている」「家の人と学校での出来事を話す」のいずれの項目についても比較的高い数値を示している。この結果から家族関係が良好であり、家庭の教育力の高いことが、自尊感情が高い二点目の背景と推察される。

表 17 平成 28 年度 家庭生活に関する意識調査

番号	質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校	中学校
1	朝食を毎日食べている	96.5 (1.0)	94.6 (1.3)
2	毎日同じくらいの時刻に寝ている	80.7 (0.6)	74.7 (-0.5)
3	毎日同じくらいの時刻に起きている	91.1 (0.3)	92.0 (-0.3)
19	家の人と学校での出来事を話す	80.5 (1.3)	75.8 (1.7)

(* () 内の数値は本県と全国との差)

表 18 は、地域との連携に関連する調査項目である。「地域の行事に参加している」の質問項目については、全国平均と比較して、小学校で 7.3 ポイント、中学校で 22.5 ポイント、高い数値を示している。

地震県静岡では、各地区において年間複数回の防災訓練が実施されている。参加する中学生は、地域の力として期待されており、訓練への参画意識も高いものとなっている。

また、学校支援に関する調査でも、平成 25 年度時点と比較すると数値が伸びており、子どもたちの学びを様々な形で、支えている地域の姿が見えてくる。とくに、「PTA や地域の人が学校の諸活動にボランティアとして参加してくれますか」については、全国と比べても高い水準にある。授業サポートに係るボランティアの状況については、全国平均を下回っているが、小学校、中学校共に昨年度より数値が伸びている。こうした状況から、子どもたちは家族や学校の先生方だけでなく、地域の人々ともつながっていることが分かり、地域の方との関わりの中で認め、励まされていることが考えられる。これが自尊感情の高い三点目の背景として推察される。

表 18 平成 25～28 年度 地域行事への参加に関する意識調査

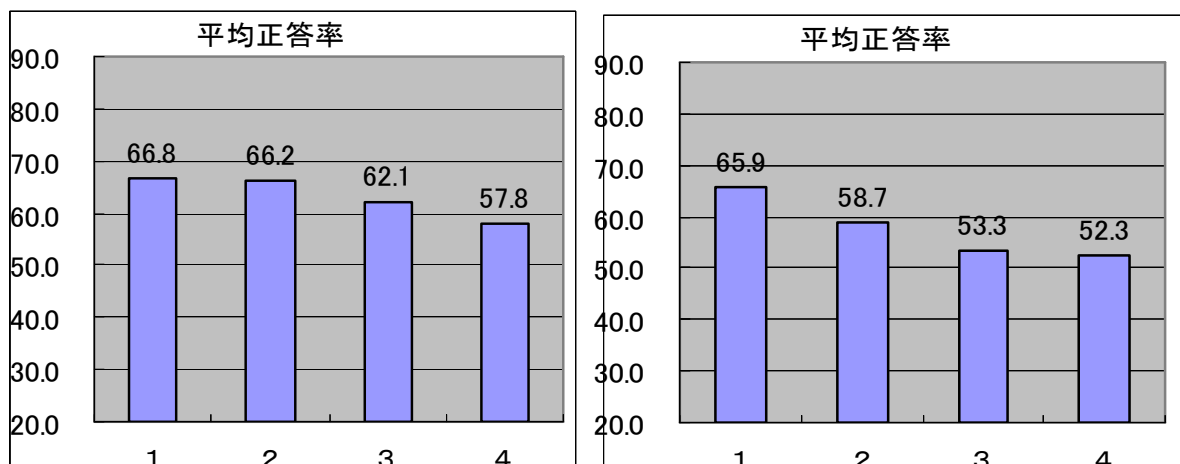
質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差		
地域の行事に参加している	71.1	7.2	74.9	6.9	74.4	7.5	75.2	7.3	62.6	21.0	66.1	22.6	68.9	24.1	67.7	22.5
	63.9		68.0		66.9		67.9		41.6		43.5		44.8		45.2	
質問事項 (学校質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差		
保護者や地域の人の学校支援ボランティア活動は、学校の教育水準の向上に効果がありましたか	95.9	1.0	94.4	-0.3	95.5	-0.1	97.1	0.3	87.8	0.5	89.0	1.4	87.6	-2.4	92.9	1.9
	94.9		94.7		95.6		96.8		87.3		87.6		90.0		91.0	
学校支援地域本部などの学校支援ボランティアの仕組みにより、保護者や地域の人が学校における教育活動や様々な活動に参加してくれますか	79.9	-1.0	78.8	-3.9	80.6	-3.5	86.5	-0.4	65.3	-0.3	64.7	-2.5	72.5	2.8	73.6	-0.5
	80.9		82.7		84.1		86.9		65.6		67.2		69.7		74.1	
ボランティア等による授業サポート(補助)を行いましたか	37.7	-4.7	30.6	-10.5	31.1	-9.5	41.1	-7.0	22.9	0.1	19.0	-5.2	18.5	-5.7	22.9	-6.9
	42.4		41.1		40.6		48.1		22.8		24.2		24.2		29.8	
地域の人材を外務員等として招聘した授業を行いましたか	79.8	0.5	79.8	3.5	74.1	-2.2	84.6	2.2	58.8	1.2	61.2	2.7	59.6	0.8	71.9	6.8
	79.3		76.3		76.3		82.4		57.6		58.5		58.8		65.1	
PTA や地域の人が学校の諸活動(学校の美化など)にボランティアとして参加してくれますか	98.4	1.3	98.3	1.5	98.7	1.6	98.8	1.1	97.6	2.9	98.5	3.9	97.8	2.7	98.5	2.9
	97.1		96.8		97.1		97.7		94.7		94.6		95.1		95.6	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

図 14 は、「自分にはよいところがあると思うか」と平均正答率(国語、算数・数学)の相関関係を示したものである。この図からは、自尊感情が高いほど、平均正答率が高いことが分かる。学力を発揮する土台として、学校・家庭・地域が一体となった取組を今後も大切に、自尊感情を育むことで確かな学力につなげていきたい。

(小6)

(中3)



1 当てはまる 2 どちらかといえば、当てはまる 3 どちらかと言えば、当てはまらない 4 当てはまらない

図 14 平成 28 年度「自分にはよいところがあると思うか」と平均正答率

イ 昨年度からの課題

(7) 家庭学習の充実

児童生徒質問紙の「家で学校の宿題をしていますか」については、小中学校ともに、この質問が調査項目になった平成 22 年度以降、常に全国平均を上回っている。このことから家庭でまじめに宿題に取り組む子どもたちの様子がうかがえる。

一方、「家で、自分で計画を立てて勉強していますか」については、小中学校ともに、全国平均を下回っている。また、予習・復習への取組の数値も低くなっている。自ら進んで学習する、計画を立てて家庭学習に取り組むといった点で本県の子どもたちの課題が見られる。

学校質問紙からは、多くの学校で宿題の出し方や家庭学習の進め方について、教職員で共通理解を図り、家庭学習の方法等を具体的に指導していることが分かる。こうした取組は、学校家庭との連携という視点でも、効果的に働くものと推測されている。

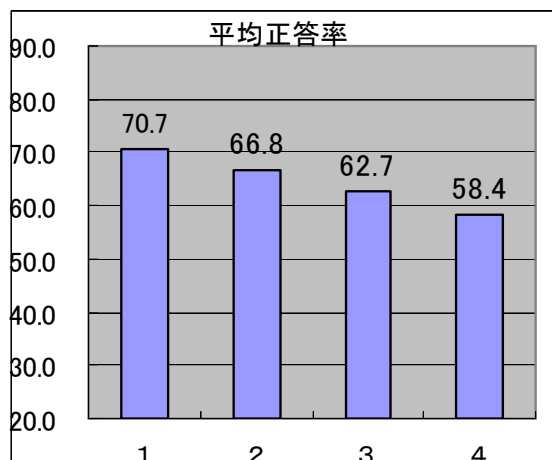
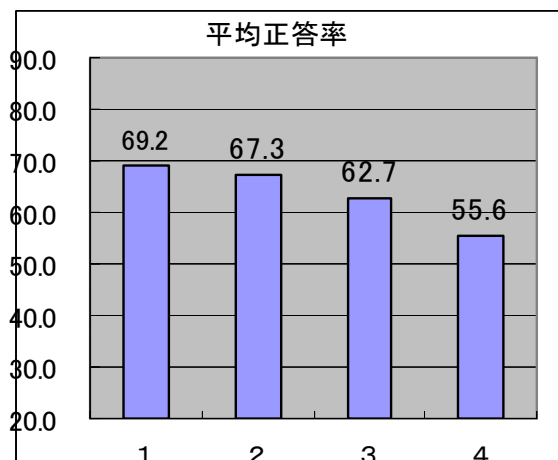
こうした点を踏まえ、県教育委員会では、子どもたちが自ら進んで学ぶ力を育む家庭学習について、学校・家庭・地域が一体となって考える取組を推進するため、平成 27 年度にチア・アップコンテンツ（家庭学習編）を作成した。今年度は、学習意欲の土台となる自分のよさや可能性を伸ばすための子どもとの関わり方についてチア・アップコンテンツ（子どものほめ方編）を作成し、各学校の懇談会、保護者面談等における保護者への工夫した働き掛けを進めている。

表 19 平成 25～28 年度 家庭学習に関する意識調査

質問事項 (児童・生徒質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差		
家で学校の宿題をしていますか	97.5	1.1	97.6	1.1	97.7	0.9	97.8	0.8	92.1	5.3	92.7	4.5	93.5	4.2	94.0	3.9
	96.4		96.5		96.8		97.0		86.8		88.2		89.3		90.1	
家で学校の授業の予習をしていますか	38.1	-3.2	41.7	-1.5	42.2	-1.2	41.9	-1.4	35.5	2.0	36.3	2.1	35.6	0.3	33.1	-1.1
	41.3		43.2		43.4		43.3		33.5		34.2		35.3		34.2	
家で学校の授業の復習をしていますか	45.8	-5.6	52.7	-1.3	54.7	0.2	55.4	0.2	46.3	-2.3	49.7	-0.7	50.4	-1.6	48.1	-2.9
	51.4		54.0		54.5		55.2		48.6		50.4		52.0		51.0	
学校の授業時間以外に、普段、一日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか(1時間以上の割合)(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教えている時間も含まず)	75.1	8.6	67.3	5.3	68.3	5.6	67.3	4.8	44.4	5.9	73.6	5.7	73.2	4.2	72.3	4.4
	66.5		62.0		62.7		62.5		38.5		67.9		69.0		67.9	
家で自分で計画を立てて勉強をしていますか	57.9	-1.0	60.8	-0.2	62.4	-0.4	60.3	-1.9	43.4	-1.1	45.2	-1.4	47.3	-1.5	45.3	-3.1
	58.9		61.0		62.8		62.2		44.5		46.6		48.8		48.4	
質問事項 (学校質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差		
国語の指導として、家庭学習の課題(宿題)を与えましたか	100.0	0.6	99.8	0.4	100.0	0.4	99.8	0.4	98.4	8.8	96.9	6.0	98.5	7.4	98.1	5.5
	99.4		99.4		99.6		99.4		89.6		90.9		91.1		92.6	
算数(数学)の指導として、家庭学習の課題(宿題)を与えましたか	99.8	0.2	99.4	-0.1	99.6	0.0	99.8	0.2	95.6	2.9	93.9	0.6	96.6	3.3	96.7	1.9
	99.6		99.5		99.6		99.6		92.7		93.3		93.3		94.8	
国語・算数(数学)の指導として、保護者に対して児童(生徒)の家庭学習を促すような働きかけを行いましたか	94.9	-0.7	96.5	0.6	96.6	0.1	98.2	0.9	77.2	4.8	88.2	2.8	85.3	1.4	88.4	0.9
	95.6		95.9		96.5		97.3		72.4		85.4		83.9		87.5	
国語・算数(数学)の指導としての家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図っていますか	89.9	2.2	91.1	5.7	92.8	5.7	94.3	5.5	87.9	9.6	88.2	11.3	88.6	10.1	89.9	7.8
	87.7		85.4		87.1		88.8		78.3		76.9		78.5		82.1	
家庭学習の取組として、学校では、児童(生徒)に家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えるようにしていますか	92.0	1.1	90.1	1.9	92.7	2.9	93.9	2.0	88.1	1.0	87.8	3.0	88.6	2.9	89.5	1.7
	90.9		88.2		89.8		91.9		87.1		84.8		85.7		87.8	

(小6)

(中3)



1 している 2 どちらかといえば、している 3 あまりしていない 4 全くしていない

図 15 平成 28 年度「家で、自分で計画を立てて勉強していますか」と平均正答率

(イ) キャリア教育に対する認識を高める

表 20 の児童生徒質問紙「将来の夢や目標を持っていますか。」については、この質問が調査項目になった平成 22 年度から常に小中学校ともに、全国平均を上回っている。「人の役に立ちたい人間になりたいと思いますか。」においても、常に 90%を上回っており、本県の児童生徒の将来や働くことに対する意識は高いことが分かる。

一方、学校が回答する学校質問紙を見ると、表 21「児童生徒に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしていますか。」については、中学校は、年々上昇しているが、小学校は、全国平均が、74.6%なのに対して本県は、62.9%であり、全国平均と大きな差があることに加え、子どもとの意識のずれが心配される質問項目の一つである。

「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか。」という問いに対する小学校の回答が、全国と比べて約 12 ポイントも低かった要因の一つには、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導を行ってはいないものの、それが、学校全体で共有されていなかったり、職場体験、職場見学、職業講話など特別な行事を行うことがキャリア教育であるという誤解があったりしたのではないかと推測される。

県教育委員会では、昨年度に続き、「キャリア教育研修会」を悉皆研修として開催した。講義と事例発表、グループワークによる研修を通して、キャリア教育で育成したい力を確認すると共に、自校の教育活動をキャリア教育の視点から見直すことで、キャリア教育の在り方について周知と意識化が図られたと考える。今後、「キャリア教育研修会」の内容をより実践的なものになるよう検討し、各学校におけるキャリア教育の推進に努めていきたい。

表 20 平成 25～28 年度 将来の夢や目標に関する意識調査

質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差
将来の夢や目標を持っていますか	87.8	0.1	87.3	0.6	86.7	0.2	85.9	0.6	74.6	1.1	72.5	1.1	72.6	0.9	71.2	0.1
	87.7		86.7		86.5		85.3		73.5		71.4		71.7		71.1	
人の役に立ちたい人間になりたいと思いますか	93.2	-0.4	94.2	0.2	93.8	0.1	94.1	0.3	94.2	0.9	94.7	0.7	94.4	0.7	93.3	0.5
	93.6		94.0		93.7		93.8		93.3		94.0		93.7		92.8	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

表 21 平成 25～28 年度 職業や夢について考えさせる指導に関する調査

質問事項 (学校質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差
児童生徒に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしていますか	62.1	-9.4	67.1	-4.9	59.8	-12.6	62.9	-11.7	95.5	1.0	96.2	2.0	98.9	2.5	95.5	-1.6
	71.5		72.0		72.4		74.6		94.5		94.2		96.4		97.1	
職場見学や職場体験活動を行っていますか	34.4	-7.5	35.4	-9.5	35.3	-6.7	34.6	-10.5	99.2	0.8	99.2	0.7	98.9	0.4	99.3	0.5
	41.9		44.9		42.0		45.1		98.4		98.5		98.5		98.8	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

(ウ) 特別支援教育に対する認識を高める

表 22 の学校質問紙「学校の教員は特別支援教育について理解し、授業の中で、生徒の特性に応じた指導上の工夫（板書や説明の仕方、教材の工夫など）を行ったか」については、小学校では、全国とほぼ変わらない数値であるものの、中学校においては、例年全国数値を下回り、課題がある状況である。

特別支援教育についての理解は、今後、益々重要になる。子どもの特性を理解し、子どもものの感受を大切にした授業や個に応じた指導を行う、いわゆるユニバーサルデザインの考え方を取り入れ、どの子どもにも「分かる」「できる」授業づくりをしていくことが重要である。是非、学校全体での組織的な取組として推進したい。

表 22 平成 25～28 年度 特別支援教育に関する調査

質問事項 (学校質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差		
学校の教員は特別支援教育について理解し、授業の中で、児童(生徒)の特性に応じた指導上の工夫(板書や説明の仕方、教材の工夫など)を行いましたか	82.8	0.0	88.8	3.9	88.7	-0.5	89.8	0.4	77.6	-3.0	80.2	-3.4	79.3	-7.0	82.4	-6.7
	82.8		84.9		89.2		89.4		80.6		83.6		86.3		89.1	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

(I) 国語に対する意識「国語の勉強は好きですか」について

表 23 の児童生徒質問紙「国語の勉強は好きですか」については、小学校では、調査開始以来、全国平均を大きく下回った状況が続いている、さらに、本年度、中学校でも全国平均を下回る結果となり、危惧されるところである。学力調査の結果が向上している中、関心・意欲が相変わらず低いことは、ある意味最も心配されることである。真の学力向上において学ぶ意欲は最も欠かすことができない要因である。そうした点を踏まえ、国語に関連する質問項目から、子どもの気持ちを探ってみる必要がある。

表 23 平成 25～28 年度 国語に関する意識調査①

質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差		
国語の勉強は好きですか	50.2	-7.7	51.4	-7.8	53.6	-7.5	52.3	-6.0	59.3	1.6	59.1	0.9	60.7	0.2	57.9	-1.9
	57.9		59.2		61.1		58.3		57.7		58.2		60.5		59.8	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

表 24 の中でも、小学校では、どの項目についても全国平均を下回っている。特に、「うまく伝わるように話の組み立てを工夫する」「原稿用紙 2～3 枚の感想文や説明文を書くのは難しいと思わない」については、低い数値となっている。これらの質問項目の結果から、子どもの国語に対する苦手意識が見える。また、表 25 の「読書は好きですか。」の値も、小学生は全国平均よりも低く、中学生は全国平均よりも高くなっており国語の授業に対する関心と同様の傾向が見られる。

中学校では「まとまりごとに内容を理解しながら読む」「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりする」で比較的高い数値を示しているが、「うまく伝わるように話の組み立てを工夫する」「原稿用紙 2～3 枚の感想文や説明文を書くのは難しいと思わな

い」の数値は、全体的に小学校と同じような傾向が見られる。

相手に伝わるように話したり、書いたりすることが苦手、話し方が分からない、書き方が分からない、という子どもの困り感が感じられる。その困り感に寄り添う支援をしていくことが大切である。

まずは、国語科においても「分かる」「できる」といった「学びの実感」を追求していくことを授業の中心に据えて考えることが大切である。以前実施した調査結果（平成22年2月23日配布「3年間の全国学力・学習状況調査から見えてきたこと」）では、「国語の勉強が好きではない理由」の一つに、「覚えることが苦手」というのがあったが、集約した研修主任の意見からは、「児童の学ぶ意欲をわきたたせるような授業ができていない」「学習の成果を実感できる授業が確立されていない」「学びを振り返る活動の位置付けがあいまい」などの意見が寄せられた。子どもが覚えられない、覚えられないといった「子どもの問題」ではなく、問題なのは「教師の授業」で、教師の授業改善を示唆する記述が多くあった。そうしたことを踏まえると、これまで以上に国語科としての魅力的な授業の在り方を、子どもの側に立って考えていく必要がある。

学習指導要領には、「学習過程の明確化」「学習の系統性の重視」が記されている。子どもが学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に入れることは、子どもの学習への関心・意欲につながる。また、国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、繰り返しの学習により能力の定着が図られるようになっていく。教師が系統性を意識することが、身に付けた言語能力をそのときどきに生かしていける子どもを育てることにつながる。

これらを意識し、今後一層、学習指導要領の趣旨を踏まえた、子どもが国語の能力を確実に身に付け、学んだことの実感が持てるような国語科の授業が展開されていくことを願う。

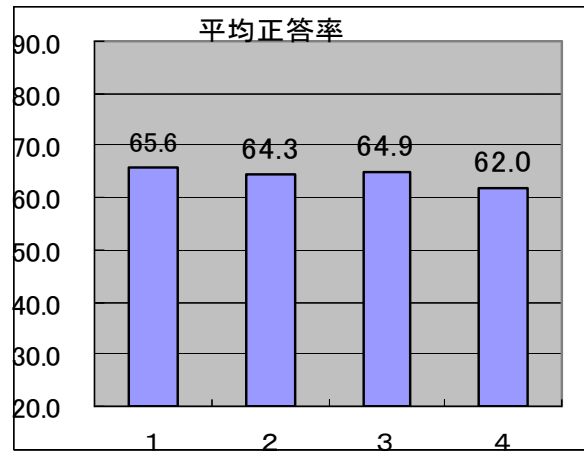
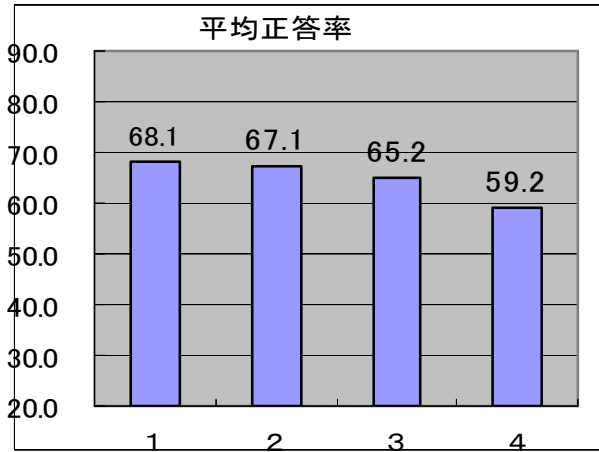
表 24 平成 28 年度 国語に関する意識調査②

質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差
国語の授業の内容はよく分かる	75.9	-4.0	76.4	-3.7	78.1	-3.9	76.8	-3.9	74.0	2.1	73.7	1.7	75.1	0.8	72.4	-1.7
	79.9		80.1		82.0		80.7		71.9		72.0		74.3		74.1	
発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している	55.9	-1.4	56.7	-1.8	58.1	-3.1	57.9	-4.4	51.4	4.3	52.2	3.1	55.4	1.4	54.7	-2.0
	57.3		58.5		61.2		62.3		47.1		49.1		54.0		56.7	
段落や話のまとめごと内容に理解しながら読んでいく	70.1	-3.2	72.7	-3.1	73.9	-3.3	75.4	-2.7	66.5	2.0	69.2	1.7	71.4	0.8	70.8	-0.5
	73.3		75.8		77.2		78.1		64.5		67.5		70.6		71.3	
目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしている。	62.5	3.1	63.8	2.4	66.2	1.0	66.0	-1.0	64.2	12.0	66.8	10.7	67.9	8.7	67.8	5.6
	59.4		61.4		65.2		67.0		52.2		56.1		59.2		62.2	
原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くのは難しいとは思わない	30.9	-3.2	33.6	-2.8	36.4	-3.4	35.4	-3.9	32.2	0.4	34.4	1.4	35.9	0.3	37.5	0.5
	34.1		36.4		39.8		39.3		31.8		33.0		35.6		37.0	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

(小6)

(中3)

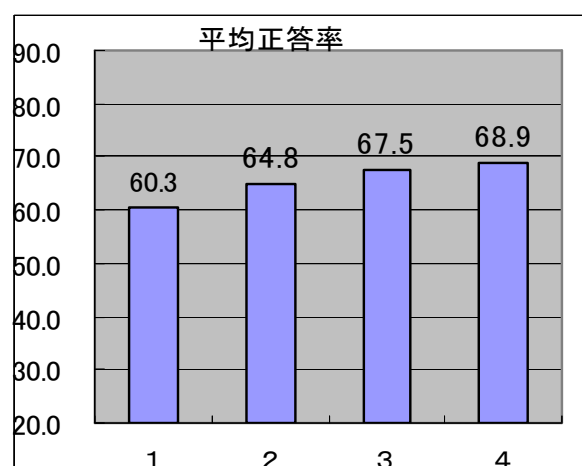
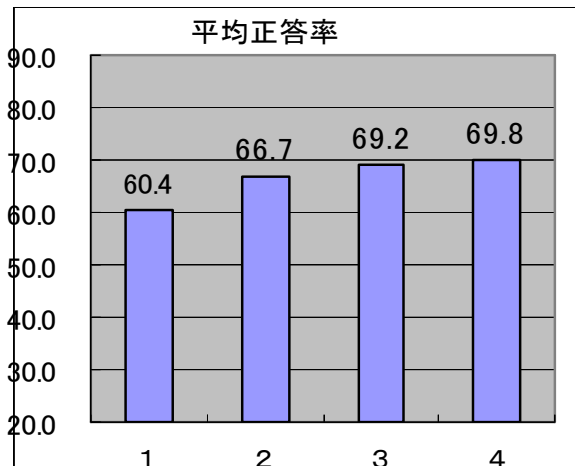


1 当てはまる 2 どちらかといえば、当てはまる 3 どちらかと言えば、当てはまらない 4 当てはまらない

図 16 平成 28 年度「国語の勉強は好きですか」と平均正答率

(小6)

(中3)



1 そう思う 2 どちらかといえば、そう思う 3 どちらかと言えば、そう思わない 4 そう思わない

図 17 平成 28 年度「原稿用紙 2～3 枚の感想文や説明文を書くのは難しいと思いますか」と平均正答率

表 25 平成 25～28 年度 国語に関する意識調査③

質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校								中学校							
	H25		H26		H27		H28		H25		H26		H27		H28	
	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差	割合	差		
読書は好きですか	69.7	-2.4	70.8	-2.2	70.1	-2.7	72.4	-2.2	73.5	3.4	73.0	3.6	71.2	3.3	72.6	2.7
	72.1		73.0		72.8		74.6		70.1		69.4		67.9		69.9	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

【特色のある取組について】

平成 25 年度以降、小学校国語について、学力調査及び質問紙調査において向上が見られた市町の取組について、両教育事務所を通じて、聞き取り調査を行った。その結果について三つの視点で紹介する。(国語及び読書についての取組)

① 子どもが自分の学びを振り返る場面を設定する

- ・教室においては、「書く」ことの指導が進んだ。これまで、「聞き合い」「伝え合い」というような言語活動を行うことが多かったが、書くことにより、児童自身に学びが意識されるようになった。また、子どもが書いたものを通して、教員が付けたい力が付いたかどうか検証して、次時への課題を見付けることにつながった。多くの学校で、「振り返り」が行われるようになった。結果的に子どもが学びを振り返る自己評価の場面として定着してきた。
- ・読書記録の蓄積、賞揚・必読書の選定・読書の励行等、ポートフォリオとして活用することで、学びの実感を蓄積するとともに、「読書が好き、国語が好き」という気持ちを高めていた。
- ・国語は、算数よりも、身に付けた力を児童生徒自身が実感しにくい側面があるが、短時間学習におけるプリント学習等では、授業で身に付けた力を、子どもが確認する機会となった。

② 国語に関する言語環境を整える

- ・全校に配置されている学校司書と教員が連携して、授業で活用する本のリストを作成したり、お薦めの本のリストを作成したりしている。学校司書の研修会を年 4 回実施している。
- ・市教育委員会でリーフレットを作成し、保護者へ家庭教育に関する啓発を実施している。「本や新聞、パンフレットなど、様々な形態の文章に親しみ、必要な情報を得るようにしましょう」等の内容を記載してきた。
- ・「本を好きな子にしたい」という願いのもと 3 歳児検診で、「ブックスタート」として全員に福祉課より絵本を贈呈している。小 1・中 1 では、ブックステップ事業で各校が選定した本の中から、一人一人の子どもが選んだ絵本を贈呈している。また、学校での読み聞かせを継続して実施している。

③ 学校の取組を「再評価」し、付けたい力・目指す子ども像を「共有」

- ・教員に向け、授業において大切にしたい点をまとめたリーフレット「学校への提言」を国語、算数・数学・質問紙別に作成、配布し、目指す方向の共通理解を図っている。
- ・研修主任を対象として研修会を年 3 回実施している。国語の分析結果や授業改善の視点、また、国語の授業に関する優れた実践（県外・市内）を紹介している。また、若手教員に対して、「小学校国語科授業づくり研修」を実施している。
- ・市教育委員会として、各学校の校内研修の取組に沿って、全学年・全職員が共通実践することで、大きな成果につながることを繰り返し伝えてきた。
- ・町内の全ての学校が同じ「研修テーマ」を設定し、全ての教職員が、目指す授業像を共有して取り組んでいることで、教員の一人一人の授業改善への意識が高まっている。

ウ 新規の質問項目から考える今後の課題

今年度の学校質問紙の特徴として、新規質問項目の大幅増加が挙げられる。「小中連携」「カリキュラム・マネジメント」「教員研修」「評価」「主体性」に関わる内容である。その中から次期学習指導要領に向けて意識して取り組みたい二点について述べる。

(7) 授業改善の状況について（評価と主体的・対話的で深い学び）

授業改善に関連して、本年度の新規質問項目にある、「評価」について考える。表 26 の学校質問紙 54「国語や算数（数学）において、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等の多様な活動に取り組みさせることにより、ペーパーテストの結果に留まらない、多面的な評価を行ったか」では、小中ともに非常に高い数値となっている。

一方、55「国語や算数（数学）において、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、児童・生徒の資質・能力がどのように伸びているかを、児童生徒自身が把握できるような評価をおこないましたか」は、小中それぞれ低い数値となった。

このことから成績をつけるための評価ではなく、子どもの今を見取り、個に応じた指導を行うこと、授業改善につなげることといった「指導と評価の一体化」の意識を改めて確認する必要がある。各学校では、研修の機会を設定しながら、児童生徒の十分な見取り（評価）をしていくことの意味を伝えたい。

表 26 平成 28 年度 多面的な評価に関する調査

番号	質問事項 (学校質問紙)	小学校		中学校	
		H28		H28	
		割合	差	割合	差
54	国語や算数(数学)において、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等の多様な活動に取り組みさせることにより、ペーパーテストの結果に留まらない、多面的な評価を行いましたか	95.1	3.7	90.6	3.7
		91.4		86.9	
55	国語や算数(数学)において、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、児童・生徒の資質・能力がどのように伸びているかを、児童生徒自身が把握できるような評価を行いましたか	78.7	2.6	70.5	-2.9
		76.1		73.4	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

評価に関連して、授業の目標（めあて・ねらい）が示されているか、という質問に対して、児童生徒の肯定的な回答は改善傾向にある。しかし、児童生徒と教師側との意識の差については、引き続き課題がある。ここで、大切なのは、小中学校で授業の目標等を示すことや学数内容を振り返る場を形式的に行うことではなく、「よりよい自分をつくっていくためにⅢ・Ⅳ」で示した通り「押さえる」「仕掛ける」「確かめる」という授業改善の視点を意識して一貫性のある指導を適切に行うことである。

また、新たな質問項目で示された自己評価については、授業の目標（めあて・ねらい）を自分なりに認識し、客観的に自己の学びを評価することにつながる大切な事項であるため、教師側が意識して授業構成することが大切である。ここに挙げられた事項の子どもと学校の意識の差を縮めていくことが、評価の改善につながり、授業改善につながっていく。

表 27 平成 26～28 年度 授業の目標に関する教師と児童生徒の意識調査の差
(授業の冒頭で目標を児童生徒に示す活動を計画的に取り入れられましたか)

小学校	H26	H27	H28	中学校	H26	H27	H28
児童	79.5	84.1	85.3	生徒	71.4	80.4	84.1
学校	92.4	97.4	98.6	学校	93.2	92.9	98.5
差	-12.9	-13.3	-13.3	差	-21.8	-12.5	-14.4

表 28 平成 26～28 年度 授業の振り返りに関する教師と児童生徒の意識調査の差
(授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に入れましたか)

小学校	H26	H27	H28	中学校	H26	H27	H28
児童	73.3	75.4	75.3	生徒	57.9	63.6	66.2
学校	91.5	96.5	96.3	学校	87.4	90.9	92.1
差	-18.2	-21.1	-21	差	-29.5	-27.3	-25.9

表 29 は、「主体的・対話的で深い学び」に関する調査である。この調査項目が導入されて 2 年目なるが、児童生徒質問紙において、7 割の肯定回答を高いと見るかについては課題があるが、比較的よい数値と考えたい。これは、静岡県の学校において「主体的・対話的で深い学び」の要素を含んだ授業を実践してきたといえることの証である。また、授業実践場面とともに、校内研修でも意識していることもわかる。

表 30 は、児童生徒と教師側との意識の差について示している。児童生徒の意識としては、以前から高い数値となっていることが、静岡県の学びが、子どもたちに浸透していることがうかがえる。教師側の意識は、昨年度よりも高まっているが、児童生徒の意識については、横ばいである。この項目についても、両者の意識を埋めていくことが、今後の課題である。

次期学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」を追求するためには、形式にとらわれず、子どもの学びの実感を追究することが重要である。そのためには、児童生徒の学びを丁寧に見取り、評価をして、個に応じた指導（支援）や授業改善につなげるといった「指導と評価の一体化」を改めて徹底することが必要である。

表 29 「主体的・対話的で深い学び」に関する調査

番号	質問事項 (上～児童生徒質問紙 下～学校質問紙)	小学校		小学校		中学校		中学校	
		H27		H28		H27		H28	
		割合	差	割合	差	割合	差	割合	差
50	授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか	74.8	0.6	75.2	-0.5	73.2	6.5	74.6	5.3
		74.2		75.7		66.7		69.3	
44	授業において、児童(生徒)自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れていましたか	71.2	-1.8	83.5	3.4	68.3	5.0	75.7	3.1
		73.0		80.1		63.3		72.6	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

表 30 平成 27～28 年度 「主体的・対話的で深い学び」に関する教師と児童生徒の意識の差
(自分たちで、課題を立てて、自分たちで学習活動に取り組んでいたか)

小学校	H26	H27	H28
児童		74.8	75.2
学校		71.2	83.5
差		3.6	-8.3

中学校	H26	H27	H28
生徒		73.2	74.6
学校		68.3	75.7
差		4.9	-1.1

(1) カリキュラム・マネジメント

「カリキュラム・マネジメント」については、以下の三つの側面から捉えることができる。

- i) 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ii) 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の P D C A サイクルを確立すること。
- iii) 教育内容と、教育活動に必要な人的、物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること

調査項目を見ていくと、まずカリキュラムマネジメントの i) は、番号 31・32 に関連している。次期学習指導要領改訂のポイントには、これまでの「何を知っているか」から、内容を学ぶことを通して「何ができるようになるか」という「資質・能力」を育むことがあげられている。これは、各教科の学習の充実とともに、教科等横断的な視点に立った学習が重要であり、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要があることを示している。

こうした背景を踏まえた質問項目が 31・32 である。言語能力や情報活用能力は、教科を越え、学年段階を通じて、系統的に学ぶものである。こうした教育内容の整理をしていくことが求められていることが、質問のメッセージである。

この二つの項目については、全国平均との差が大きいことから、各学校において指導内容の関連性・系統性の具体的な吟味や検討が、今後の課題であることがわかる。

県教育委員会では、毎年 11 月に「教育課程編成実施・編成協議会」を実施している。今年度の研修会でも、このカリキュラム・マネジメントについて、講義の中で触れるとともに、分散会においても話し合われていた。現場への浸透度という意味では、i) について課題がある。分散会の様子を見る限り、縦横のつながりを意識するという認識に、自信を持ってない主幹教諭・教務主任がいることが分かる。今後、様々な研修の機会の中で、カリキュラムマネジメントの i) について、取り上げ、伝えていくことが必要である。

一方で、ii) については、比較的高い数値となっている。これは、グランドデザインに各学校の P D C A サイクルを掲載しているの、全ての学校が意識して学校経営を行っていることがわかる。また、教育課程編成の研修会では、各校の P D C A サイクルの在り方等については、分散会テーマとして取り上げられてきている。各校でも、学校評価等を通じて、全

職員でこのサイクルを意識していることが考えられる。

しかし、これからは学校評価という大きな視点でのPDCAサイクルだけでなく、職員ひとりひとりが、学校の役割を認識し、校務分掌等の中でも、児童生徒の資質・能力という視点で、授業改善・学級経営を意識していくことが必要になる。また、本調査の結果についても、PDCAサイクルのCとしての活用が求められている。

iii) については、学校・家庭・地域の連携の項でも触れたが、静岡県の特徴として、高い数値を示している。

この三つの視点は、学校経営、特に管理職を中心とした取組という意識を捨て、全職員が「カリキュラム・マネジメント」の当事者である意識を持つ必要がある。

3つをそれぞれ見ていると、決して新しい視点ではない。しかし、今後は学校の教職員ひとりひとりが、学校の教育活動への参画意識を持つことが不可欠である。

教育課程編成という枠組みから、教職員ひとりひとり、それぞれの立場で、カリキュラム・マネジメントの視点で考えていくよう、各種研修会での働き掛けを継続していく。

表 31 平成 28 年度 カリキュラム・マネジメントに関する調査

番号	質問事項 (学校質問紙)	小学校		中学校	
		H28		H28	
		割合	差	割合	差
31	教育課程表(全体計画や年間指導計画等)について、各教科等の教育目標や内容の相互関連が分かるように作成していますか	78.6	-7.0	62.9	-14.9
		85.6		77.8	
32	教育課程表(全体計画や年間指導計画等)について、指導事項の系統性が分かるように作成していますか	75.0	-9.6	76.4	-8.9
		84.6		85.3	
33	児童(生徒)の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実践し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか	97.0	8.5	95.9	9.6
		88.5		86.3	
34	指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせていますか	93.1	1.7	80.6	9.3
		91.4		71.3	

(* 上段：静岡県、下段：全国)

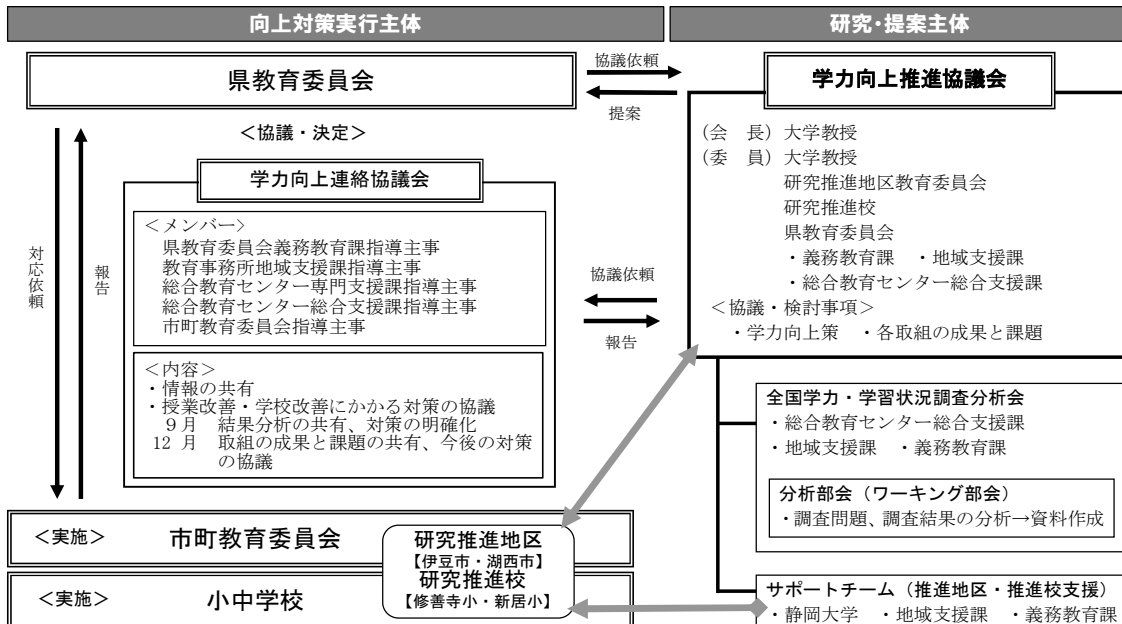
3 学力向上推進プロジェクト事業における取組

(1) 静岡県教育委員会（推進地域）の取組

○学力向上推進プロジェクト

確かな学力の育成のため、本調査結果を受け、学校、市町教育委員会、県教育委員会が連携し、学校改善・授業改善を支援する環境づくりや推進地区、推進校による実践研究を通じた学力向上の具体策を検討するとともに、更なる改善プランをまとめ、啓発していく。

学力向上推進プロジェクト事業スキーム



ア 推進地域としての取組内容

(7) 静岡県学力向上推進協議会の設置（年3回）

推進地域、推進地区、推進校の課題を踏まえた上で、重点課題を解決するための手だてを吟味し、推進校、推進地区の実践を通して成果について検証し、改善モデルを示す。

(4) サポートチームの派遣

年3回程度、推進校へ地域支援課担当指導主事を中心とするサポートチームを派遣し、学校改善・授業改善の支援を行う。

(9) 全国学力・学習状況調査分析会（年10回）

総合教育センター総合支援課、各教育事務所地域支援課、義務教育課が連携し、調査問題や調査結果の分析を行う。分析結果については、学力向上推進協議会、学力向上連絡協議会で報告するとともに、報告書にまとめ、全校へ配布する。

(1) 学力向上連絡協議会の実施（年2回）

県と市町教育委員会学力担当指導主事が一堂に会し、本県の学力に関する実態や対応策について協議する場を設定し、県と市町教育委員会が協力して学校支援を行う。

(6) 全国学力・学習状況調査分析支援ソフトの改善と配信

市町教育委員会、学校の要望を参考に、より活用しやすい分析支援ソフトを改善し、配信する。

(8) 全国学力・学習状況調査を活用したPDCA改善サイクルの定着

・ 早期対応・・・5月

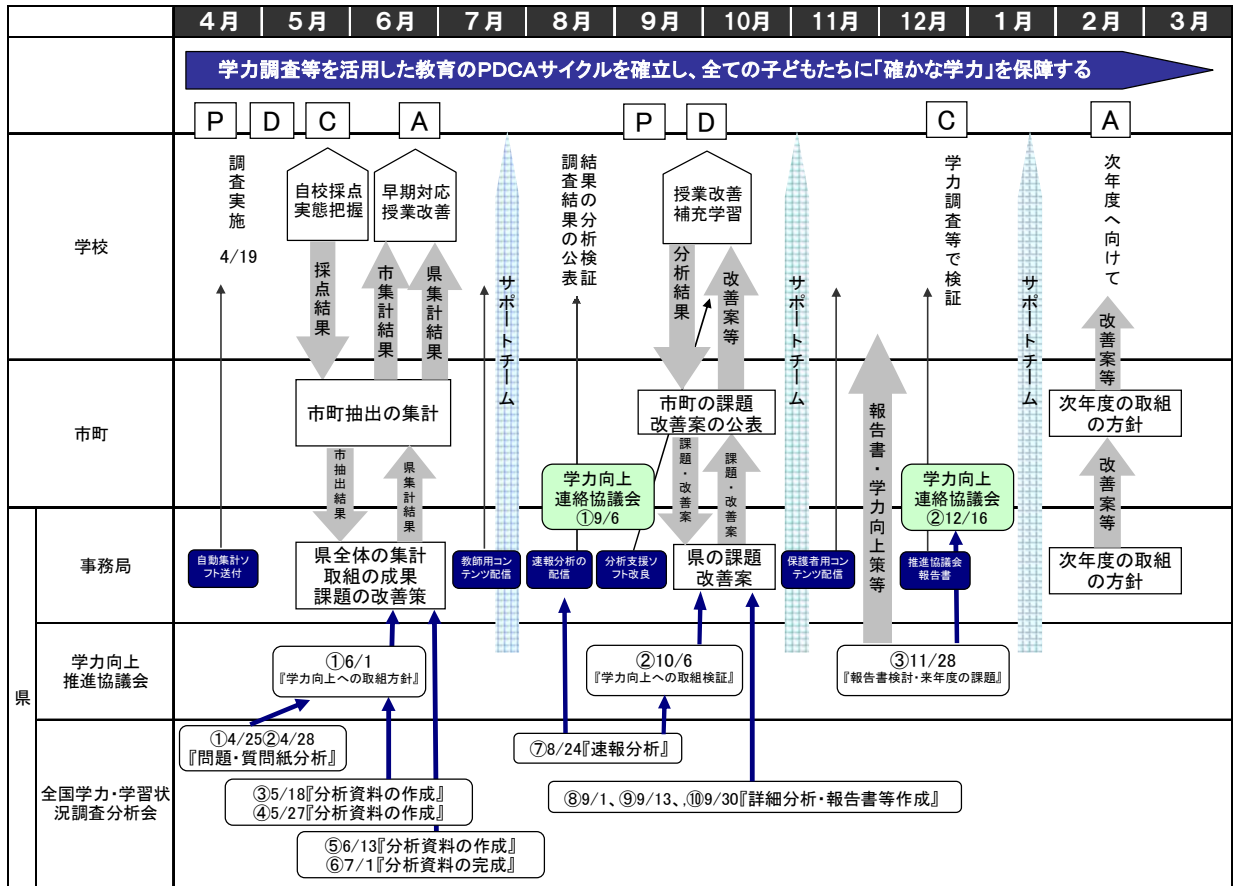
本調査調査実施後、各学校が独自に採点・分析等を行うとともに、その集計結果を県の速報分析として還元することで児童生徒の学力に関する課題を把握し、課題に対して早期に対応（児童生徒への指導・授業改善）する。

・ 調査結果の分析・検証・・・8～10月

分析支援ソフトを活用し、自校の課題を多面的に分析し、学校改善、授業改善に生かす。

・ 学力調査等による取組の検証・・・12～1月

平成28年度 学力調査等を活用した『P D C A』改善サイクル



イ 研究実施計画

	平成 28 年度（1 年次研究）	平成 29 年度（2 年次研究）
4 月	○研究推進地区、推進校指定 ○全国学力・学習状況調査分析会①②	○全国学力・学習状況調査分析会①②
5 月	○全国学力・学習状況調査分析会③④ ○早期対応	◆第 1 回学力向上推進協議会 ○全国学力・学習状況調査分析会③④ ○早期対応
6 月	◆第 1 回学力向上推進協議会 ◇サポートチーム派遣① ・推進校、推進地区	◇サポートチーム派遣① ・推進校、推進地区
7 月	○全国学力・学習状況調査分析会⑤⑥	○全国学力・学習状況調査分析会⑤⑥
8 月	○全国学力・学習状況調査分析会⑦ ・H28 全国学力・学習状況調査結果速報分析	○全国学力・学習状況調査分析会⑦ ・H29 全国学力・学習状況調査結果速報分析
9 月	●第 1 回学力向上連絡協議会 ○全国学力・学習状況調査分析会⑧⑨⑩	●第 1 回学力向上連絡協議会 ○全国学力・学習状況調査分析会⑧⑨⑩
10 月	◆第 2 回学力向上推進協議会 ◇サポートチーム派遣② ・推進校、推進地区	◆第 2 回学力向上推進協議会 ◇サポートチーム派遣② ・推進校、推進地区
11 月	◆第 3 回学力向上推進協議会 ・実践事例 ・報告書作成	◆第 3 回学力向上推進協議会 ・実践事例 ・報告書作成 ◇サポートチーム派遣③
12 月	●第 2 回学力向上連絡協議会	○研究成果の公表（推進地区・推進校） ●第 2 回学力向上連絡協議会
1～3 月	◇サポートチーム派遣③ ・推進校、推進地区	

ウ その他

(7) 「チア・アップシート」の作成・活用

本調査結果から、課題が見られる項目について、類似問題を作成し、解答例や解説と共に総合教育センターHP上に公開する。指導と評価の一体化を意識した授業改善や校内研修の活性化につなげていけるよう各種研修会等において活用を促進する。

(1) 「チア・アップコンテンツ」(動画コンテンツ)の作成・活用

動画コンテンツは、本県が掲げるICT教育の充実に資するものであり、紙媒体以上に発信可能な情報量も増え、視覚的なインパクトにより短時間で効果的な情報共有、情報活用が期待できる。本県では、昨年度より教員用と保護者用の動画コンテンツを作成し、県教育委員会HP上に公開している。

・チア・アップコンテンツ(校内研修支援用)【資料1】

本調査の問題や本県の現状と課題について教員が校内研修等で共有し活用することで、早期に学校改善、授業改善に生かすための動画コンテンツ(音声付きプレゼンテーション資料)を作成した。総合教育センターHP上に公開するとともに、市町教育委員会、小中学校に夏季休業中の研修会での活用を促した。

・チア・アップコンテンツ(家庭教育支援用)【資料2】

本県の現状と課題について共有し、学校と家庭の学びの連結を図るために、昨年度は「自ら進んで学ぶ力を育むための家庭学習」、本年度は「子どものよさを伸ばし、可能性を広げるほめ方」について保護者用動画コンテンツを作成した。義務教育課HP上に公開するとともに、活用推進に向けた広報を行っている。

平成28年度
全国学力・学習状況調査

**先生のための
千ア・アッフコンテンツ**

【国語】

静岡県教育委員会



ポイント

目的に応じて・・・話す・聞く、書く、読む

- ・全校集会で歌う歌を決める
- ・委員会を紹介するパンフレットを作る
- ・職場体験をする幼稚園に電話

主体的に学ぶ・・・自分の課題、問題

- ・食について興味を持ち調べたところ、もっと知りたいことが出てきたので店長へインタビュー
- ・レポートを読み直し、読みやすい文章にする

国語科で身に付けた力を生かす
・・・国語科と他教科、日常生活、
社会生活をつなげる

◆目的に応じて文章を比べ、考えを明確にする

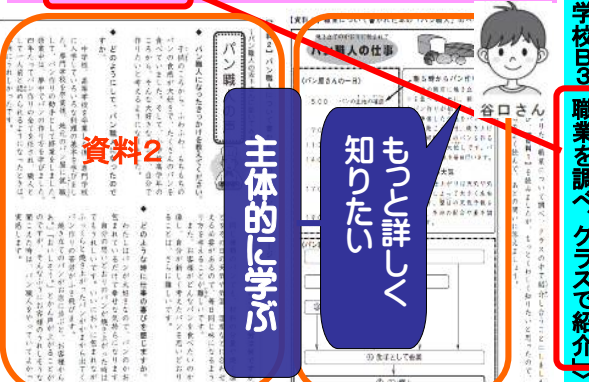
＜小学校B3「職業を調べ、紹介する」＞

資料2

主体的に学ぶ

もっと詳しく知りたい

谷口さん



◆目的に応じて文章を比べ、考えを明確にする

＜小学校B3「職業を調べ、紹介する」＞

国語科で付けた調べる力、紹介する力を生かす

谷口さん



◆目的に応じた情報の収集方法を考える


＜中学校B2「説明的な文章を読む」＞

主体的に学ぶ

宇宙工レーベーターのことをもっと知りたい

国語科の学習を、日常の読書生活に生かす

高橋さん



◆目的に応じた情報の収集方法を考える

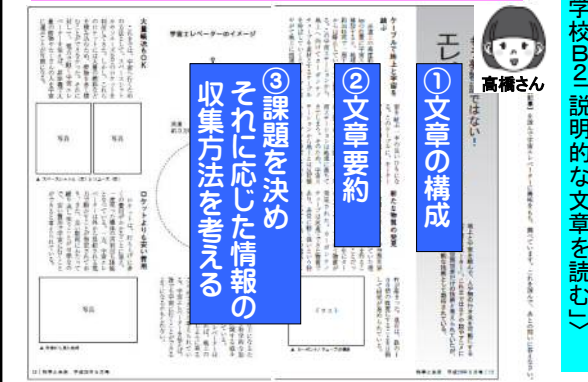
＜中学校B2「説明的な文章を読む」＞

①文章の構成

②文章要約

③課題を決め、それに応じた情報の収集方法を考える

高橋さん



図書のコーナーを自然科や理科の本の棚に行く

「読書センター」「学習・情報センター」

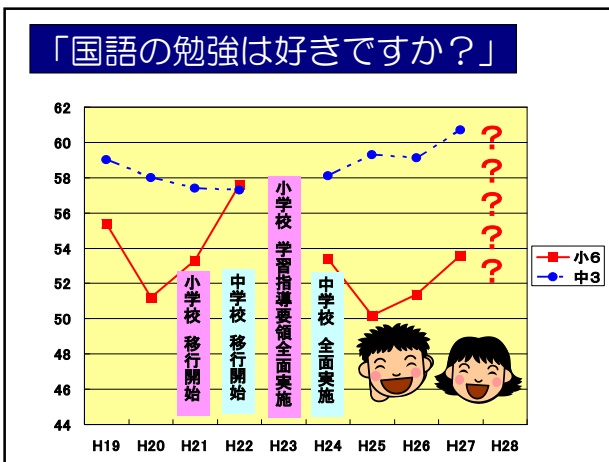
学校図書館の活用

宇宙エッセイを探索する

目的に応じて簡潔にまとめる

H27小学校	H28小学校
40～70字	30～50字
60～100字	40～60字
80～100字	25～50字
40～80字	40～60字

言葉を選び、過不足なくまとめる



授業アイデア例の活用

全国学力・学習状況調査の結果を基にした 授業アイデア例

全国学力・学習状況調査の結果を基にした 授業アイデア例

項目	ページ
国語	1
算数	3
理科	4
社会	6
総合的な学習の時間	7
道徳	9
外国語活動/外国語	11
特別活動	16
体育/保健体育	17
音楽	18
図画工作/美術	19
家庭/技術	20
総合的な学習の時間	21

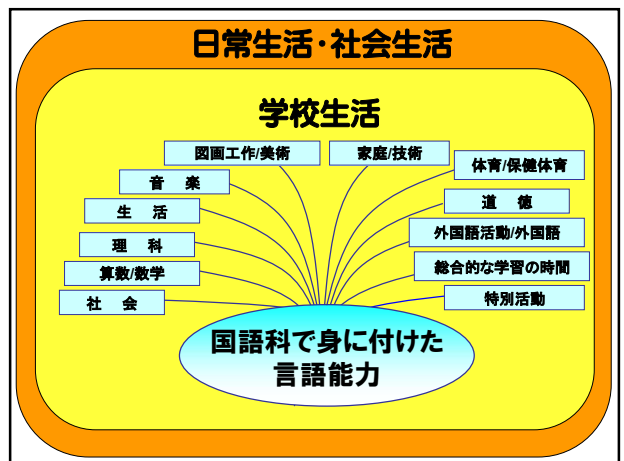
授業アイデア例の活用 平成27年度中学校P7, 8

「社会の中に居る情報を読み取りたい」

「人間らしさを高める」

「工場の未来」

「世界初！夢の映像」



平成28年度
全国学力・学習状況調査

先生のための 千ア・アッフコンテンツ

【算数・数学】

静岡県教育委員会



ポイント

意味理解

計 算

H28 算数A 2(3) 早期対応正答率 78.4

$$18 \div 0.9 = 20$$

商は 18よりも大きくなる
(わられる数)

計 算

計算技能 78.4
H28 算数A 1(1) 早期対応正答率 63.8 ↓14.6

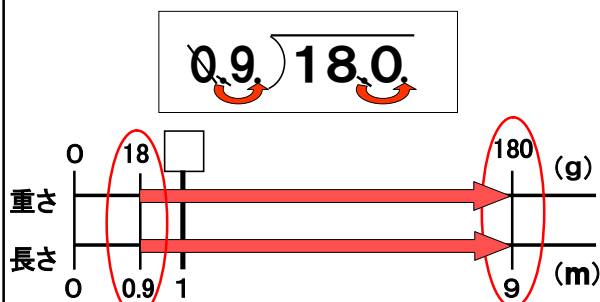
正しいものはどれですか。

□ ÷ 0.8 の商は、□より
(わられる数)
① 大きい 2 小さい 3 同じ

わり算だから...



計 算



小数点を右に1けた動かすことは、
10倍することと同じだね。

方 程 式

H28 数学A 3(1) 早期対応正答率 72.3

一次方程式を解きなさい。

$$\begin{aligned}x + 12 &= -2x \\ 3x &= -12 \\ x &= -4\end{aligned}$$

方 程 式

H28 数学A 3 (2)

$2x = x + 3$ について、
 $x = 3$ のとき、
 (左辺) = 2×3 (右辺) = $3 + 3$
 = 6 = 6


この方程式の解は？

方 程 式

H28 数学A 3 (2) 早期対応正答率 **46.8** ↑25.5
計算技能 72.3

ア この方程式の解は6である。
 イ **この方程式の解は3である。**
 ウ この方程式の解は3と6である。
 エ この方程式の解は3でも6でもない。

代入すると
6 になるから...




方 程 式

$2x = x + 3$



	$2x = x + 3$
$x = -2$ のとき	$-4 < 1$
$x = -1$ のとき	$-2 < 2$
$x = 0$ のとき	$0 < 3$
$x = 1$ のとき	$2 < 4$
$x = 2$ のとき	$4 < 5$
$x = 3$ のとき	$6 = 6$
$x = 4$ のとき	$8 > 7$

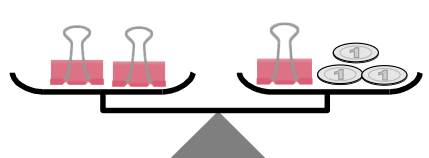
6 3 は が 両辺の式の値を表現している。方程式の解で。



方 程 式

$2x = x + 3$

クリップ  ... x g
 1円玉  ... 1 g



$2x - x = x + 3 - x$

学習指導の改善・充実のために

平成28年度
全国学力・学習状況調査

解説資料

一人一人の学習の学力・学習状況に応じた
学習指導の改善・充実に向けて

小学校 算数

平成28年度
全国学力・学習状況調査

解説資料

一人一人の学習の学力・学習状況に応じた
学習指導の改善・充実に向けて

中学校 数学

学習指導の改善・充実を図る際のポイントが記述されています。

形式処理 意味理解

計算ができる なぜなら！
 図がかけると

なぜ...？
 どうして...？

平成28年度
全国学力・学習状況調査

先生のための 千ア・アップコンテンツ

【質問紙】

静岡県教育委員会



調査責任者である校長先生が回答する「学校質問紙」には、今年度注目すべき点があります。

どんな点に注目すべきなんですか？



「学校質問紙」「児童質問紙」の一覧表がありますので、見てください。

一覧表がダウンロードできます。
カラー印刷していただくと、**新規・修正・復活の項目が色で示されている**ことが分かります。

学校質問紙の例

・習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をした。(35)
・道徳の時間において、児童(生徒)自らが考え、話し合う指導をした。(50)

新規

・図書館資料(前回 学校図書館)を活用した授業を計画的に行いましたか。(24)

修正

児童生徒質問紙の例

・人が困っているときは、進んで助けている。(41)
・「総合的な学習の時間」の勉強は好きだ。(44)

復活

質問項目から一部抜粋



注目1

学校質問紙 55 新規

国語や算数(数学)において、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、児童(生徒)の資質・能力がどのように伸びているかを、児童(生徒)自身が把握できるような評価を行った。

よく行った

どちらかと言えば行った

あまり行っていない

まったく行っていない

今まで、児童・生徒自身が把握できるような評価ができていたかなあ。

もう一度、自分の授業を振り返ってみる必要があるなあ。



振り返ったことをふまえて、**これからどんな授業をしていくかを考えることが**大切ですね。

注目2

学校質問紙

小学校 48 キャリア教育
 児童(生徒)に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしていますか。

中学校 77 特別支援教育
 学校の教員は、特別支援教育について理解し前年度までに調査対象である第3学年の生徒に対する授業の中で、生徒の特性に応じた指導上の工夫(板書や説明の仕方、教材の工夫など)を行いましたか。

注目2

小学校 48 キャリア教育

↓

つながりを意識する

学校生活 → 社会生活
今の自分 → 未来の自分

「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 語る 語らせる 語り合わせる で変える! キャリア教育」 国立教育政策研究所 H28.3

注目2

中学校 77 特別支援教育

↓

生活しやすい環境づくり
「分かる」「できる」授業づくり

静岡県総合教育センター「ユニバーサルデザインでみんな楽しい! みんな分かる! みんなできる!」より

学校質問紙で、他には、どんなことに注目すべきですか。

注目3

学校質問紙 本年度の特徴
「新規調査項目の大幅増加」

- ・小中連携
- ・カリキュラム・マネジメント
- ・教員研修
- ・評価
- ・主体性に関わる内容

新規調査項目
小中連携 ～近隣の中学校(小学校)と、授業研究を行うなど、合同して研修を行った。(中79)
カリキュラム・マネジメント ～指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせている。(34)
研修 ～(小学校において)個々の教員が、自らの専門性を高めていることとしている教科・領域等を決めており、校外の教員同士の授業研究の場に定期的・継続的に参加している。(小106)
主体性 ～児童(生徒)は、自らが設定する課題や教員から設定される課題を理解して授業に取り組むことができている。(小20)
評価については、学校質問紙55を参照

質問紙からのメッセージ

新しい教育の流れ

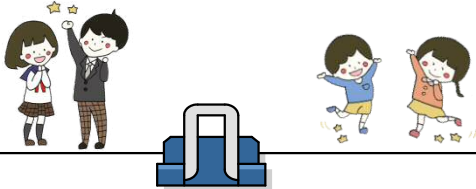
新しい時代に必要となる資質・能力

次期学習指導要領に向けて

小中学生の保護者のみなさまへ

「子どものほめ方」について いっしょに考えてみませんか!



子どものよさを伸ばし、可能性を広げるための「ほめ方」について**動画コンテンツ**を作成しました。



【内容】
9分の動画コンテンツ

【構成】

- はじめに
- 悩みや不安の共有
- 子どもを伸ばすほめ方のポイント
- 保護者の方へのメッセージ
- おわりに

チア・アップコンテンツ2016

子どものほめ方 編
～小・中学校の保護者のみなさんへ～





評価ではなく感動を!

親子で体験を共有する

↓

ほめ方のポイント⑤
I(アイ)メッセージ

子どもの存在をまるごと認める
子どもと向き合いよさを見つける
結果よりも努力のプロセスをほめる
発達段階や年齢に応じて
ほめ方を変える
I(アイ)メッセージでほめる

静岡県出身タレント
久保ひとみさんが出演しています

ほめることで
大人も笑顔!
子どもも笑顔!



静岡県教育委員会義務教育課HPより配信

<http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-060/index.html>

 You Tube でも視聴できます。「チアアップコンテンツ」で検索!



(2) 伊豆市教育委員会（推進地区）の取組

ア 研究課題

○読解力の育成をめざす国語科・算数（数学）科の授業改善

<本研究を通して達成しようとする目標>

- ・学力定着に課題を抱える学校数を3校以内にする。
- ・国語が好きな児童生徒の割合を増やす。【小学校60%以上、中学校75%以上】
- ・数学が好きな児童生徒の割合を増やす。【小学校75%以上、中学校60%以上】
- ・国語科における「書くこと」「読むこと」の正答率が全国&県平均をクリアする。
- ・小学校算数B、中学校数学Bにおける二極化の解消

イ 推進地区としての取組内容

本市の児童生徒の確かな学力の向上に向けて、研究課題「読解力の育成をめざす国語科・算数（数学）科の授業改善」を踏まえて組織的に実践研究に取り組むことにより、「わかる」「楽しい」「質の高い」授業の創造を目指す。

(7) 全国学力・学習状況調査、および標準学力調査（CRT）の活用

- ・標準学力調査（CRT）の結果をもとに自校の学力に関する課題を早期に把握し、授業改善に生かす。
- ・全国学力・学習状況調査の早期対応への積極的なデータ提出の呼びかけ（市内全小中学校）
- ・各校における分析と考察、および具体的な方策についてまとめ、市教委へ提出する。市の分析を含めて冊子の形にまとめ、各校に配付し、活用を促す。
- ・県の分析支援ソフトを活用し、自校の課題を多面的に分析し、学校改善・授業改善に生かす。

(4) 市教研や各種研修会の充実

- ・市教研（年4回）や各種研修会において、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業改善の在り方について周知していく。
- ・教育センターの研究推進委員会と連携し、市の授業改善の重点を授業の具体で発信していく。

(9) 修善寺小学校への支援

- ・修善寺小学校の要請に応じて、校内研修等を支援していく。
- ・標準学力調査（CRT）の結果について、経年による比較・分析を行う。

(1) 教育課程委員会の活用

- ・授業改善を図るための教育課程を改善・充実させるとともに、目指す授業像を共有する。

(2) 家庭や地域への啓発

- ・市、及び各校の結果をホームページ等に公表したり、リーフレットにまとめて配布したりすることで、保護者や地域と情報を共有する。【資料3】
- ・家庭向けリーフレットを保育・こども園に掲示を依頼し、学校での取組について共通理解を図る。

ウ 研究実施計画

平成28年度		平成29年度	
月	計画	月	計画
4	教務主任者会 CRT標準学力調査実施 全国学力・学習状況調査実施	4	教務主任者会 CRT標準学力調査実施(修善寺小) 全国学力・学習状況調査実施
5	教育課程委員会① 全国学力・学習状況調査早期対応 (各校による分析)	5	教育課程委員会① 全国学力・学習状況調査早期対応 (各校による分析)
6	市指定研究発表(土肥中) CRT標準学力調査結果 (各校による分析)	6	市指定研究発表(中伊豆中) CRT標準学力調査結果 (修善寺小による分析)
7	伊豆市教育センター総会	7	伊豆市教育センター総会
8~9	調査結果の分析検証 (分析支援ソフト)	8~9	調査結果の分析検証 (分析支援ソフト)
9	学力・学習状況調査説明会(文科省)	9	学力・学習状況調査説明会(文科省)
10	市指定研究発表会(熊坂小)	10	市指定研究発表会(修善寺東小)
11	市指定研究発表(天城小) 家庭向けリーフレットの発行	11	市指定研究発表(中伊豆小) 家庭向けリーフレットの発行
12	教育課程委員会②	12	教育課程委員会②
1~3	教育課程委員会③ 研究の検証とまとめ	1~3	教育課程委員会③ 研究の検証とまとめ

学校からの要請で指導主事派遣・推進校へ指導主事派遣

学校からの要請で指導主事派遣・推進校へ指導主事派遣

エ 成果等の把握と検証の手立て

推進地区については、全国学力・学習状況調査結果の経年比較から、成果と課題を検証する。推進校については、平成28年度と平成29年度の全国学力・学習状況調査の結果と、標準学力調査(CRT)、質問紙調査の結果から、児童の学力の定着状況を把握し、成果を検証する。

オ その他

家庭向けリーフレットの記載内容の工夫・改善に努める。

保護者・地域の皆様へ

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果をお知らせします

～「全国学力・学習状況調査」の結果から見える伊豆市の子どもの姿です!!～

調査実施日：平成28年4月19日(火) 参加状況：小学6年生 228人 中学3年生 242人

伊豆市教育委員会

全国学力・学習状況調査は、子どもたちの学力を把握するための「教科に関する調査(国語、算数・数学)」と、学力の背景にある「生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査」で構成されており、「子どもたちの学力や学習・生活状況を把握・分析し、教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる」ことを目的としています。つまり、この結果を活用して、学校と家庭、地域が連携しながら、子どもたちの学力向上や豊かな心の育成、規則正しい生活習慣の定着をめざしていくことが望まれます。

以下に、調査結果から見える伊豆市の子どもの姿をリーフレットとしてまとめました。子どもたちの健やかな成長のために、各家庭でご活用いただければ幸いです。

1 調査結果の概要

① 教科に関する調査結果(市平均正答率と全国との比較)

平均正答率	小学校				中学校			
	国語A	国語B	算数A	算数B	国語A	国語B	数学A	数学B
H27	◎	◎	◎	○	○	○	◎	○
H28	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	◎

◎：全国+3.0ポイント以上
○：0～+2.9ポイント
△：0～-2.9ポイント
▲：全国-3.0ポイント以下

今年度も、小・中学校ともに、すべての教科で全国平均正答率を上回っています。小学校の算数B、中学校の国語Aを除く6つの教科区分で全国を大きく上回っており、昨年度に引き続いて、子どもたちの学力はさらに良好な状況にあると言えます。

② 領域別の回答状況(市平均正答率と全国との比較)

国語

領域別平均正答率	小学校国語A				小学校国語B			
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語に関すること	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	
H28	○	○	△	◎	◎	◎	◎	

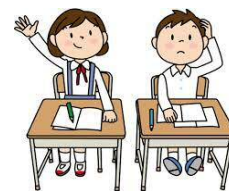
領域別平均正答率	中学校国語A				中学校国語B			
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語に関すること	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	
H28	○	◎	○	○	△	◎	◎	



算数・数学

領域別平均正答率	小学校算数A				小学校算数B			
	数と計算	量と測定	図形	数量関係	数と計算	量と測定	図形	数量関係
H28	○	◎	◎	◎	○	◎	◎	○

領域別平均正答率	中学校数学A				中学校数学B			
	数と式	図形	関数	資料の活用	数と式	図形	関数	資料の活用
H28	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎



2 児童生徒質問紙調査結果の傾向(特徴的な事柄のみ)

① 小学校回答状況

学習について	生活について
<p>【よかったところ】 ○家庭学習の習慣がしっかりと身につけている 「平日に、家庭での学習時間を1時間以上確保している」と回答する割合は、全国や県に比べて高くなっています。また、「家で、学校の宿題をしていますか」という質問に対する肯定的な回答の割合も非常に高い数値を残しています。</p> <p>【改善したいところ】 ●文章を書くことに抵抗がある 「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くことが難しい」と回答する割合が、全国や県に比べて高い傾向があります。</p>	<p>【よかったところ】 ○地域とのかかわりを大切にしている 「地域の行事に参加している」と回答する割合は、全国や県に比べて非常に高い結果を残しています。 ○規範意識が高い 「学校のきまりを守っている」「いじめはいけない」という質問に対して肯定的な回答を述べる割合は、全国や県に比べて高くなっています。</p> <p>【改善したいところ】 ●自尊心がやや低い 「自分には、よいところがある」と回答する割合が、全国や県に比べると、わずかに低い結果となっています。</p>

② 中学校回答状況

学習について	生活について
<p>【よかったところ】</p> <p>○家庭学習の習慣がしっかりと身につけている 「家で、学校の宿題をする」と回答する割合が、全国や県に比べて高い数値を残しています。また、「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」と回答する割合も、比較的高い傾向にあります。</p> <p>【改善したいところ】</p> <p>●自分の考えや意見を発表することに抵抗がある 「友達の前で自分の考えや意見を発表することが得意である」と回答する割合が、全国や県に比べて低い傾向があります。</p> <p>●授業の予習・復習をしていない 「家で、授業の予習(復習)をしている」と回答する割合が、全国や県に比べて低い結果となっています。</p>	<p>【よかったところ】</p> <p>○地域とのかかわりを大切にしている 小学校と同様に、「地域の行事に参加している」と回答する割合は、全国や県に比べて非常に高い結果を残しています。</p> <p>○充実した学校生活を送っている 「学校に行くのは楽しい」「学校で、友達に会うのは楽しい」と回答する割合が、全国や県に比べて高い傾向があります。</p> <p>【改善したいところ】</p> <p>●自己肯定感・自己有用感がやや低い 「将来の夢や目標を持っている」と回答する割合が、全国や県に比べると、やや低い結果となっています。</p>

3 学習・生活習慣と学力との関係

次のような児童生徒は、教科の平均正答率が高い傾向にあります

<p>【基本的生活習慣】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎日、朝食を食べている ・毎日、同じくらいの時刻に寝ている ・毎日、同じくらいの時刻に起きている 	<p>【家庭でのコミュニケーション・メディアとのかかわり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家の人と学校での出来事について話をする ・ゲームの時間が少ない ・携帯電話やスマホを利用する時間が少ない
<p>【家庭学習・読書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭での学習時間は、1時間から3時間程度である ・読書が好きである ・文章を書くことが好きである 	<p>【学校生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の前で自分の考えや意見をよく発表する ・友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞く ・友達に会うのは楽しい
<p>【自尊感情・規範意識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校のきまりを守っている ・自分には、よいところがある ・将来の夢や目標を持っている 	<p>【社会への興味・関心】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域や社会の問題や出来事に興味がある ・新聞を読んでいる ・ニュース番組やインターネットのニュースを見る

4 ご家庭で大切にしてほしいこと

今年度の全国学力・学習状況調査【小・中学校】の分析をもとに、「ご家庭で大切にしてほしいこと」として、6つの項目をまとめました。できることから、ぜひ始めてみてください。

<p>①新聞を読む習慣を身につけましょう</p> <p>新聞を読んでいますか【中】</p>	<p>②家族の一員としての役割をもちましょう</p> <p>家の手伝いをしていますか【小】</p>	<p>③夢や目標を語り合う機会をもちましょう</p> <p>将来の夢や目標を持っていますか【中】</p>
<p>④朝ごはんを毎日食べましょう</p> <p>朝食を毎日食べていますか【小】</p>	<p>⑤ゲームやスマホのルールを決めましょう</p> <p>1日どれくらいの時間ゲームをしますか【中】</p>	<p>⑥本に親しむ機会を広げましょう</p> <p>読書は好きですか【小】</p>

(3) 伊豆市立修善寺小学校（推進校）の取組

ア 研究課題

○「わかる授業」を目指し、授業改善を進めるとともに、つきたい力を明確にした取組を継続する。

イ 推進校としての取組内容

(ア) 学力に関する課題の把握

全国学力学習状況調査や市実施の標準学力調査の分析とともに、1年～5年生にも質問紙を実施し、児童の学力状況を多面的に把握し課題を共有する。

(イ) 「わかる授業」をめざす授業改善

どの児童にもわかる授業を実践することが学力の向上につながると考える。そこで本校では、自分の考えを進んで表現し、友だちと関わり合いながら、問題を解決する子どもの姿をめざして、以下のような視点で授業改善に取り組む。

- ① 子どもが自ら問いを持てるように発問を工夫し、主体的な問題解決ができるようにする。
- ② 自分の考えを表現し合い、関わり合いながら問題を解決できるように、学習形態や支援の仕方を工夫する。
- ③ 協働的な学びを通して、思考力、判断力、表現力を育む。
- ④ 外部講師の招聘や地域支援課の指導助言を仰ぎ、授業の分析、改善を図っていく。
- ⑤ 毎回「学習形態の工夫」「協働的な学びの工夫」「発問・支援の工夫」の3つの視点を基準にワークショップ型の授業研究を行い、主体的な協議や授業分析の構造化を図り、つながりのある授業研究を推進する。

(ウ) つきたい力を明確にした継続的な取組

協働的な学びが成立するために、児童に必要な力を洗い出し、それらの力の向上させることが、授業を充実させ学力の向上につながると考え、以下のことに継続して取り組む。

- ① 朝学、ドリルタイム、フォローアップタイムに、繰り返し学ぶことで既習事項の定着を図る。また、活用問題に取り組むなど内容を工夫し、思考力の向上を図る。
- ② 修善寺地区4小学校共通の習熟テスト「はかせテスト」を年間3回実施、小中連携して基礎学力の定着を図る。
- ③ 辞書引き学習や読書活動を充実させ、語彙を増やす。
- ④ 学年にあった「話す」「聞く」ルールを提示し、指導、評価を継続していく。
- ⑤ 各教科等で言語活動を充実させ、表現方法を工夫して伝えることができるようにする。
- ⑥ Q Uテストの活用や人間関係づくりプログラムの実施、学級会での話し合い活動の充実などを通して、相互理解しあう学級集団づくりをすすめる。
- ⑦ 「家庭学習のすすめ」や「自ら学ぶ子へ」を各家庭に配布し、家庭学習の習慣化を図るとともに、学校だより等で、学力向上への取組を啓蒙し、家庭と連携して推進していく。【資料4】、【資料5】
- ⑧ 子ども一人一人が夢や目標をもって取り組むことができるよう、意図的な支援をしたり、教育課程を工夫したりする。

ウ 研究実施計画

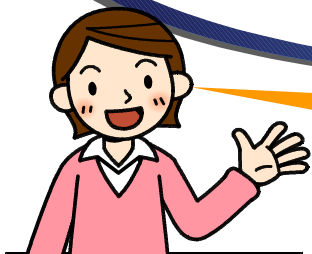
平成28年度		平成29年度	
月	計 画	月	計 画
4/5 13 20	<ul style="list-style-type: none"> 標準学力調査の実施（2～6年） 研究の方向性、研修計画の検討 児童の実態、課題の共通理解 学力学習状況調査の採点、分析 	4/	<ul style="list-style-type: none"> 研修計画の検討、共通理解 標準学力調査の実施（2～6年） 質問紙（2～5年）実施 全国学力学習状況調査の実施、採点、分析
5/16	<ul style="list-style-type: none"> QU検査実施 		
6/8 13 15 22	<ul style="list-style-type: none"> 授業研究 6年「算数」 標準学力調査、QU検査の分析 松元新一郎静大教授、地域支援課指導主事を招いて授業公開、研修 授業研究 2年「国語」 	5/	<ul style="list-style-type: none"> QU検査実施
7/6	<ul style="list-style-type: none"> 5年 授業研究「算数」 地域支援課指導主事派遣要請 質問紙実施（1年～6年） 	6/	<ul style="list-style-type: none"> 標準学力調査、QU検査の分析 授業研究 地域支援課指導主事派遣要請
		7/	<ul style="list-style-type: none"> 授業研究 地域支援課指導主事派遣要請
8/24	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上研修(取り組みの見直し、質問紙分析、指導案検討、チャア ップコンテンツ視聴等) 全国学力学習状況調査の分析 	8/	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上研修（研究の成果と課題の検討、指導案検討等） 全国学力学習状況調査の分析
9/7 12 21	<ul style="list-style-type: none"> 授業研究 4年「特別活動」 指導案検討 指導案検討 	9/	<ul style="list-style-type: none"> 授業研究 地域支援課指導主事派遣要請 指導案検討
		10/	<ul style="list-style-type: none"> 指導案検討 発表要項検討 地域支援課指導主事派遣要請 指導課訪問 研究発表会等への参加
10/7 13 18	<ul style="list-style-type: none"> QU検査実施 市指定研究発表会参加 指導課訪問 中心授業 4年「算数」 	11/	<ul style="list-style-type: none"> 研究発表会実施 地域支援課指導主事等講師派遣要請
11/8 14 16 30	<ul style="list-style-type: none"> 市指定研究発表会参加 QU検査の分析 地区一斉授業研究会参加 授業研究 3年「算数」 地域支援課指導主事派遣要請 	12/	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上に関する家庭意識調査実施分析
12/16	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上に関する家庭意識調査 	1～3	<ul style="list-style-type: none"> 定着度調査実施、分析 研究のまとめ（成果と課題）
1/12	<ul style="list-style-type: none"> 定着度調査実施 意識調査分析 		
2/1 15	<ul style="list-style-type: none"> 定着度調査分析 授業研修 1年「算数」 地域支援課指導主事派遣要請 		
3/1	<ul style="list-style-type: none"> 1年目研究の成果と課題 2年目に向けて 		

家庭学習のすすめ

伊豆市立修善寺小学校

学ぶ土台作り
自ら学ぶ子どもを育てるために
家庭で学習する習慣を
しっかり付けましょう。

- 1 勉強する時間を確保しましょう。
- 2 子どもがしたことに目を通し、声をかけましょう。



- ◇子どもが やったことに 目を配りましょう。
- ◇分からなくて 困っていることはないか。
- ◇子どもが 家庭学習をやりとげたか。

- 学習環境を整えるために**
- ☆生活のリズムをつくりましょう。
 - ☆勉強する場所や、勉強を始める時刻を 決めましょう。
 - ☆勉強する時は、テレビを消しましょう。
 - ☆週末は家庭読書の日です。家族で読書を楽しみましょう。

- ◇子どもと話し合って 決めましょう。
- ◇家の生活に合わせて 勉強を始める時刻を 決めたいものです。

19日は、
ノーマティアデー
です。



親子で 読書や読み聞かせ をする時間をつくり ましょう。

低学年	20分以上	宿題は確実に済ませます。読書の習慣を身に付けます。
中学年	40分以上	宿題は確実に済ませます。読書をしませます。
高学年	60分以上	宿題を済ませ、自分で計画した自主学習に取り組みます。読書をしませます。

☆週末は家庭読書の日です。どの学年も読書が宿題になっています。

身につけたい学びの習慣

＜基本的な生活習慣を身につける・心を育てる＞…早寝・早起き・朝ご飯

- ・朝ご飯をしっかり食べている子は、学習意欲が高く、学んだことの定着も良いと言われています。医学的にも朝食の脳の働きに対する効果は証明されています。しかし、朝ご飯をきちんと食べることはそれだけではありません。「決まった時間に起きて朝ご飯をきちんと食べる」という生活のリズム（基本的な生活習慣）が確立していることに大きな意味があります。基本的な生活習慣が身に付いている子どもは、学習意欲も高いということでしょう。
- ・あいさつ、早寝、早起き、手伝い、善悪の判断の実行などの基本的な生活習慣を身につけることを通して、子どもは我慢することや頑張る心など心の強さも身に付けていきます。基本的な生活習慣（しつけ）は、単なる行儀作法の問題ではなく、子どもの心を育てることであり、子どもが勉強しようとすることを支えるものだと考えます。

＜読書＞…身近に本を置いて、親子で読みましょう ☆週末は家庭読書の日☆

- ・いつも手の届くところに本を置くことから始めましょう。学校でも図書室の本を借りて読むことや学年おすすめの本を決めて読むことをすすめています。
- ・親がテレビを見て、子どもだけに読書をさせようとしてもうまくいきません。時にはテレビを消して親子それぞれ好きな本を開きましょう。
- ・子どもを本好きにする効果的な方法が、読み聞かせです。読み聞かせを始めるのは、高学年であっても決して遅くありません。※各学年で、必読図書が決められています。

＜漢字練習＞…正確に覚えようとする気持ちをもって、繰り返し練習します

- ・教科書やドリルを見て、正しくていねいに書くようにします。熟語で書いたり、送り仮名や読み仮名をふったりすると、漢字を使う力のアップにつながります。
- ・一度覚えても使わないと忘れてしまいます。記憶を呼び覚まし、確かな力とするためにも、漢字練習を繰り返し行うことが大切です。
- ・週末に漢字ノートやプリントを見て、正しくていねいに書いているかみてください。

＜計算練習＞…つまづきを見つけるところから、新たな学習が始まります。

- ・繰り返し練習することで、正確さと速さが身に付きます。教科書の問題や計算ドリルを繰り返し行います。塾に通っている子どもは、塾でやった問題にもう一度挑戦してもよいと思います。
- ・計算練習に取り組んだら、答え合わせもします。間違えた問題はそのままにしないで、その場ですぐ直すと効果的です。どうしても解き方の分からないところは、先生にたずねるようにしましょう。
- ・週末に計算ドリルやプリントを親子で答え合わせしたり、見取りをしたりしてください。

＜音読＞…音読を通して子どもとふれ合しましょう

- ・声に出してすらすら読めることは理解のために大切なことです。また、文の構成や言葉のリズムを感じることができ、言葉を使う力が豊かになります。
- ・作業や家事をしながらでもかまいません。その日のめあてやポイントをしばって子どもの音読を聞いてあげてください。音読の内容から、家族で言葉のキャッチボールができるとさらによいですね。

＜日記＞…自分の気持ちを豊かに表現する力がつきます

- ・テーマに沿った文章や、日々の振り返りをするを継続することで、「書く」ことに慣れ、表現の仕方を次第に充実させることができるようになります。
- ・習った漢字を使うことで漢字が身につきます。
- ・丁寧な文字で文章を書くように心掛けたいです。

自ら学ぶ子へ

修善寺小学校

学校での指導

○朝読書

- ・朝の読書タイム（月曜日）朝15分間、静かな中、自分の選んだ本を読みます。
- ・読み聞かせ（保護者、児童）保護者の協力を得て、お話や本の楽しさを紹介します。上級生が下級生に紙芝居や絵本を読み聞かせします。
- ・「読んでおきたい本」のリストアップ様々なジャンルの本にふれることができるよう必読書を選定し、「伊豆市100選」に挑戦します。
- ・「読書でビンゴ」「多読賞」などを企画し、本にふれる機会を多くし、多読を奨励します。

○朝学（国語…火・木 算数…水・金）

朝学の15分間、漢字や計算の学習をし、授業で学んだことの定着や活用を図り、理解を深めます。

○ドリルタイム

水曜日の昼休み15分間を使ってドリル学習し、苦手なところを練習します。

○博士テスト

学期に一度、「博士テスト」を実施します。全学年とこれまでの学習で習ったことを振り返ります。80点以上が合格です。自分のためややり方を考え、練習に励みます。

○音読

はつきりとした声で正確に読むことができるように、言葉の意味を理解させながらすすめています。友達の前で声を出すことも必要だと考えています。文章の内容によって感情を込めて読んだり、淡々と読んだりすることができるよう読み方を工夫しています。

○計算

算数の授業では、数の概念や計算の意味、方法を考える授業が中心になります。

○漢字練習

新出漢字を指導するときは、大きく文字を書き、読みかえ、漢字の成り立ちまで学習します。筆順、止め、はね、はらいなど間違えやすい点もチェックしていきます。漢字小テストも行います。

○一人一役の活動

当番の活動や係、委員会活動などを通して、みんなが過ごしやすい環境をつくったり、集団での生活を支えたりする活動を指導します。

○あいさつ

あいさつの大切さや意味をいろいろな場面をとらえて指導します。朝のあいさつ運動や授業のあいさつ、返事の仕方などの指導を進めます。

○規則正しい生活

時間を守って行動したり、決められた時間内に課題を処理したりすることができるように指導します。

○食育の重視

配膳や片付け、偏食を改善するための給食指導を進めます。栄養3色についても理解を深めます。

○体力作り

朝の自主運動、リレー会の定期的な実施などによって運動へ主体的に参加できるように配慮します。体力アップコンテスト、体力テストに向けて目標をもって取り組みます。

学びの習慣化

自ら学ぶ子に しましょう。

本が好きの子に しましょう

表現できる子に しましょう。

計算好きの子に しましょう。

漢字に強い子に しましょう。

思いやりをもって規則正しい生活ができる子に しましょう。

動き

見届け

声かけ

家庭での学び

○読書

- ・身近に本を置きましょう。手に取れる場所に本を置くことから始めましょう。
- ・ノーメディアデー、週末読書子どもだけで読ませようとして、親がテレビを見てはうまきせん。時にはテレビを消せば、静かな中で親子それぞれに好きな本を開けます。読み聞かせは読書好きにする一番の方法です。うまき読む必要はありません。子どもにとっては、自分のためにお父さんやお母さんが読んでくださるといことが嬉しいことなのです。高学年でも決して遅くありません。慣れてきたら、役を決めて読んで、ページごとに交代をしたり子どもを参加させていくことも考えられます。

○音読

家庭学習カードを利用して音読に取り組みます。声に出しすらすら読んであげてください。その日のめあてやポイントを絞って聞いてあげてください。

○計算

教科書の問題やドリル、プリントなどを家庭学習として行います。繰り上がりのたし算、繰り下がりの引き算、九九の練習など、基礎的な計算の練習を継続して行うことが計算力アップにつながります。つまづきが見られた場合には、あせらずに、励ましながら、その子にあった内容、方法で繰り返し練習をしましょう。間違えを見つけたら、その場で直すようにすると効果的です。

○漢字

ねらいをはっきりさせてから練習します。教科書や漢字ドリルを見て正確に書かせるようにします。正しい漢字をていねいに書くことがつきます。漢字辞典を活用して、熟語をたくさん覚えましょう。

○手伝い

お風呂掃除、食事の準備片付け、洗濯物の片付け、部屋の掃除など家族の一員として自分の役割をもち、その役目を果たすということは「社会の一員として生活することの根幹となる経験ができます。できたら、褒めてください。そうすることで、自己肯定感が高まります。

○あいさつ

あいさつはコミュニケーションの第一歩です。「おはよう」「こんにちわ」「ごめんなさい」「おやすみなさい」など短い言葉でも気持ちや伝えていることができます。

○早寝早起き朝ご飯

早く寝て体を休めることは、成長ホルモンの分泌をうながし、心身の健全な発達に大きく関わります。集中力がつき、落ち着いた生活習慣が身に付きます。

○豊かな食習慣

朝食は健康をうながし、脳にエネルギーを送ります。学習にもよい影響を与えているといわれています。赤・黄・緑がそろった食事をとりましょう。おやつは量や種類の工夫も大切です。

○運動の習慣

長時間のテレビゲーム、携帯ゲームをすることは脳の前頭前野にダメージを与えるといわれています。適度な運動をすることで、汗を流す楽しさを体感し、食欲も増します。また、体を動かすことは脳を活性化させます。

自主学習
予習をしたり、学校で学んだことを繰り返し練習したり、まどめたりします。
また、自分の興味のあることを調べたり、深めたいことを学びを追求していきます。
どうすることで、進んだ学ぶ力、まどめる力がついていきます。（熟語調べなど学年に応じて内容はいろいろ考えられます。）

☆努力していることやよくできたことを認めることが子どもにとって大きな励みになります。
☆指導の仕方でよく分らない点は、担任に気軽に相談してください。

(4) 湖西市教育委員会(推進地区)の取組

ア 研究課題

- 子どもが興味・関心を持ち、主体的に学ぶ単元構想と授業づくり
- 知識や情報を活用しながら、考えをまとめ、表現することができる力の育成と教科横断的な視点を大切にされた教育活動

イ 推進地区としての取組内容

(7) 湖西市学力学習研究課題の確認と各校での実践

平成27年度「全国学力学習状況調査湖西市版早期対応」において分析した結果、成果及び課題として明らかになったことや、対応後も引き続いて課題となっている点を「湖西市学力学習研究課題」として小中学校に伝達する。各校においては、自校の校内研修との関連を図りながら、本課題の改善に向けた具体的方策を授業改善に生かしていく。なお、定着が図られていない内容については、各校で適切な指導法の検討を行い、実践していく。

【資料6】

また、市教育委員会学校訪問時には、主幹教諭、教務主任及び研修主任との面談を行い、課題解決に向けての進捗状況を随時確認し、助言していく。さらに、課題の分析結果を保護者にも配布し、子どもたちの学習に対する意識の変容や、得意、不得意な部分を知らせ、家庭学習への関心を深めるようにする。

(4) 「湖西市学力向上検討会」の実施

年2回実施。静岡県学力向上推進協議会を受け、各校主幹教諭・教務主任を対象に、協議会で出された内容について伝達する。「湖西市学力学習研究課題」を視点として話し合い、各校の課題解決に向けて成果を上げた研究実践・授業実践の紹介や、授業づくりに有効な情報の交換、改善策についての検討等をする会として位置付ける。この会で得たことを自校へ持ち帰り、研修主任と連携しながら校内研修を充実させる。

(5) 推進校および市内小中学校へ指導主事を派遣

推進校の校内研修や授業研究の充実に向けて、県によるサポートチーム派遣事業を活用する。併せて、教育事務所指導主事による授業実践に対する指導・支援訪問を要請する。また、湖西市教育委員会指導主事と研修指導員が協力校を含めた市内の全小中学校を定期的に訪問し、主体的な学びと知識・技能の活用が意識された授業づくりに向けて、静岡県総合教育センター作成資料「アクティブ・ラーニング」及び「カリキュラムマネジメント」リーフレットを活用しながら指導・助言を行う。

(E) 家庭への啓発を図る 【資料7】

「子育て・学びの基礎 7つの取り組み」の啓発資料を、各家庭に配布する。学力向上の基盤となる家庭学習の大切さを保護者に伝え、学校と家庭が共通理解しながら、児童生徒の学びを支えていくことを伝える。

ウ 研究実施計画

		実 施 内 容	
時 期	県	市	小中学校
H28. 4月		<ul style="list-style-type: none"> 「子育て・学びの基礎 7つの取り組み」配布 H28 湖西市学力学習研究課題伝達 	
5月			<ul style="list-style-type: none"> 全国学力学習状況調査分析
6～7月	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上推進協議会① サポートチーム派遣① 	<ul style="list-style-type: none"> 湖西市版早期対応報告書集約 学校訪問 	<ul style="list-style-type: none"> 授業実践
9～10月	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上推進協議会② サポートチーム派遣② 	<ul style="list-style-type: none"> 学力学習状況調査結果の分析 「子育て・学びの基礎 7つの取り組み」改訂版家庭に配布 学力向上検討会① 学校訪問 	<ul style="list-style-type: none"> 授業実践 学力向上検討会①(各校主幹教諭・教務主任)
11月	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上推進協議会③ 	<ul style="list-style-type: none"> 学校訪問 	<ul style="list-style-type: none"> 授業実践
12月		<ul style="list-style-type: none"> 学力向上検討会② 実践事例集約 	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上検討会②(各校主幹教諭・教務主任) 実践報告(協力校)
1～3月	<ul style="list-style-type: none"> サポートチーム派遣③ 	<ul style="list-style-type: none"> 湖西市学力学習研究課題検討・伝達 	
H29. 4月		<ul style="list-style-type: none"> 協力校へ指導主事派遣(構想確認) 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上推進協議会① サポートチーム派遣① 		<ul style="list-style-type: none"> 全国学力学習状況調査分析
6～7月		<ul style="list-style-type: none"> 湖西市版早期対応報告書集約 学校訪問 	<ul style="list-style-type: none"> 授業実践
9～10月	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上推進協議会② サポートチーム派遣② サポートチーム派遣③ 	<ul style="list-style-type: none"> 学力学習状況調査結果の分析 学力向上検討会① 学校訪問 	<ul style="list-style-type: none"> 授業実践 学力向上検討会①(各校主幹教諭・教務主任)
11月	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上推進協議会③ 	<ul style="list-style-type: none"> 学校訪問 研究発表会 	<ul style="list-style-type: none"> 授業実践 研究発表会(協力校)
12月		<ul style="list-style-type: none"> 学力向上検討会② 報告書作成 	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上検討会②(各校主幹教諭・教務主任) 報告書作成
1～3月		<ul style="list-style-type: none"> 指導主事派遣 研究成果のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 研究成果のまとめ

エ 成果等の把握と検証の手立て

学力調査、児童生徒の学習記録・意識調査から学びの変容を捉え、取組の成果と課題を明らかにする。

<p>教科</p>	<p>①昨年度の取組</p> <p>朝読書や「おすすめ20冊」を継続し、語彙を増やす。 「漢字チャレンジ」の継続 ノートに立場や根拠を明確にし、自分の意見を書く機会を増やす。 学校だけでなく家庭にも働きかけ家庭学習の充実を図る。 各学年で繰り返し指導している。学習に必要な語彙を国語と社会科の教科書などから洗い出す。その際、始めにきちんと指導する学年を設定する。 まず、国語科の学習で図と文章とがどのように対応しているかを確かめながら指導する。図以外にも、物語文の挿絵や、その他の文章などで写真が挿入されている場合などでも、それがどの文章と対応しているかを押さえる指導が必要だと思つた。 また、文章と図とを関係づけて読む指導場面は国語科よりも、むしろ社会科や理科の学習で、行う場面が多いと思う。その指導面で、教師が「文章と図とを関係づける」資質・能力を高める場面であること意識できているかが鍵ではないかと思う。そのためにも、教科を横断する思考スキルについて研修が必要であるがこれにはすぐにはできないと思う。</p>	<p>②今回の調査における子どもの表れ</p> <p>8番1、2 ふだんからローマ字を読んだり書いていたりして慣れていないければ、ローマ字を正しく書くことはできないと思われる。 (子供の表れ) ・ローマ字表記とローマ字でのパソコン入力との違いがあまりない。 ・大文字、小文字の表記が正しくできず、促音の表記の仕方があまい。</p>	<p>③今年度、どのように「振り返り」を実施したか</p> <p>ローマ字表記とパソコン入力との違いに再度確認した。 ローマ字表記(拗音、撥音、促音、長音)の仕方を復習した。</p>	<p>④②③から考えられる「①昨年度の取組」における成果と課題(A)</p> <p>昨年度の取組は、本問題に対応していないが、「漢字チャレンジ」を行うことで、漢字の習得は図られていた。そこで、「漢字チャレンジ」に、ローマ字の問題も取り入れていくとよいと考えられる。</p>	<p>⑤ 今回の調査における課題(B)</p> <p>既習内容をまんべんなく振り返り、繰り返し練習することで確実な定着を図っていくことが大切だ。ローマ字表記とパソコン入力との違いを明確にして指導する。</p>	<p>⑥ 課題(A)と課題(B)から考える今後の取組</p> <p>既習内容を繰り返し学習する機会がもてるように、漢字チャレンジや家庭学習の充実を図る。</p>
<p>国語A</p>	<p>2番 二 (1) 目的や意図に応じて、グラフを基に自分の考えを書く問題である。条件に合った文章を書くことが難しい。 (子供の表れ) ・グラフの読み取りはできているが、文の主語が抜けている。 ・成果を受けて課題が書かれているので、成果が書かれている部分も読み取っていかなければならないが、課題の部分のみに着目して解答している。適切に書き表せない。</p>	<p>次の日に学校がある場合とない場合を比べていることをおさえた。 成果のまとまりの二文目に着目し、「何が、どうした」が書かれていることをおさえた。そして、課題についても「何が、どうした」を明確にして書き表さなければならぬことを指導した。</p>	<p>国語科の学習で図と文章とがどのように対応しているかを確かめながら指導したことで、グラフと文章を照らし合わせて読むことができていた。しかし、読み取ったことを分かりやすく書き表すことができない児童が多い。</p>	<p>自分の考えを書こうとする意欲はあるが、字数や使う言葉などの条件に合った表現力が身につけていないことが課題である。</p>	<p>条件を与えて書く機会を設定する。国語科だけでなく、他教科でも行う。 文章全文を読み通して内容を把握する力をつけるために、新聞記事などを読むようすすめる。 書いた文章を空欄に当てはめ、全文を通して読み返し、言いたいことがよく分かるか確認する活動を設定する。</p>	<p>基礎的な知識技能を生活の場面に結びつけて指導したり、練習問題の場面で取り上げたりする。 正答を出すことをゴールにせず、そこに至る過程を説明できることを目標に、指導方法を工夫する。</p>
<p>算数A 数学A</p>	<p>「計算チャレンジ」の継続 少人数指導やT-T指導等、指導方法を工夫し、個別指導を徹底していく。 自分の考えや筋道をたててノートに書く機会を増やす。 相互交流や皆の前で自分の考えを説明する機会を増やす。 学校だけでなく、家庭にも働きかけ、家庭学習の充実を図る。 図形の性質にかかわる学習を系統をおさえて指導する。また、その性質を使って作図をするなど活用する時間をつかりとつて、図形の性質について習熟させる。 各学年で、教科書の図形に関する発展的な学習や作図する活動を確実に行う。 単紙に問題文の中の数字を操作するだけで答えが出ないような問題を、発展的な学習として取り入れていく。</p>	<p>一(1)口÷0・8 商の大きさについて正しいものを選ぶ 「わる数がより小さいときの商はわられる数より大きくなる」ということは、知識として理解できているが、聞かれ方がいつもと違うと問題に対応できない。 九(2)店員と乗っている人数の割合 1をこえる割合を考える場面が日常生活に結びかない。 (子供の表れ) ・わる数がより大きい時と小さいときの商とわられる数の関係が理解できていない。 ・もとにする量が何かを適切にとらえられていないため、何を1としてみたらよいかわかっていない。</p>	<p>正答率の低い問題を取り上げて、解説するとともに、生活の場面等に結びつけて考えさせた。</p>	<p>計算チャレンジを複数回行ったこと、計算力に定着が認められた。 少人数指導により、個別に支援を行い、児童のつまずきに気づき、理解できるように個々の実態に合わせた指導ができたので、基礎学力の定着につながった。 「正答が出せればよい」「計算処理ができればよい」という指導ではなく、どうしてそうなるのかなど、自分の言葉で説明できるようにしていく必要がある。</p>	<p>普段とは違う角度から問題を問われると、対応できないことがある。</p>	<p>数式に対応することばの式の指導を、授業の中に取り入れる。 2人ペア、3人グループなどで、各自の考えを交換したり、自分たちの方法をまとめたたりする活動や、授業の中に取り入れる。</p>
<p>算数B 数学B</p>	<p>二(3) 式の中の数字が何を表すのか言葉に変換することを普段やっていないとできない問題である。 (子供の表れ) ・説明するための語彙をもっていない、特に「ハードル」「台あたり」という言葉が出てこない。単位量についての理解や意識が薄い。</p>	<p>ハードルの問題(図)をもとに、自分たちのハードル走の経験と結びつけて解説し、適切な説明の仕方について指導した。</p>	<p>相互交流で自分の考えを説明したり、ノートに筋道立てて考えを書くようにしたこと、問題に粘り強く取り組めるようになり、無答が減った。 図形の性質を押さえた学習指導を心がけたが、基本的な作図はできても発展的な問題には活用できていない。</p>	<p>説明するための語彙が少ないこと。 式を文章化する(ことばの式)ことをしていないこと。</p>	<p>数式に対応することばの式の指導を、授業の中に取り入れる。 2人ペア、3人グループなどで、各自の考えを交換したり、自分たちの方法をまとめたたりする活動や、授業の中に取り入れる。</p>	

平成 28 年度全国学力・学習状況調査結果（湖西市）

湖西市教育委員会

調査結果について、静岡県標準通過率と併せて、湖西市の子どもたちの様子をお知らせします。

＜小学校＞教科に関すること

※標準通過率とは・・・

標準通過率とは、学習指導要領に示された内容について、どの程度の水準に達していることが望ましいかを示す数値です。問題のねらいを踏まえ、過去の類似問題の全国正答率を参考にしながら、子どもたちに通過してほしい値として、静岡県が独自に設定しています。

〇よいところ

教科	出題の趣旨と設問の概要	正答率 (市)	標準 通過率
国語	○漢字を正しく読む。(お年玉を貯金する)	98.5	90.0
	○目的に応じて、図と表とを関係付けて読む。 ・公園案内図とパンフレットにある表とを関係付けて読み、希望に合うものを選択する。	94.1	90.0
	○平仮名で表記されたものをローマ字で書く。 ・ローマ字で「りんご」と書く。	70.2	60.0
	○目的や意図に応じて、グラフを基に自分の考えを書く。 ・「早ね早起き」活動の課題について、図の結果を基に書く。	63.0	45.0
算数	○繰り下がりのある減法の計算をすることができる。 ・ $905 - 8$ を計算する。	94.1	90.0
	○不等号の理解 ・二つの数の大小関係を表す不等号を書く。	98.0	90.0
	○直方体における面と面の位置関係を理解している。 ・直方体において、示された面に垂直な面を選ぶ。	90.9	85.0
	○示された条件を基にほかの正方形について検討し、同じきまりが成り立つかを調べる。 ・1辺が9cmの正方形の縦と横の長さを変えたときの面積を求める式と答えとして、ふさわしい数値の組み合わせを書く。	94.3	90.0

△もう少しがんばりたいところ

教科	出題の趣旨と設問の概要	正答率 (市)	標準 通過率
国 語	△聞き手の表現の仕方をよりよくするために、助言する。 ・ルール説明の表現について、助言した内容として適切なものを選択する。	69.6	80.0
	△質問の意図を捉える。 ・スーパーマーケットの店長への質問の意図として適切なものを選択する。	56.1	65.0
	△グラフを基に、分かったことを的確に書く。 ・「早ね早起き」活動の成果について、図の結果を基に書いた内容として適切なものを選択する。	40.7	60.0
算 数	△割り算の除数、被除数、商に関する問題を解く。 ・ $\square \div 0.8$ の商の大きさについて正しいものを選ぶ。	65.6	85.0
	△数値の意味を解釈し記述する。 ・目標のタイムを求める式の中の 0.4 や 0.3 が表す意味を書く。	15.2	45.0
	△式の意味の説明を記述する。 ・式の意味を、数や演算の表す内容に着目して書く。	9.6	50.0

◆成果と課題

国語では、基礎的な知識は定着しており、「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「言語についての知識・理解・技能」といった評価の観点で見ると、「読む能力」「言語についての知識・理解・技能」がより秀でています。しかし、「話す・聞く」場面においては、相手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って質問することや、「書く」場面では、自分の書いた文章を相手が読んで理解しやすいかどうか確かめ、修正していくことが苦手です。

算数においては、「数と計算」の領域で基礎的な知識及び技能が身につけています。「数量関係」「図形」では、基礎・基本である知識は定着しています。しかし、それらの知識を活用し、数学的な考え方を問われる記述式の問題（考え方を説明したり、既習事項をいかして数値の表すものや式の意味を書いたりする）になると、条件にかなっていない、言葉が足りないなど、論理的に表現することが難しいようです。

◆今後の取り組み

湖西市の早期対応として、6月までに「振り返り」を各学校で実施しています。

- 問題文を子どもと教員が一緒になって丁寧に読み、出題における意図を確認した。
- 苦手とした問題について、再度復習した。
- 普段の授業の中で、設問と似た学習場面を意識的に取り入れた。

今回の調査結果については、各学校で分析をすすめています。これまでと同様に、「自校の実態を再度把握し、授業改善に活かすことで子どもたちの力を伸ばす」ことに取り組んでいきます。

以下が、1学期末に小学校から報告されている授業改善における取り組みの抜粋です。

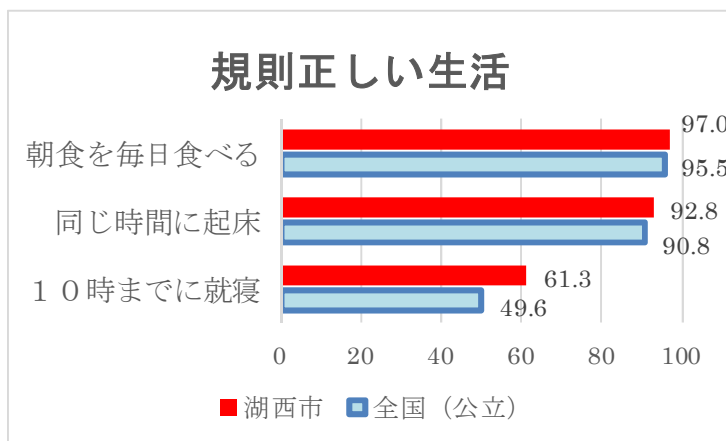
《各小学校より》

- ・資料や問題文を読み取る力をつけることは非常に大切である。長文をきちんと読むことと、問題を適切に捉えることとを関連づけて取り組んでいく。
- ・国語以外の教科でも条件に沿って文章を書く活動を継続して取り入れていく。
- ・文章を校正する視点を児童に明確に示す。
- ・二次的、三次的な資料の読み取りが難しいので、読書の機会を確保し、語彙を増やしていく。
- ・自分の考えを順序立ててノートに書いたり、説明したりする活動や友達の考えと自分の考えを比べ、その違いを見つける活動を積み上げていく。
- ・基礎的な知識・技能を生活の場面に結びつけて指導し、練習問題に取り入れる。
- ・数式に対応することばの式の指導を授業に取り入れる。
- ・正答にいたる過程が説明できるように指導する。

その他、様々な取り組みが報告されています。湖西市教育委員会では、子どもたちの実態と各学校の取り組みを湖西市として共通理解するために学力向上連絡会を開催し同じ思いで湖西市の子どもたちを育てたいと考えています。

<小学校> 質問紙調査に関すること

質問紙には、「家庭や学校の生活について」「学校での学習について」等、合計85の質問がありました。湖西市の子どもたちのよいところ、がんばってもらいたいところを紹介します。

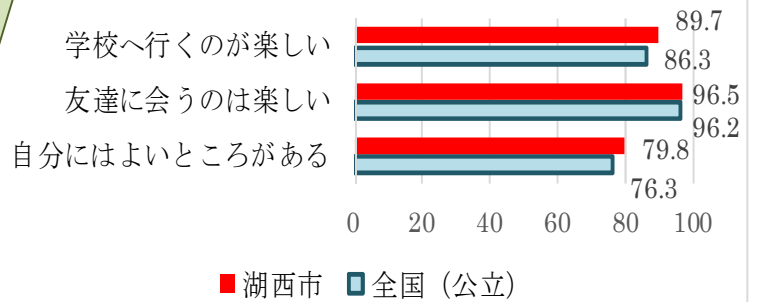


【規則正しい生活を送っています】
 生活の基本である「食事・睡眠」において、きちんとした習慣がついていることがわかります。「毎日、しっかり朝ごはんを食べ、決まった時間に寝て起きる」ことは、子どもの学力定着につながります。

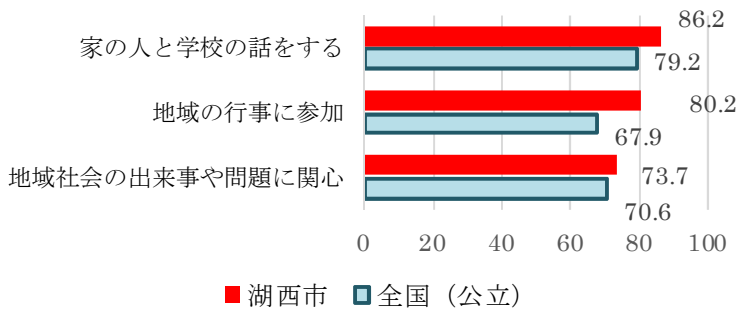
【自分のよさを自覚し、楽しい学校生活を送っています】

今回の調査では、静岡県の分析として「子どもたちの自己肯定感」が話題になりました。「自分にはよいところがある」と答えた湖西市の子どもたちの集計値は全国・県の値を上回っています。自分のよさを認めることは、成長につながります。学校・家庭・地域で見守りましょう。

自分・友達に関すること



家庭・地域に関すること



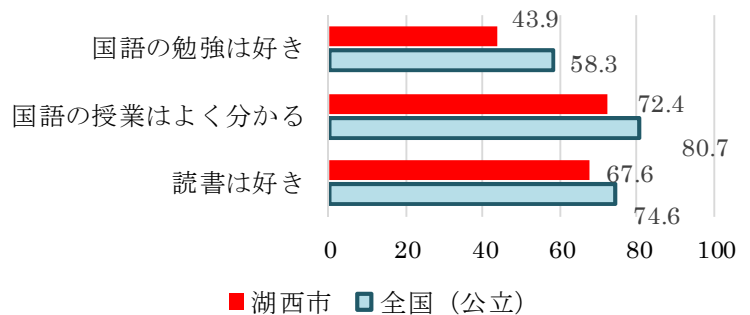
【家の人や地域の力は大きいです】

家庭での会話があることで、子どもは安心感を得ます。また、思いや考えを伝える事をおして国語力を育みます。地域の行事参加の集計値から湖西市の子どもたちが、地域とよく関わっていることがわかります。また、地域社会で起こっている問題や出来事への関心をもつ子どもの集計値の値も全国を上回っています。

【国語の学習を好きになろう】

「国語の授業はよく分かる」という子どもが7割を超えているにもかかわらず、「国語の勉強は好き」と答える子の値は、全国と比べても低い結果となっています。読書機会の充実と「よく分かり、楽しい授業」を学校もめざしていきます。

国語学習に関すること



学びの基礎 7つの取り組み

愛情と思いやりあふれる家庭づくり

湖西市では、「学びの基礎7つの取り組み」を発達段階に応じて設定し、推進しています。食事や運動、睡眠など、学びの基礎となるのは基本的な生活習慣です。今後も家庭と学校、地域が連携して、子どもたちの学びの礎を築いていきましょう。御協力をよろしくお願い致します。

- ことばを使って思いを伝えましょう
- 進んであいさつをしましょう
- 早寝・早起きの習慣をつけましょう
- テレビやゲームの使用は、ルールを守りましょう
- 体を動かして体力をつけましょう
- 友だちといろいろなことにチャレンジしましょう
- 朝ごはんをしっかり食べましょう

平成28年度全国学力・学習状況調査結果（湖西市）

湖西市教育委員会

調査結果について、静岡県標準通過率と併せて、湖西市の子どもたちの様子をお知らせします。

＜中学校＞教科に関すること

※標準通過率とは・・・

標準通過率とは、学習指導要領に示された内容について、どの程度の水準に達していることが望ましいかを示す数値です。問題のねらいを踏まえ、過去の類似問題の全国正答率を参考にしながら、子どもたちに通過してほしい値として、静岡県が独自に設定しています。

〇よいところ

教科	出題の趣旨と設問の概要	正答率 (市)	標準 通過率
国 語	○文脈に即して漢字を正しく読む。 ・封筒を開ける	98.8	90.0
	○伝えたい事柄が相手に効果的に伝わるように書く。 ・パンフレットの見出しを他の見出しの書き方を参考にして書く。	84.8	70.0
	○伝えたい事柄について、根拠を明確にして書く。 ・質問に対する答えが明確になるように適切な言葉で書く。	83.9	70.0
数 学	○方程式が表す関係を読み取ることができる。 ・ $2x + y = x - y = 3$ から x と y の値を求めるための連立方程式を完成させる。	94.3	80.0
	○四角柱の構成を理解している。 ・四角形をその面に垂直な方向に一定の距離だけ平行に動かしてできる立体の名称を書く。	78.8	70.0
	○与えられた情報から必要な情報を選択し、的確に処理する。 ・A車を購入して10年間使用するときの総費用を求める。	70.7	60.0

△もう少しがんばりたいところ

教科	出題の趣旨と設問の概要	正答率 (市)	標準 通過率
国 語	△語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う。 ・適切な語句を選択する。 (会長候補として、白羽の矢が立つ)	51.6	85.0
	△文脈に即して漢字を正しく書く。 ・(今までにないドクソウ的な考えだ)	17.3	75.0
	△互いの発言を検討して自分の考えを広げる。 ・話し合いを踏まえた発言として適切なものを選択する。	59.6	75.0
数 学	△自然数の意味を理解している。 ・-5,0,1,2.5,4の中から自然数を全て選ぶ。	44.8	90.0
	△事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する。 ・A車とB車について、式やグラフを用いて2つの総費用が等しくなる使用年数を求める方法を説明する。	27.9	60.0
	△与えられた式を用いて、問題を解決する方法を数学的に説明することができる。 ・文字を使って手順通りに求めた数から最初に決めた数を当てる方法を説明する。	18.8	50.0

◆成果と課題

国語では、評価の観点で見ると、「話す・聞く能力」「読む能力」は比較的高い数値を示しています。「聞く」学習のなかでは、自分の考えとの共通点や相違点を整理しながら聞くことに難しさを感じています。「言語についての知識・理解・技能」においては、観点のなかで比較するとやや低い数値でした。「書く能力」では、効果的な表現や根拠を明確にして書くことができる生徒が例年に比べて増えていますが、文脈に即して正しい言葉を使うことが苦手でした。

数学においては、2つの等号で結ばれている方程式が表す関係を読み取るなどの理解度は高く、「数と式」における計算は得意です。しかし、関数の問題や記述式の問題（考え方を説明したり、理由を書いたりする）では、数学の用語や性質、式を使って説明することが苦手です。

◆今後の取り組み

湖西市の早期対応として、6月までに「振り返り」を各校で実施しています。さらに今回の調査結果については、各学校、分析をすすめています。それぞれの学校における実態を再度把握し、授業改善をすすめていきます。以下が、1学期末に中学校から報告されている授業改善における取り組みの抜粋です。

《各中学校より》

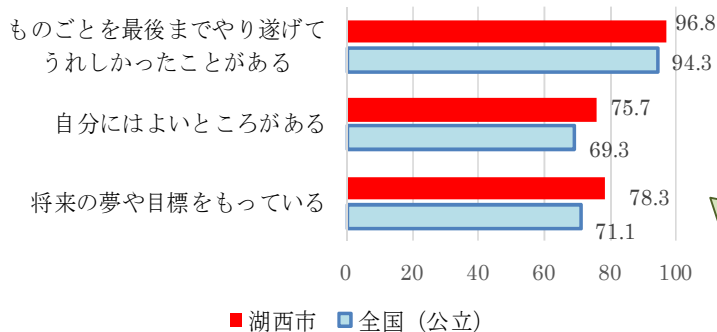
- ・ 語句や文の使い方、文や段落相互の関係などに着目して、読みやすく分かりやすい文章に推敲するような意識付けを図る。
- ・ 条件つき作文を書く機会を増やし、条件の中で自分の意見をまとめる力をつける。
- ・ 字数制限の範囲内で考えをまとめる活動を増やす。
- ・ 言葉の意味について自分の経験と結び付けながら考える力を養う。
- ・ 日常生活でのことを教材に使い、生活の中に数学があることを感じさせる。
- ・ 関数において、小学校からどんな流れで学習をしているか確認し、小中のつながりを意識した授業を行う。
- ・ 他者のつくった式から考えを読み取り、過程から誤りを探す活動も取り入れる。
- ・ 引き続き、意見と根拠を区別して書く活動を取り入れる。

その他、様々な取り組みが報告されています。湖西市教育委員会では、子どもたちの実態と各学校の取り組みを湖西市として共通理解するために学力向上連絡会を開催し、同じ思いで湖西市の子どもたちを育てたいと考えています。

<中学校> 質問紙調査に関すること

質問紙には、「家庭や学校の生活について」「学校での学習について」等、合計 85 の質問がありました。湖西市の子どもたちのよいところ、課題となるところを紹介します。

自分に関すること



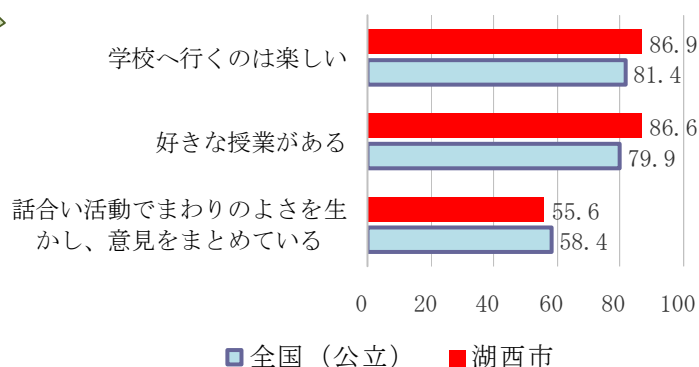
【自分のよさをいかし、夢に向かって】

今回の調査では、静岡県の実態として「子どもたちの自己肯定感」が話題になりました。「自分にはよいところがある」と答えた湖西市の生徒たちの集計値は全国・県の値を上回っています。ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある生徒の割合が多く、このような達成感は困難を乗り越える自信につながります。

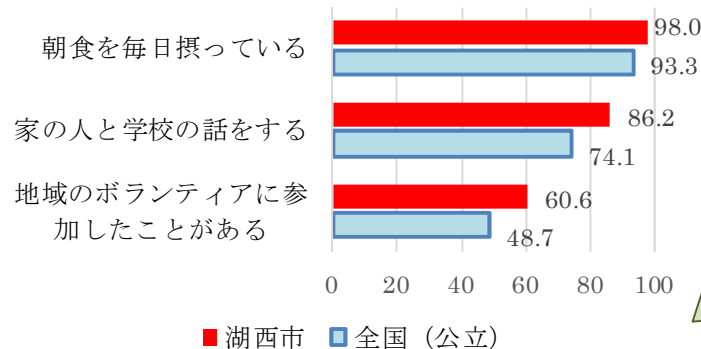
【楽しい学校生活を送っています】

学校へ楽しく行き、好きな授業のある生徒の値が全国・県を上回り、充実した学校生活がうかがえます。一方で、自分以外の友だちの意見にも耳を傾け、よりよい考えにまとめていく面の弱さがあります。「協働的な学び」を学校生活のなかで体験できるように支援していきます。

学校生活について



家庭と地域に関すること



【家庭と地域に支えられています】

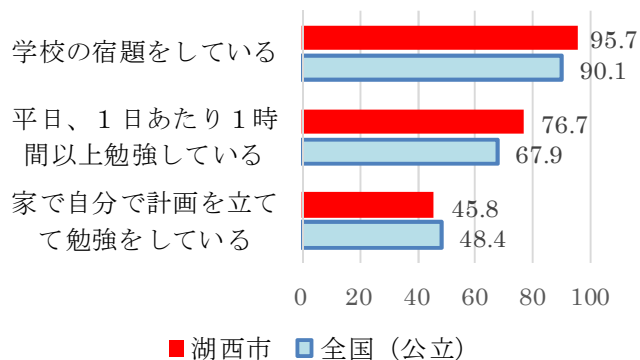
家庭においては、朝食をきちんととり、学校でのことをよく話しています。会話を交わすことは、思春期の生徒たちにとって、心のストレッチ&ケアとなります。

地域のボランティアにも全国と比べるとよく参加しています。

【自律学習は生きる力に】

部活動や各種の習い事で帰宅時間も遅い中学生ですが、毎日の宿題をきちんとこなしています。1日1時間以上勉強している生徒は、76.7%で、2時間以上の生徒も35.4%いました。ただし、自分で計画的に勉強している生徒の割合は半数に達していません。自律学習を身につけることで、「生きる力」が身に付き、将来を主体的に切り拓く可能性が広がります。

家庭学習に関すること



学びの基礎 7つの取り組み

湖西市では、「学びの基礎7つの取り組み」を発達段階に応じて設定し、推進しています。食事や運動、睡眠など、学びの基礎となるのは、基本的な生活習慣です。学力調査の結果からも、生活習慣と学力の相関関係が出ています。今後も家庭と学校、地域が連携して、子どもたちの学びの礎を築いていきましょう。御協力をよろしくお願いいたします。

愛情と思いやりあふれる家庭づくり

- ことばを大切に、自分の考えをもとう
- 健康な体づくりに努めよう
- 笑顔で気持ちよくあいさつしよう
- 夢に向かって、いろいろな体験をしよう
- 規則正しい生活習慣をみにつけよう
- バランスのよい朝食をとろう
- 家族と約束して、テレビやスマホ中心の生活を見直そう

(5) 湖西市立新居小学校(推進校)の取組

ア 研究課題

○児童の課題点と教師の指導の課題点を把握した上で、国語科の授業改善（1年目）と、国語科を核とした教科横断的な視点を持った授業づくり（2年目）に学校全体で取り組む。

イ 推進校としての取組内容

(7) 児童の学力・学習状況に関する課題を把握

- ① 全国学力学習状況調査の自校での採点・分析
- ② 児童へのアンケート調査の実施

(イ) 国語科の授業づくりのポイント（静岡県授業づくり指針）に基づく授業改善（平成28年度）

- ① 国語科の授業づくりについて学年単位で教材研究し、共通理解・共通実践する。
- ② 年間6回の授業研究（大研究）で、国語科の授業づくりを研究する。授業の成果を共有し、各自の授業づくりに生かしていく。
- ③ 一人1授業研究（小研究）により、単元を通しての学習課題と言語活動にかかわる指導について研究を深める。
- ④ 「単元学習デザインシート」を活用して、各学年で事前・事後研修を行い、PDCAサイクルに基づいて実践を積み重ねていく。単元学習デザインシートに記入する項目は、以下のとおり。【資料8】
 - P・・・付きたい力、言語活動、単元構想、評価の計画
 - D・・・授業実践
 - C・・・付きたい力の習得度合い、言語活動の妥当性、単元構想（手立て）の有効性
 - A・・・今後にかかわる改善点裏面（資料）・・・並行読書、成果物、掲示物等の写真
- ⑤ グループ学習やペア学習など、自分の考えを伝え合う交流の場を意図的に設定し、本校児童の課題となる付きたい力の向上を図る。

(ウ) カリキュラムマネジメントの視点に基づく教科横断的な授業づくりの推進（平成29年度）

- ① 国語科と他教科等を連携させて、本校児童に付きたい力に対する指導場면을洗い出す。
- ② 本校児童の課題にアプローチするための横断的なカリキュラムを模索し、指導方法の工夫改善を組織的に行う。
- ③ 年間6回の授業研究（大研究）を通して、横断的視点を持った授業づくりを検討・協議するとともに、その効果を共有し各自の授業改善につなげていく。

(イ) その他の取組

- ① 「分かった、楽しい」という達成感を児童に与える日常的な授業をつくる。
- ② 読書指導の充実や辞書の活用により、語彙を増やし表現できる素地を培っていく。また、各教科や領域をはじめ、全教育活動において伝える場面を日常化することで、表現への抵抗感から喜びへと変容できるようにさせていく。
- ③ 家庭への啓発に力を入れ、家庭学習の見直しを図る。各学年の学習の様子を学年便りや、ホームページ等に掲載する。学校で教えている内容を伝えることで、学習に対する家庭の関心を高め、学校での学習活動と家庭学習とのつながりを共有する。

(オ) 研修成果の検証

2年間の研究を通して、本校児童の課題がどの程度改善されたか、また、本校教師の授業がどのように改善されたかを以下の手段で検証していく。

- ① 児童の学習状況等の各種アンケート
- ② 「単元学習デザインシート」の表れ
- ③ アクティブラーニングの授業設計診断（県総合教育センター作成）による分析
- ④ 授業実践のまとめ
- ⑤ 授業づくりに関わる教師の自己評価
- ⑥ 全国学力学習状況調査における6年生児童の学力状況の分析
- ⑦ 国語科学力調査（3～5年生児童対象：11月と翌年4月）の学力状況の分析

ウ 研究実施計画

平成 28 年度		平成 29 年度	
月	取 組	月	取 組
5	・全国学力学習状況調査 自校採点・分析	4	
6	◇県によるサポートチーム派遣① ・授業研究①<4年>	5	・全国学力学習状況調査 自校採点・分析 ・授業研究① ◇県によるサポートチーム派遣①
8	・校内研修：1学期の実践の共有化 ・学年研修：2学期以降の単元デザイン ◇学校等支援研修：総合支援課 ・28年度全国学力学習状況調査結果の分析・検証・共有化	6	・授業研究② ・授業研究③
9	・授業研究②<2年> ◇県によるサポートチーム派遣② ・学力向上検討会①	8	・校内研修：1学期の実践の共有化 ・学年研修：2学期以降の単元デザイン ・29年度全国学力学習状況調査結果の分析・検証・共有化
10	・授業研究③<6年>	9	・授業研究④◇県によるサポートチーム派遣② ・学力向上検討会①
11	・授業研究④<5年> ◇学校訪問（地域支援課、湖西市教育委員会） ・授業研究⑤<1年> ・国語科学力調査（3～5年生実施）	10	◇県によるサポートチーム派遣③ 研究のまとめ ・実践報告 ・学力向上、授業改善にかかわる成果と課題の検証
12	・学力向上検討会②	11	・研究発表会 ・国語科学力調査（3～5年生実施）
1 2	・授業研究⑥<3年> ・11月実施の国語科学力調査の分析	12	・学力向上検討会②
3	◇県によるサポートチーム派遣③ ・各学年の実践報告、学力向上、授業改善にかかわる成果と課題の検証 ・29年度に向けた研究計画の修正	1 2 3	・11月実施の国語科学力調査の分析 ・2年間の研究のまとめ ・30年度に向けた研究計画

単元名 (5)年 考えを明確にして話し合い、提案する文章を書こう
～クラスをより良くしよう～

単元学習 デザインシート

Plan (単元の見通し)

- 1 付きたい力
 事実と感想、意見などと区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書く(1)ウ
 互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うことができる。
 話すこと・聞くこと(1)オ

Check (単元の振り返り)

- 1 付きたい力の振り返り(単元の目標がどの程度身についたか)
 ・事実と感想、意見などと区別して書くことができるようになった。
 ・自分の考えを提案するという目的に応じて、書くことができるようになった。
 ・それぞれの立場になって話し合うことはできていたが、意見のつながりや深まりとなつと、まだ十分ではない。
 ・計画的に話し合うことができるようになった。

- 2 付きたい力を付けるために位置づける言語活動

クラスをより良くするために、どうすればよいか話し合い、提案書を書く。

- 2 位置づけた言語活動の振り返り(児童の実態と単元の目標に照らして適切だったか)

書くための手段だけでなく、今後の学級生活に生かすという目的意識をもって取り組んだので、意欲的に学習ができた。また、書くことの苦手な児童が多かったが、話し合うことで、書く内容が明確化するとともに、提案書のパターンを示したので、多くの子が一ズに書くことができた。

- 3 単元の流れ(活動内容と手立て)

- 提案書を書く目的
「提案書の内容を実行し、クラスをよりよくなる。」
- 提案書のテーマ
クラスをよりよくする方法を考えよう。
- 第1次 ①単元の見通しをもつ。
②③自分の考えをまとめる。(話題・理由・現状と問題点・解決する方法)
- 第2次(班)
④教科書を使い、話し合いの仕方を学ぶ。＜ABワケンセット方式＞A
⑤班で話し合い、何を提案するか決める。＜ABワケンセット方式＞B
⑥提案書に書く内容を、より明確にするための資料を集める。
⑦グループで話し合い、集めた資料を選択したりまとめたりして、提案書に書く内容を明確にする。
- 第3次(個)
⑧⑨提案書の書き方を知り、書く。(個)＜入れ子方式＞
⑩⑪書いたものを読み返し、修正する。(推敲) 個人→交流→個人(再)
⑫班の代表1点を持ち寄り、提案書ベスト3を話し合い決める。
⑬学習を振り返る。(感想、テスト、アンケート)

- 3 単元の流れの振り返り(手立てが有効だったか)

- ・テーマは、子供たちの生活に密接に関係しており、自分事として意欲的に取り組むことができた。
- ・スムーズに話し合いを進めるために、ABワケンセット方式で行ったことは、子供たちにとってよりよい支援となった。ただし、意見が深まるような手立てをしつかりと考えておくべきであった。
- ・資料を集める時間の見通しや、どのような資料を集めたらよいかという指導が十分ではなかった。
- ・推敲の段階で交流活動を取り入れたことは、様々な意見を聞くことができ、より分かりやすい文章にしていく手立てとなっていた。
- ・教室内に単元計画を掲示したり、大切なキーワードを掲示したりしたことは、子供たちがすぐに振り返ることができてよかった。
- ・教師が提案書例を作り示したことは、良い例となった。

- 4 評価の場面(どの場面で、どのようなことができているよいか)

- ・互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合い、提案書に書く内容を決めることができたか。
- ・事実と感想、意見などと区別するとともに、「クラスをより良くするため」という目的に沿って提案書を書くことができたか。

- 4 評価計画の振り返り(教師が見取ることができたか)

- ・「書くこと」については、子供たちの提案書を読むことで、きちんと評価ができた。
- ・「話すこと・聞くこと」に関しては、6グループ同時に話し合いを展開させてしまったため、見取りが不十分であった。

- 4 評価の場面(どの場面で、どのようなことができているよいか)

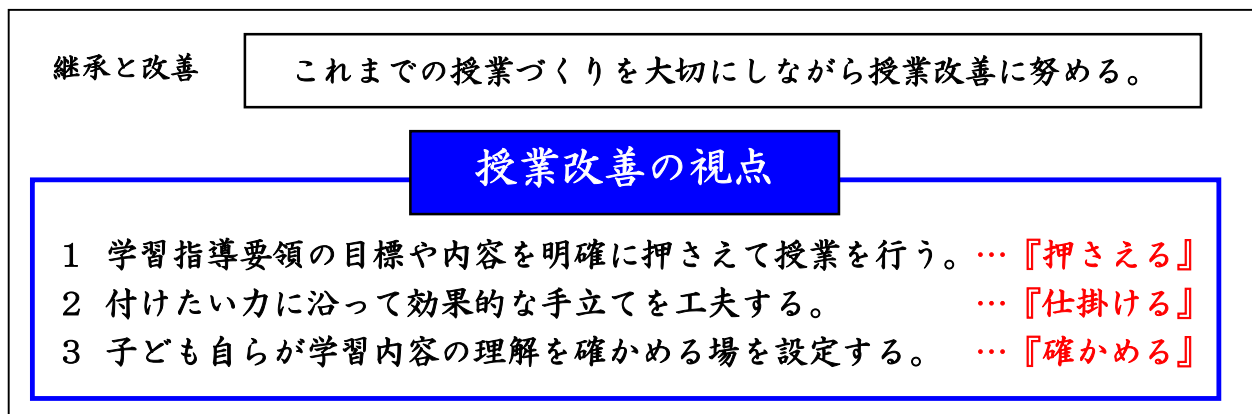
Action (今後にかかわる改善点)

- ・話し合いが深まるような、教師の助言・指導の方法。
- ・自分の意見に説得力を高めるために、どのような資料を集めたらよいかという指導。

4 確かな学力を育むために

(1) 各校における授業改善の一層の推進

平成 25 年度以降、改めて「確かな学力」について問い直し、学校現場の教員が真摯に授業改善に臨み、それが成果に結びついてきた。しかし、これまでの教育は正しいのだから、そのままでもいいといった安易な受け止めはせず、「継承と改善」、「これまでの授業づくりを大切にしながら授業改善に努める」という言葉とともに、一昨年度、県教育委員会が示した「授業改善の視点」3点を改めて確認していきたい。



小学校においては、第一に「学習指導要領の目標や内容から、付きたい力を明確に押さえて、授業を構想し実践する」ことに力を注ぎたい。話し合い活動・子ども主体の授業は、手立てであって目的ではないことを再認識したい。

また、「授業を通して本当に児童が学習内容を理解できたのか、それを生かして課題を解決することができるのか確かめる」ことにも力を注ぎたい。これは、1時間の授業終了時にということもあるが、1か月後、2か月後等、中長期的に確かに身に付いているか確認する必要もある。

中学校においては、これまでも言われてきていることであるが、学習内容を教師が一方的に説明して与えるのではなく、教師の仕掛けによって、生徒が自ら獲得する授業を目指したい。そのために、今後も「話し合い活動や生徒相互の活動を中心とした生徒主体の授業」や「問題解決的な学習を重視した授業」を充実させたい。

なお、学習指導要領の改訂が近づき、「アクティブ・ラーニング」に注目が集まっているが、大切なのは、「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」であり、その具体は、「主体的・対話的で深い学びの実現」である。

今回、改訂によって求められているものは、アクティブ・ラーニングといわれる型の授業を推進することではなく、主体的・対話的で深い学びになっているかといった視点で授業改善を進めるということである。

これを本県の現状に照らして考えると、本県がこれまで進めてきた主体的な学びを促す問題解決的な学習や、人との関わりを大切に「聞き合う、話し合う」といったいわゆる対話的な授業を通して、児童生徒が本当に学びを実感しているか、深い学びに到達しているか確認し、検証することが求められている。

そのため児童生徒の学びを丁寧に見取り、評価をして、個に応じた指導（支援）や授業改善につなげるといった「指導と評価の一体化」を改めて徹底するのが、本県における「アク

ティブ・ラーニングの視点からの授業改善」であり、最も留意すべきことであることを押さえない。

(2) 「P D C A改善サイクル」の共通実践

本調査の取扱いについては、実施要領に「本調査により測定できるのは学力の特定の一部である」と示される一方、毎年出される「全国学力・学習状況調査の結果の取扱い及び調査結果の活用について」の通知では、「本調査の結果は、各教育委員会、学校等において十分に活用され、教育施策の成果と課題の検証・改善や学校における教育指導の改善等に役立てられることが重要です」と示されている。

また、文部科学省は、本調査の解説資料や報告書等を配布し、本調査問題を教材として授業に積極的に活用するように呼びかけている。

本調査は、学習指導要領の求める学力が児童生徒に身に付いているかどうかを把握・分析するために作成された唯一全国規模の調査である。見方を変えれば、教員が本調査問題の出題の意図等から、学習指導要領の求める学力を理解することができる。したがって、本調査問題と結果を、授業や教育課程の編成等に積極的に活用することで、児童生徒の「確かな学力」を育むことに結び付けることができると考えられる。

また、本調査の活用を意図的・計画的、かつ定着させるために、前述した「P D C A改善サイクル」(W-P D C Aサイクル)を県、市町、学校レベルそれぞれにおいて、スケジュール感を共有し、同一歩調で取り組むことが大切である。

(3) 研修の評価と課題に対応した内容の充実

本県においては、教員同士のO J Tを生かした参加型の研修、リフレクションなど、多様な研修方法を取り入れ、充実した研修を進めている。しかし、実施した研修の評価については、従来からの教師同士の評価に留まっており、主観的な評価に偏っている傾向が見られる。

そのため、評価については、有識者の意見を求めたり、数値データに基づく評価を組み合わせたり、児童生徒の意識調査等を取り入れたりして、子どもの「学びの実感」を客観的かつ総合的に評価し、授業改善につなげるようにしたい。

また、本県の課題として小学生の国語、読書に対する関心の低さが挙げられる。このため国語好きな子どもを育てる小学校国語科の授業づくりについて研修を深めたい。

現行の学習指導要領において「言語活動の充実」が言われ、従来の国語科の指導からの改善が求められた。その際、ベテラン、若手を含め、国語科の指導の在り方に迷いが生じたことは否めない事実である。こうした状況を踏まえ、初任者研修において、全ての小学校教員を対象に国語の授業づくりに関する研修を組み入れるなど、小学校における国語科の指導のあり方について共通認識が持てるよう手立てを講じていく必要がある。

(4) 「学びの連結」による家庭学習の推進

児童生徒質問紙調査の結果から、児童生徒の主体的、計画的な家庭学習(予習・復習)については、依然として課題があり、昨年度、保護者向けの動画コンテンツを作成し、学校

と家庭の学びの連結を推進する取組を行った。本年度も引き続き、保護者向け動画コンテンツを作成し、子どもに対する保護者の関わり方を周知している状況である。各学校においては、こうした動画コンテンツを学級懇談会、PTA総会等で活用し、家庭と学校が連携を進めたい。また、学校でも「もっと知りたいな」「自分で調べてみようかな」といった思いを抱かせる授業づくりを進め、子どもの主体的な家庭学習を支援したい。

さらに、平成25年度の同調査で行われた「きめ細かな調査」における「保護者調査」の結果等を見ると、保護者の所得や学歴等から算出した指数である「社会経済的背景（SES）」が低いと平均正答率が低いことや、保護者の学歴への期待、塾などの学校外教育投資がある方が平均正答率が高い傾向が見られることが分かっている。こうした状況から家庭への働き掛けに留まることなく、「社会経済的背景（SES）」が低い家庭に対する行政の支援を併せて行っていくべきである。そのため、県教育委員会では、学校支援地域本部等を核とし、地域の方々や県内大学生等の協力を得て、放課後の学習支援を進めるなど、地域全体で子どもを育む体制を整備したい。

加えて、「しずおか型コミュニティスクール」等の推進を通して「地域とともにある学校づくり」を推進し、学校、家庭、地域が連携し、地域の子どもは地域で育てる機運を一層醸成していきたい。

平成 28 年度学力向上推進協議会設置要項

(趣旨)

第 1 条 この要項は、学力向上推進事業における学力向上推進協議会（以下「推進協議会」という）の設置について、必要な事項を定めるものとする。

(所掌事務)

第 2 条 推進協議会は、全国学力・学習状況調査の結果並びに推進地区、推進校による実践研究を通して成果や課題を検証し、学力向上のための改善プランについて協議、検討を行う。

(組織及び委員)

第 3 条 推進協議会は、学識経験者、関係市町教育委員会、関係学校及び静岡県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）事務局職員で構成する。

2 委員は、学識経験者、関係学校及び関係教育委員会事務局職員のうちから、県教育委員会が委嘱及び任命する。

(会長及び副会長)

第 4 条 推進協議会に会長、副会長を置く。

2 会長は学識経験者、副会長は義務教育課長とする。

3 会長は会務を総理し、推進協議会を代表する。

4 副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

5 会長は必要に応じ前項に定める委員以外の者の出席を求めることができる。

(作業部会)

第 5 条 推進協議会に作業部会を置く。

2 作業部会は推進協議会を補完し、協議・検討事項を調整する。

3 作業部会は県教育委員会事務局職員、推進校研修担当者をもって構成する。

(任期)

第 6 条 委員の任期は委嘱及び任命の日から委嘱及び任命の日の属する年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

2 補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とし、増員した委員の任期は、現任者の残任期間とする。

(庶務)

第 7 条 推進協議会の庶務は、県教育委員会事務局義務教育課において行う。

(雑則)

第 8 条 この要項に定めるもののほか、推進協議会の運営に関して必要な事項は会長が別に定める。

(別表) 学力向上推進協議会委員

1 学力向上推進協議会

	氏 名	役 職
大学	村山 功	静岡大学大学院教育学研究科教授
	益川 弘如	静岡大学大学院教育学研究科准教授
推進地区 教育委員会事務局	菊池 勝義	伊豆市教育委員会学校教育課長
	西川 睦弘	湖西市教育委員会学校教育課長
推進校	飯田 重信	伊豆市立修善寺小学校長
	石田 勝博	湖西市立新居小学校長
推進地域 県教育委員会事務局	林 剛史	義務教育課長
	太田 修司	義務教育課人事監
	三科 真弓	総合教育センター総合支援課長
	秋山 和徳	静岡教育事務所地域支援課総括指導主事
	福與 繁太郎	静岡西教育事務所地域支援課総括指導主事

2 作業部会

県教育委員会事務局	義務教育課
	総合教育センター
	教育事務所
推進校	推進校研修担当者

静岡県の子どもの学力向上のための提言

本県の子どもが、将来、個人として自立し、人との関わり合いを大切にし、社会のために行動できる「有徳の人」として活躍できるようにするために、「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」をバランスよく育むことが重要です。

全国学力・学習状況調査の目的は、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることであり、「確かな学力」の育成につながるものです。

そこで、次の5点について「オール静岡」として取り組んでいくことを提言します。

1 学習指導要領が求める学力をより明確にして、授業改善に努めます

学校は、学習指導要領をもとにした教材研究をより一層深め、「子どもに付けたい力」を明確にして、これまでの授業を大切にしながら、授業改善に努めます。

2 教員の指導力向上に努めます

県・市町教育委員会は、効果的な研修を実施するとともに県内外の特色ある教育実践の情報を提供するなど、教員の指導力向上に努めます。

3 「全国学力・学習状況調査」の問題や結果を活用します

学校は、国語・算数（数学）の問題を解いたり、調査結果を分析したりして、学習指導要領が求める学力を確認するなど、子どもの「確かな学力」を育むために活用します。

4 子どもが主体的に家庭学習に取り組む環境を大切にします

学校は、家庭と連携して、子どものがんばりや努力している姿を積極的に認め励ますなど、子どもが主体的に家庭学習に取り組む環境を大切にします。

5 子どもの学びを支える取組を支援します

県・市町教育委員会は、質の高い読書活動や外部人材を活用した補充学習など、子どもの学びを支える取組を支援します。

平成 25 年 11 月 11 日

静岡県・政令市・市町教育委員会代表者会

〔沼津市、長泉町、静岡市、浜松市、富士市
磐田市、函南町及び県の教育委員会教育長〕

静岡県教育委員会基本目標
『有徳の人』の育成

これまでの授業づくりを大切にしながら、授業改善に努める。

授業改善の視点

- 1 学習指導要領の目標や内容を明確に押さえて授業を行う。…『押さえる』
- 2 付けたい力に沿って効果的な手だてを仕掛ける。…『仕掛ける』
- 3 子ども自らが学習内容の理解を確かめる場を設定する。…『確かめる』

本県では、「どの子どもにも『確かな学力』を育む」ために、学習指導要領に基づいて付けたい力を設定し、問題解決的な学習や関わり合いを大切にしながら授業づくりを進めてきました。このことは、国がいう確かな学力や学習指導の在り方と同じであり、本県のこれまでの授業づくりが確かであった証です。

「どの子どもにも『確かな学力』を育む」ために、これまでの授業実践を大切にしながら、ここに示す「授業改善の視点」を押さえて、日々の授業に臨みましょう。

「確かな学力」の育成に向けた学校への提言

- 1 全国学力・学習状況調査の問題冊子等の活用
- 2 付けたい力の明確化
- 3 読む力の向上
- 4 習得した知識を活用した「書く」活動の充実
- 5 学力階層に応じた指導
- 6 学習内容の定着

「平成 25 年 3 月 学力検証委員会報告書」

静岡県の子どもたちの学力向上のための学校への提言

- 1 学習指導要領が求める学力をより明確にして、授業改善に努めます
学校は、学習指導要領をもとにした教材研究を一層深め、「子どもに付けたい力」を明確にして、これまでの授業を大切にしながら、授業改善に努めます。
- 4 子どもが主体的に家庭学習に取り組む環境を大切にします
学校は、家庭と連携して、子どものがんばりや努力している姿を積極的に認め励ますなど、子どもが主体的に家庭学習に取り組む環境を大切にします。

「平成 25 年 11 月 11 日 静岡県・政令市・市町教育委員会代表者会」

全国学力・学習状況調査

どの子どもにも「確かな学力」を育む

国が求める学力

■確かな学力

「生きる力」の知の側面 「確かな学力」

基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

■学習指導の在り方

- ・基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視する。
- ・言語活動を充実する。
- ・体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視する。
- ・児童生徒の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫する。

「学習指導要領より」

本県が育んできた学力・本県の授業づくり

■確かな学力

教師が、子どもの実態を把握した上で、どの子どもにも学習指導要領等に示された教育内容を適切に指導して評価し、次の指導に生かすことにより、どの子どもにも「確かな学力」を育んでいく。

「よりよい自分をつくっていくためにⅢ P2 より」

■学習指導要領に基づいた付けたい力の設定

授業を計画するに当たっては、常に学習指導要領に基づいて付けたい力を設定するとともに、基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視する。

「よりよい自分をつくっていくためにⅢ P6 より」

■問題解決的な学習等の重視

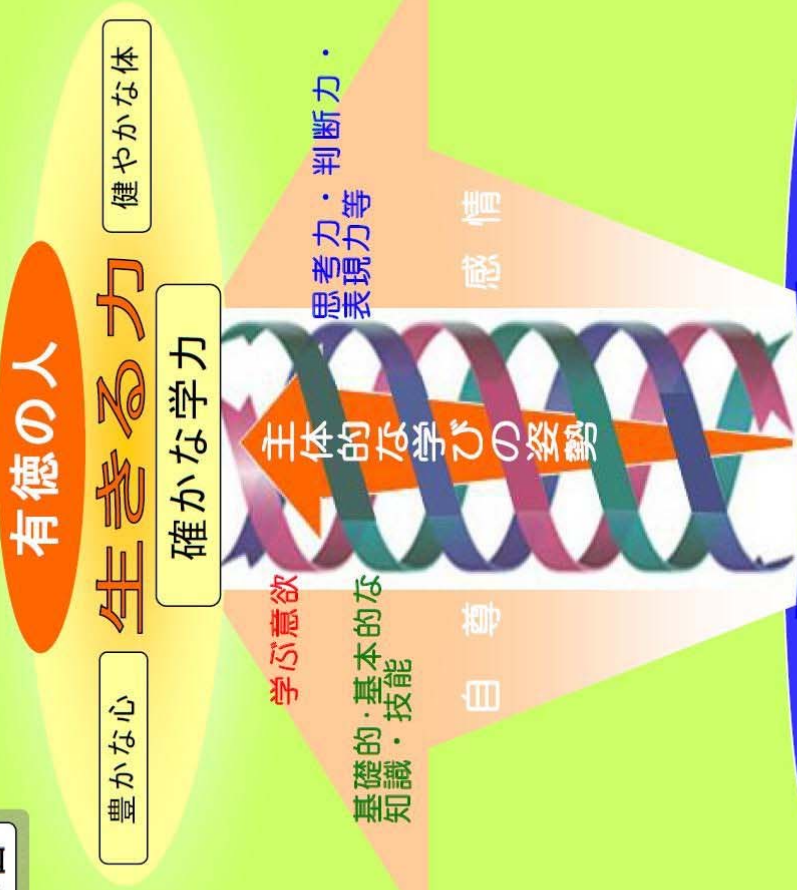
子どもを学びの楽しさに導くこと(教材研究)と子どものよさを引き出すこと(子ども理解)を柱とした授業づくりを進めてきた。また、問題解決的な学習等、ひと、もの、こととの関わり合いを大切に、その中で生まれた問いを生かした授業づくりも進められてきた。

「よりよい自分をつくっていくためにⅢ P1 より」

これまでの授業づくりを大切にしながら、授業改善に努める。

学びの実感を積み重ねる授業

イメージ図



「学びの実感」を積み重ねることを通して、どの子どもにも「確かな学力」を育む

子どもの学びを支える教師の役割

学びの見通しを持ち、意図的に働き掛ける

- 付きたい力に沿って意図的に働き掛ける
- 学びの過程を客観的に捉えられる手だてを講じる
- 順に応じた指導を行う（支援）

子どもを丁寧に見取り、指導に生かす評価を行う

- よさや可能性を見取る
- 付きたい力に照らして表れを見取る
- 学びを継続的に見取る



「教材研究」と「子ども理解」

教師の授業づくりを支える学校体制

- 校内研修で深め、共有する
 - 付きたい力に照らして子どもの姿で語る
 - 研修方法を工夫する
- 教材課程から考える
 - PDCAサイクルを機能させる
 - 多様な資料や客観的なデータから検証する
 - 教育活動の重点化を図る

授業改善の視点

1 学習指導要領の目標や内容を明確に押さえて授業を行う。…『押さえる』

学習指導要領や解説で示される目標や内容は、「どの子どもにも付けないといけない力」であることを、全職員で改めて確認しましょう。

- 学習指導要領に示されている目標や内容を確認し、何を子どもたちに獲得させなければならぬかを明らかにしましょう。
- 付きたい力(単元(題材等)又は本時の目標)が、学習指導要領や解説に示される目標や内容からずれていないかを確認しましょう。
- 付きたい力を子どもと共有しましょう。
- 付きたい力に沿った実効性のある評価方法を設定しておきましょう。

2 付きたい力に沿って効果的な手だてを仕掛ける。…『仕掛ける』

言語活動は、目的や目標ではなく、子どもたちが「付きたい力」を身に付けるための手段であることをしっかりと認識しましょう。

- 付きたい力をもとに言語活動の「目的」「内容」「形態」「方法(時間や役割)」等を検討し、より効果的な活動を設定しましょう。
- 根拠を示して話したり、読み手・聞き手を意識して説明したりする場を大切にしましょう。
- 根拠に基づいて自分の考えを「書く」活動を授業の中に位置付けましょう。

3 子ども自らが学習内容の理解を確かめる場を設定する。…『確かめる』

子どもが何を学び、何を身に付けることができただけかを自分自身で自覚できるようにしましょう。

- 学んだことが確かに身に付いているか、身に付けた力を発揮できるかを確認する場を大切にしましょう。
- 発達の段階を考慮し、「教科言語を使って」「キーワードを用いて」「文字数や時間を制限して」等の条件を与えて書かせる活動を取り入れましょう。
- 習得した言葉や文字を、生活や授業の中で積極的に使うように指導しましょう。

おわりに

「全国学力・学習状況調査が毎年4月に、どの学校においても実施されるのはなぜでしょうか？」

本県においては、全国学力・学習状況調査の目的を踏まえ、特に「学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるため」と明確に答えることができる、また、実際に学校改善・授業改善に活用する仕組みが構築されている学校が、9割を超えています。ここ数年の本県における良好な結果は、学校現場の先生方をはじめ、地域や保護者の皆様、教育行政に関わる方々等「オール静岡」による子どもたちの学力向上に対する意識の向上とその取組の成果であったと感じています。また、本調査が学習指導要領の求める学力が児童生徒に身に付いているかどうかを把握・分析するために作成された調査であることから、義務教育9か年を通して子どもたちの「学びの実感」を大切に作る授業づくりを軸とした本県教育の方向性の確かさを感じ取ることができます。

本県の小学校6年生の皆さんには中学校生活へ向けての第一歩を、中学校3年生の皆さんには新たな進路へ向けての第一歩を、これまでの学びを土台とし、自信を持って踏み出していいただきたいと願っています。

さて、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 平成28年8月26日）においては、我が国の子どもたちの課題として、「学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくという面から見た学力」が挙げられています。

本報告書で述べてきたように主体的な学びを育むことについては、本県の課題とも重なります。こうしたことから、今後は、本県が大切にしてきた「学びの実感」を伴う魅力ある授業づくりを継承していくことと共に、目の前の子どもたちの学びの姿からの授業改善、多様性と変化を常とする現代社会において子どもたちに求められる資質・能力といった視点からの授業改善にも取り組んでいく必要があるのではないかと考えます。

本報告書が、本県の子どもたち一人一人に確かな学力を育むための授業改善に生かされることを切に願います。